

78-69/A
1200501293250

78
69



始



Nov. 1969

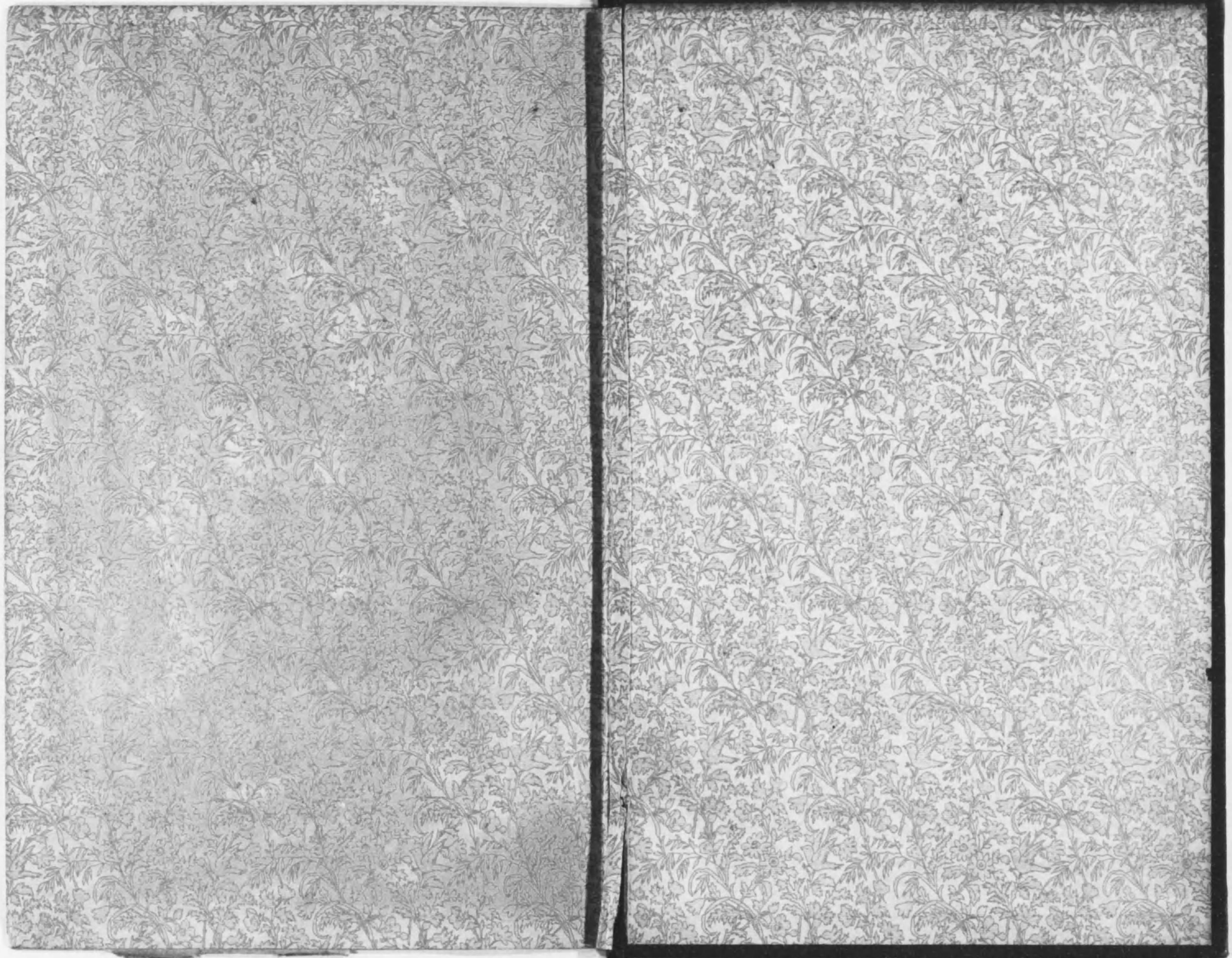
78-69



1210501291251



戶澤姑射
淺野馮靈
共譯



文學士
戶澤姑射

譯

沙翁全集

第四卷

才七口

發兌

大日本圖書株式會社

明治三十三年九月四日版



序

譯者今より七八年前、雜誌「太陽」の文藝欄に、本篇の譯稿を寄せしことあり、今に到りて一見すれば疎漏杜撰殆んど誦するに堪へず、我ながら當時の大胆に驚かざるを得ざる程なるが、今復び本譯を公にするに當りては、改竄校訂殆んど完膚なしと云はむよりは、寧ろ新たに譯出したりといふを以て、適當と思ふに至れり、然れども譯者は、尙ほ此稿を以て自ら満足すべき程度に達したるものとは思惟せず、否な數年の後鉛版を更ふるの時機來らば、更に改竄校訂殆んど完膚なからしめ、以て數年前の大胆に驚

くこと、又今日の如きことあらむを恐る
 序ながら、沙翁全集第一巻發刊以來、雜誌に新聞紙に、大方の識
 者より、幾多獎勵の辭と、眞摯なる訓諭とを辱うするを得たるは
 感佩に堪へず、譯者は永く服膺して大に反省する所あらむこと
 を期する者也

明治三十九年三月

譯者

オセロの悲劇解説

刊行の年月

此脚本の初めて刊行せられたるは、千六百二十二年にして第一クォ
 ト版是也、然れども此第一版は、種々の點に於て不完全なる所多かりしが、
 其翌二十三年に出でたる、第一フォリヲ版(初めて出でたる沙翁全集)に至り、初めて略
 ぼ完全のものを得たりと稱せらる、其後千六百三十年に出でたる第二ク
 ォート版は、此第一フォリヲ版に依て訂正せられたるもの、如しといふ、
 第三以下のクォート版は、皆其第二クォート版の翻刻に過ぎずとぞ、され
 ば、オセロの場合に於ては、クハイト版よりも、フォリヲ版を以て正しき稿
 本となすが如し

脱稿の年月

脱稿の年月、即ち此脚本が初めて舞臺に上せられたる年月に關しては、古來幾多の議論ありて、分明ならずと雖も、マロンの千六百〇四年説を以て、略ぼ當を得たりと考ふる學者多きが如し、若し此説にして誤りなくんば、此篇の出でたるは、ハムレットより後ること二年、キングリアに先だつこと一年、又マクベスに先だつこと二年、沙翁が四十一歳の時にして、彼が劇才、今や其頂上に達したる頃の作といふを得べし、宜なり、オセロを以て沙翁が悲劇中の最大傑作なりと稱するの評家あることや

材料の出處

伊太利人デラルデ、シンシオが百物語中の一を材料として脚色したるものなり、此物語は千五百六十五年、シ、リー島の一市にて、初めて發見せ

られたるものなれど、沙翁は原書に依て之を讀みしか、將た譯書に依りしかは不明なるが、英譯書は、沙翁の生存中、一も出でたるものなかりしといふ、尤も佛譯及び西班牙譯は、オセロ以前既に存在したるが如し

但しシンシオが物語たるや、甚だ簡單疎漏にして、人名の如きも、唯一のデスデモナなる名を擧ぐるのみ、其他の人物は皆な無名にして、たゞムールと呼び、副官と呼び、旗手と呼ぶのみ、各人特殊の性格の如きは、沙翁の手を経て、初めて、まかく顯著なるを得たるや、いふ迄もなし、大悲劇發展の動機、順序、さては、様々に變化する人情の機微を描ける等の事、皆亦沙翁獨特の手腕と知るべし

物語の荒筋に於ては、大抵原作に従ひたれども、其始と終とに於て少しく異なる所あり、殊に終に於て原作にては、デスデモナを殺せしは、イア

ゴロにして、オセロにあらず、オセロは只だ傍觀せしのみ、又殺害の方法は、靴下の中に砂礫を盛りたるものにて毆打し、遂に死に至らしめ、天井の一部を其上に墜落せしめ、之が爲め死したるやうに粧ひ、之にて一時はまんと人目を欺き了せしが、オセロは愛妻を失ひし心の苦痛に責められて、半ば狂氣の狀に陥り、イアゴロを憎むこと甚だしきに至り、遂にイアゴロの官職をさへ奪ひしかば、イアゴロ怒つてカッシオの許に奔り、巨細の事實を懺悔するによりて、遂に大破綻を生ずるやうに出來居れるなど、是れ沙翁の脚本に異なる所なり、又ロ德里ゴロなる人物は、全く沙翁の創意に出でたり、左に沙翁が脚本即ち本篇の梗概を記述し、本文を讀まむとする者の爲めに、豫め結構の大躰を知るの榮となさむ

梗概

(第一幕)

第一場 伊太利の獨立市なる、ゼニス市の街頭、夜既に闇けて深更に垂んとしたる光景の中、同市の若紳士ロ德里ゴロなる者と、同市の雇武官、ムール人(亞弗利加の黑人種)オセロが旗手(旗手は副士官の次位)イアゴロなる惡漢との對話にて幕明く、ロ德里ゴロは、兼て元老院議官アラバンシオの一人女デスデモナの姿色に迷ひ、何時かは手に入れ我が本望を達せむと欲すれ共、頑固一徹のアラバンシオは、斷然彼が申込を退け、容易に承引すべくもあらぬを見て、其周旋をイアゴロに依頼し、其報酬として多額の金錢をイアゴロの乞ふが儘に與へ、以て徐ろに機のを待ちしが、豈に圖らむや、デスデモナは今夜父の家を奔り、密かに云替したる黒人オセロと結婚の式を擧げむとは、かくと聞き、落膽と憤怒とに焦ち立つたるロ德里ゴロ、端なく

今しもイアゴーに出遇ひたるを幸ひと、日頃の頼みを反故となし、むざむざ彼女を他人の奪ひ去るに任せたるイアゴーの不實を責め、且つ日來はオセロを憎み居るやうに云ひなせしが、今夜彼が彼女を連れ出せしを幫助、少くとも黙認せしを見れば、彼が下役を勤むるだけに、オセロを無二の主君と頼み居るなるべしと恨むに、イアゴーは辯解して曰ふ、否々今夜の事全く予は聞知せざりしなり、又オセロを憎むの念は、嘗て語りし通りなり、予は彼が副官たらむと欲し、然るべき人を以て申込ましめたるに、予が願を容れず、彼の無能の^{カッシオ}を登用して副官となし、予は漸く旗手たるを得たるのみなる恨めしき表面こそ、無二の主君とも^冊冊け、そは彼を^陥臺として世に立たむが爲め、彼に事ふるは、即ち自身に事ふる爲め、要するに、予を以て見懸通りの男となす勿れと説くに、^{ロ德里ゴ}ロ德里ゴ、然らば差當り

如何にせば宜からむといふに、今より直ちにデステモナの父ブラバンシオの館を音づれ、此由を告げ知らせ、彼を煽動してオセロ新夫婦が歡樂を妨害せしめむと勸む、乃ち二人相携へて、ブラバンシオが館の前に至り、大聲を發して彼が眠を覺まし、女^{イアゴ}が出奔の趣を告ぐ、ブラバンシオ初めは之を信ぜず、大に怒りしが、遂に其事實なるを知り、家の子郎等を促し立て、ロ德里ゴを案内として、オセロが行衛を搜索せんとして出立つ、此間にイアゴーは、オセロが宿へ赴き、何喰はぬ顔して居たりけり

第二場 同じく他の街頭、オセロが宿所の前にて、オセロとイアゴーと談話をなし居る所へ、松明振照して進み來る若干の人数あり、イアゴーは之を見て、これぞブラバンシオが、女の行衛を尋ぬる追手ならむと云ひ居る中、やがて近づくを見れば、こは思ひも寄らず、カッシオ并に他の役人共若

干、ゼニス公(同市君)の命を奉じ、至急の御前會議に、オセロを參會せしめむとて、迎への爲めに來りしなり、蓋し土耳其の軍艦、ゼニスの所領たるサイラス島へ押寄する模様あり、事跡甚だ急なる旨の注進あり、爲めに夜深にも拘らず、遽かに會議を召集するには至りしなり、オセロスくと聞き、左らば即刻參會せむと、身仕度なせし處へ、こたびこそブラバンシオの一行、ロ德里ゴを案内とし、手にく松明武器を携へ出來りしが、ブラバンシオ大聲擧げ、オセロこそ魔法遣なり、法の禁ずる妖術をもて、我女を欺瞞したるに、相違あらじ、左らずば心弱き乙女の身をもて、人も厭ひ恐るゝ、黒人、ムールに身を任すの謂はれなし、かゝる邪道を修むる者を、此儘には放ち置き難し、物共打懸りて取制へよ、引立て行かむといきまくを、オセロ徐ろに遮りていふ、されど如何にせん、至急の御前會議にとて、召されし身な

り、此まゝ、貴意には従ひ難しと、折しも居合せたるカツシオの一行、非常會議のあらましを語り、ブラバンシオが館へも召集の使者向ひし筈なれば、閣下も速かに登營せらるべしと告ぐ、ブラバンシオこれにて驚き呆るゝこと暫らく、懸て一同出て、行く

第三場 會議堂の大廣間にはゼニス公を初めとし、元老院議官大勢卓を圍み、土耳其艦隊の隻數、襲撃の地點に就て談論しつゝある處へ、ブラバンシオ、オセロ、イアゴ、ロ德里ゴ等參着、公はオセロに向ひ我等は即刻卿を煩はし、土耳其軍の防禦を講ぜざる可らずと述べ、更にブラバンシオに向ひ、今迄卿の參會なき爲め、有益なる卿の助言を聞くを得ざりしは、殘念なりし由をいふに、ブラバンシオ此處ぞとばかり乗り出し、否とよ某こそ閣下の御助力を願はては、叶はぬ事あり、今夜かく某が登營したるは、重要な

る國事の爲めにもあらず、如何なる大事も、現在の某が、一身の悲嘆を忘れしむるに足らずと嘆くを、そは何事ぞと問はれて、某が女は一悪漢の爲めに、妖術をもて欺かれ、父を棄て彼が許に奔りたる由を告ぐるに、左らば其悪漢を捕へ、卿の権力もて、國法の許す限り、嚴罰を加ふるが宜からむといへば、其悪漢こそ誰あらむ、これなるオセロなりといふに、一同愕然としてたゞ呆るゝ斗りなりしが、公はオセロに問うて曰く、卿には之に對して辭ありや否やと、オセロ答へて曰く、某これなる老人の女を連れ出し、結婚なしたるは事實なり、然れども、果して妖術を用ひて、女の心を迷はし、いや否やは、此戀の成立を一通り、御聞下さらば、忽ち明瞭なるを得べし、たゞ武人禮に嫺はず、大宮人の雅びたる辯舌を有せざるを恨むと、議官の一人乃ちオセロに乞うて曰く、願くは其戀物語を聞くを得んと、オセロ答へていふ

先づデスデモナを召喚し、彼女をして彼女が父の前にて、一伍一什を語らしめよと、公は直ちに使者に命じてデスデモナを伴ひ來らしむ、さて彼女が參着を待つ間、オセロは其大略を語りていふ、彼女が父ブラバンシオは、日來某を愛し、某を館に召させ給ひて、某がこれまでの經歷、攻城野戰の數々、自ら歷廻りし諸國、嘶などを打聞き、樂みとせられたるが、デスデモナ將た某が物語に痛く身を入れ、その聽聞に執心の様子なりしが、家事の爲めに屢ば中坐、聽聞意の如くならざるを察し、或日別に彼女の爲めに、特に某が身上、嘶をなしたりしに、某が少壯の折の痛ましかりし身上、危うかりし冒險の談などには、涙を流して耳傾けられしが、聽て其物語の終りし後、某が得たる報酬こそ、即ち彼女が愛情にてありけるなり、某が用ひし妖術とは、即ち是のみと、此時既にデスデモナは伴はれて入來りしが、ブラバンシ

オは急ぎ彼女に向ひ、汝は果して少しなりともオセロを戀ふか、汝が尤も
多く服柔の義務を負ふは汝の父にあらずや如何と、デスデモナ答へて曰
く、此日來教育の御高恩敢て忘るべくもあらねど、其昔我母の生みの父御
を外にして、父上の御許に奔り給ひしやうに、今は妾もオセロが許に奔り
し上は、先づ何人よりもオセロに従ふが女の義務にやあらむと、ブラバン
シオ斯くと聞いて、今は全く絶望の淵に陥り、さては女さへさる心にてあ
りけるか、よし／＼今は女に用なし、最早浮世にも用なき身なり、此上は早
やく國事の御談合を始められよと、是に於て公はオセロに向ひ、土耳其
の軍勢サイブラスに寄する由を告げ、さてオセロを以て彼島の總督とな
せば、土耳其軍防禦の儀は卿督て引受けられよといふに、オセロ直ちに其
旨を了し、他の議官よりの請求もありて、左らば今夜、これより直ちに彼地

へ向け發足せむと決し、さてデスデモナをば如何にせむとの問題起りし
に、デスデモナは自ら進みていふ、妾はオセロの心を愛するもの、顔貌の戀
をなすものならず、さてかく夫婦となる上は、夫が戰場の千辛萬苦を外に
見て、安閑と家に在るべきならず、願くば妾をも戰場に伴ひ給へと、公も其
意を諒とし、オセロ將た喜んで之を諾しければ、乃ち明日イアゴーに護衛
せられ、イアゴーの妻エミリアを侍女となし、オセロの後を追うてサイブ
ラスに航すべき手筈となし、今夜の會議は是にて閉會、一同退散せしが、後
に残れるロデリゴはイアゴーに向ひ、さて／＼おもしろからざる結果
かな、此上は早や詮術盡きたり、今は世に生存する甲斐もなしと嘆くを、イ
アゴー且つ嘲り且つ勵ましながら、否々失望すべきにあらず、汝若し男兒
ならば、速かに能ふ限りの金子を集め、汝が財布を充たして、サイブラスへ

行け、デスデモナとて、何時迄か彼の黒人を愛すべき、早晚オセロを厭ふの時機來らむ其機會を逃がさず、彼女を汝が有となさむ計畧は予が方寸にあり、汝は只だ財布を充たして、彼島に航せよと、ロ德里ゴ一又々其詭辯に弄せられ遂に其意に従ふこととなり、イアゴ一後にて獨りにつたりと笑み、己が猾智に長けたるを誇るの獨語をなす

(第二幕)

第一場 舞臺は轉じてサイプラス島海岸の一市となれり、此島の舊總督モンタノ并に他の二三の紳士海岸に立ち沖を眺めながら、昨夜の暴風の噂をなし、土耳其艦隊の行衛如何と案じ居る所へ、カッシオが乗船無事に入港、土耳其艦隊は悉く破壊したれば、戦争は未だ戦はれざるに既に終を告げたる由を報ず、然れども茲に只一つの氣遣はしきは、同時にゼニスを出

てたるオセロの乗船は、途中暴風の爲めに吹分けられ、行衛不明となりしとの一事なり、かゝる所へ間もなく又一艘のゼニス船到着せり、こはデスデモナ、イアゴ一、ロ德里ゴ一の一行なり、デスデモナは上陸するや否、オセロの既に着せしや否やを問ひ、其彼女よりも一日早く出帆したるオセロの乗船の未だ入港せざるを聞き、憂ふること一方ならず、心も心ならざるを、心にもあらぬ談話に紛らし居る中、繼て又一艘のゼニス船入港し、これにてオセロ無事到着の由報ぜらる、間もなくオセロ登場、一同と相會し喜ぶこと一方ならず、就中オセロ夫婦が再會の喜び譬へむに物なく、かくて相携へて總督府なる海岸の城内に入る、一同の去りし後にて、イアゴ一はロ德里ゴ一を呼び留め、告げていふ、デスデモナは早やカッシオを戀ふるに至れり、さればカッシオこそ汝が戀の敵なり、汝が戀を果たさむには先づ

カツシオを此島より追はざる可らず、その方法はかくの如し、今夜の警固は、カツシオと予とにて勤むる筈なれば、汝も警固の場に行き、折さへあらば、カツシオを怒らすやうの行爲を爲せ、彼は極めて怒り易き性質の者なれば、汝が行爲を見て大に怒り且つ狂はむ、さらば予はそを利用して此市中に大騒動を惹起さしめむ、其上はオセロとて彼を副官の地位に置くこと能はず、必ず彼を追ふに至らむ、汝はそを試むべきや否やと、愚鈍なるロドリゴは直ちに此言に従ふべき由を約束す、蓋しイアゴは、此方法に由て、己れ副官の地位に替らむとするなり

第二場 傳令使登場市街を巡りて、今夜は土耳其艦隊全滅の喜びに、新總督オセロ殿新婚の祝賀を兼ね、各人好む所に従ひて、喜びを表せよ、酒宴遊興歌舞爆竹勝手たるべし、今夕五時より十一時の鳴鐘迄を以て其期限とな

すと

第三場 城内の一室にて、カツシオはこれより警固を張らむといふを、イアゴ一暫しと留め、今夜の芽出度さを祝して、共に一杯を傾けたしといふ此島の若紳士二三、戸外に在り、呼入れ給へと告ぐるに、カツシオ固く辭し酒には弱き拙者なり、數杯を傾けなば、忽ち我を忘れ、思はぬ行爲を爲すに至らむといふを、強いて呼入れしめ酒を命ずるに、忽ちカツシオは亂醉し、既に正氣を失ひ、怒り上戸の鼻息荒く、喧嘩の相手もがなといふべき様子を見計らひ、イアゴ、密かにロドリゴに告げ、彼に挑ましめしかば、カツシオは大に怒り、刀を抜きロドリゴを追廻すを、來客中のモンタノ取制へむとせしに、カツシオこたびは、モンタノに組付き離さばこそ、打つ拵るの眞最中、ロドリゴは市中に奔り出て、大聲を發して事ありくと叫び

しかば市の警鐘は鳴渡り、事態甚だ容易ならざるにぞ、オセロも何時か聞きつけ出て来り、此光景を見て、且つ驚き且つ怒り、始終を糺問の上、カツシオが官職は今宵を限り、剝ぎ取る旨を宣告せり、さて一同の退散したる後、今は酔も覺め果て、後悔臍を噛むばかりなるカツシオの傍にありて、介抱なし居たるイアゴーは、かにかくと慰めつゝ、今の場合他に詮方もなければ、只管デスデモナ夫人に哀願し、夫人の情深き心に頼りて、大將への詫を叶へ給へと進むるに、カツシオも實もと思ひ、さらば忠告に従ひ、明朝早速夫人と會見し、其旨哀願せむとて別れ去りつ、後に獨りイアゴーは、密かに笑坪に入りつゝ、獨語すらく、情に厚きデスデモナは、必ずカツシオを憫み、彼が爲めに、オセロに向ひ、五月蠅き計りに、彼が宥怒を請ふならむ、其機を利用し、我は密かに、オセロの耳へ、一種の毒を注入せむ、先づ明日は、我妻エ

ミリアをして、夫人とカツシオとの會見を周旋せしめ、我は其間、オセロを他處へ誘ひ出し、夫人とカツシオとの會見の、まだ終らぬ處へ連れ歸り、二人が對話の光景を望見せしめ、さてこそ思ふ坪へ云々と

(第三幕)

第一場 昨夜は遂に臉も合はざりしカツシオは、早朝城門外に音づれ来て、デスデモナと會見の事を周旋せしめむが爲め、先づエミリアに會見を求めし處へ、折よくもイアゴーの來るに遇ひ、其由を告ぐるに、イアゴー左らば早速愚妻を御目に懸らすべし、某は亦オセロを暫し他處へ誘ひ出すの策を講ずべしと、例の親切めかして別れ去れば、間もなくエミリア出て來り、カツシオの依頼を快諾し、左らば今より直ちに、夫人と會見の場處へ案内せむとて、カツシオを導いて入る

第二場　オセロ本國政府への報告書を船長に交付すべき由イアゴに命じ、さて己れは是より砲臺を巡視すべければ、汝は後より尋ね來れと告げて出て行く

第三場　城内の庭園にて、デスデモナ、カッシオを引見し、其哀願に耳傾け、大に同情を表し、カッシオが爲め、オセロの心を和らげ、復職の許可を乞ふは妾が方寸にあれば、其儀は心安かれと慰撫する中、オセロ、イアゴに導かれ、彼方より入來る姿の見ゆるにぞ、カッシオは折悪しと急ぎ出て、行く、此有様を瞥見したるオセロは少しく不快の念を生じたる様子を直ちに見て取れるイアゴ、お、好かぬと獨言つに、オセロを聞咎め、今出行きしはカッシオならずやといへば、否々カッシオにはあらざるべし、閣下の姿を見るや、直ちに宛ら罪ある者の如く、孤鼠々々と出行きしは、よもカ

ッシオにはあらざるべしと、此問答にて少しく疑念を生じたるオセロは間もなくデスデモナの前に至り、今出行きし者の何人なるやを問ふに、案に違はずカッシオなりといふさへあるに、デスデモナは口を極めてカッシオの憫むべきを説き、妾に免じて彼が罪を宥し、彼が復職の願を叶ひさせ給へと勸むると甚だ切なり、やがてデスデモナの去りし後にて、今やオセロが心は疑惑の雲に掩はれそめしに乘じ、イアゴは其獨得の奸辯、邪智の詭辯を弄し、意溢れ、言訥するが如き、素振を粧ひ、盛んにオセロの疑心を挑撥し、つゝいも、要領を得るが如き得ざるが如き、不即不離の妙語を放て、尙ほデスデモナとカッシオとの間の關係は、巨細彼が胸中に詳かなるが如き風を見せしかば、追が沈勇を以て名高きオセロも、嫉妬の情の湧き來るを制へ得ず、推返しイアゴを難詰すれば、イアゴは、實は我が思ふ坪へ

引入れながらも、止むを得ず白状するが如き面持にて、證據としては擧ぐるを得ざれど、心を鎮めて、夫人と、カッショとの間柄を注意せられよと告げ、飽く迄忠義顔して、かにかくと心添へをなして出て行きつ、引違ひてデスデモナはエミリアを従へ入來り、正餐の準備既に成り、今日招待したる此島の貴紳等大將の臨席を待ちつゝあるよしを告げ、ふと仰ぎ見れば、オセロの顔色尋常ならざるに、如何したると問へば、頭痛みて堪へ難き程なりといふ、左らば此手巾にて頭を縛し給へと進むるを、否とばかりにかき退くる拍子に、手巾は地に落ちたれど、二人ながら心にも留めず出て、行く少し遅れて出行かむとしたるエミリアは、此手巾を拾ひ擧げ、これぞオセロより愛情の紀念にとて夫人に贈りたる大切の品なり、夫人は日來肌身離さず所持せらるゝを、何故にやあらむ、我が夫イアゴの密かに竊み取

りてよと度々妾に請ひたりしが、今こそ幸ひイアゴに贈りて喜ぶ顔を見むと獨語つ處へ、イアゴ入來りて奪ふが如くに取上げ、此手巾の一條は必ず人に語ること勿れと、誠め、此上は此手巾をカッショが宿所の中に落し置き、彼をして拾ひ取らしめむとつぶやく、さてオセロは我が最愛のデスデモナに不貞の疑ありと知るや、心の平和は全く破られ痛恨に堪へず、かゝる疑惑の中に彷徨する苦痛は、我が堪ふる所にあらずとなし、獨り胸を痛めつゝ歩み廻れる中、忽ち又イアゴを見、半ば憤るが如く半ば訴ふるが如く、確かなる證據を擧げて疑惑を解け、よくもあしくも事相の確證を知らむと迫るに、イアゴは止むを得ざる風情を装ひ、カッショが寢室の囁語なりとて淫猥なる出鱈目を告げ、更に夫人が秘藏の手巾を、カッショが手中に認めたりと告ぐ、オセロ今は疑ふ所なし、二人が不義は確實

なり、此上は二人に對し必ず殘酷なる復讐をなさずは止まじと誓ふを、イアゴも此上はオセロの腹心として、復讐の事を助け、如何に殘忍の行爲たりとも、辭することなかるべしと誓ふ

第四場 オセロ、デスデモナに向ひ、眼を拭ふに、托して、手巾を求む、デスデモナは今身邊に持合はさざるを以て答ふ、オセロさてはと思ひ、求むること益す切に、寸時の猶豫もなく今の間に持來れと迫るを、デスデモナはオセロにさる疑心ありての上の事とは知らねば、却てカツシオが復職の嘆願を反覆するに、オセロ益す怒りて、荒けなく罵りたけりて出立る、間もなく入り來るはカツシオとイアゴなり、イアゴは益す、カツシオを促し、五月蠅き迄に、デスデモナに嘆願せよと勧めしかば、カツシオはデスデモナの前に至り、又大將への周旋を懇願するに、デスデモナ悄然として、今は

大將の御機嫌宜しからざる由を告げ、打嘆くの場あり、聽てデスデモナはエミリアを伴ひ退場入替りて、カツシオが情婦ビアンカ登場、カツシオが此頃彼女を疎外するを詰り、今夜こそ彼女が宿にて晚餐を共にせられむことを要求す、カツシオは己が宿にて拾ひ取りたる例の手巾を取出し、之れが刺繡の摸型を寫し、取らむことを命ず、ビアンカ其出處を疑ひなどし、結局カツシオが今夜尋ね行き晚餐を共にせむといふをもて折れ合うて去る

(第四幕)

第一場 城門外にてオセロ、イアゴと立談、カツシオの事に及ぶや、萬感胸に迫り、オセロ遂に卒倒す、イアゴ心に冷笑しながら介抱なし居る中、カツシオ登場、此軀を見て驚くを、オセロは新たに癩痢の病を得、昨日も既

に此の如く人事不省に陥りたりき、されど間もなく正氣に還るべければ、足下は早く此處を去れ、さて後刻又尋ね來られよ、オセロ在らざる時足下と會談すべき一大重要事ありと、カッシオ乃ち退場同時にオセロは正氣づきしをイアゴ―慰め勵まし、遂にカッシオが今しも此處を通り懸りし由を告げ、更に辭を設けて程なく再び此處に來るやう告げ置きたれば、聽てカッシオは又來らむ、閣下は暫し彼方の物蔭に忍びて、カッシオが一笑を具さに觀察せられよ、某は彼をしてデスデモナ殿に對する惚話を語らしめ、何時頃より情を通じ、密會の場處は何時何處等の事實を巨細に吐かしめむと、オセロは既に事實を確信し復讐の事を誓ひしと雖も、尙ほ確證を得たしとの念あれば、喜んでイアゴ―が此献策に同意しける時、早くもカッシオが彼方より來懸るにぞ、急ぎ物蔭へ潜めば、カッシオはオセ

ロ既に在らずと思ひ、づか／＼と入來るを、イアゴ―莞爾として迎へ、深く案じ給ふこと勿れ、デスデモナ殿に依頼せる上は、早や安心なりと、オセロに聞えよがしに云懸け、更に聲を潜めて彼が情婦ビアンカに關する談話を仕向け、世にビアンカ程男思ひの女はなし、彼女のいふ所に依れば近日結婚の式を擧ぐるとは誠かなど出鱈目を云へば、カッシオも道が愛する女の噂をされては、思はず破顔微笑せざるを得ず、問はれ釣らるゝまゝ、彼女との情交のあらまし、彼女がうるさき迄彼に付き纏ふとなど、何時か相好を崩して仕方交りに談ずる光景、物蔭より覗へるオオロの心には、凡て彼と、デスデモナとの交情を語るが如くに見ゆるうたてさ、折も折かゝる處へビアンカ登場、嫉妬の眼ざし凄まじくカッシオに向ひ、先刻の手巾は何處ぞの女よりの紀念物に相違なし、そを妾に命じて模様を寫さしめむ

とは、妾を愚にするも甚だし、先づ此品は卿に還さむ、今夜の晚餐だけは卿の來會を待ちもせむと、彼の手巾を擲ち去れり、イアゴー乃ちカッシオを勸め、後よりピアンカを追はしめ、別るゝ時、今夜はピアンカの宿に赴くや否やを問うて、其、赴く由を、確かめ、つ、かくてカッシオの去るや、オセロは物蔭より出來り、愈よ彼等が不義醜行に疑なき由を云ひ、デスデモナの殺戮は、オセロ親ら手を下し、カッシオはイアゴーの謀殺に任す趣を談合せる所へ、エニス政府よりの使者、ロドビゴ、デスデモナと共に登場、公よりの書面をオセロに授く、オセロを一讀し居る中、ロドビゴはイアゴーに向ひ、カッシオの安否を問ふを、デスデモナ嘴を入れ、オセロとカッシオとの間に起れる不和を陳べて嘆息す、オセロ眼を書面に注ぎつゝも心はデスデモナが不義の一事にのみ向ひたれば、デスデモナがロドビゴに向

ひ、カッシオを憫むの語、あるを聞く、毎に、奇なる怒りの聲を發すること、一再ならず、ロドビゴは惟ひらく是れ公の書面がオセロを怒らせしならむ、蓋し公はオセロを召還し、カッシオを留めて、サイブラスの政を執らしめむとの命令を發したるなり、然どもオセロは遂に怒に堪へざる者の如く、満座の中にて、デスデモナを打擲せり、デスデモナ理由は知らざれど、席にあらば良人の怒を大ならしめむを恐れ退場す、オセロも亦た後より退場、振殘されしロドビゴは且つ怪み、且つ呆れつゝ、イアゴーに向ひ、オセロの無作法を難ず、イアゴーは例に依て詭辯を弄することあり

第二場 城中の一室にて、オセロ、デスデモナに侍女とし事ふるエミリアを糺問し、デスデモナとカッシオとの關係を語らしめむとすれども、エミリアはさることのあるべき理なしと斷言し、デスデモナの無實を主張し

て止まざるに、さらばデスデモナを伴ひ來れと命ずれば、デスデモナは聽て入來れり、エミリアを戶外に立たしめ、オセロ、デスデモナとたゞ二人居並べば、萬感交も至るオセロが胸中や如何なりけむ、仔細も語らずたゞ汝は夫を辱しめたり、不義不貞の行爲をなしたり、汝は賣女なり遊女なりと罵詈譏を極めつゝ、胸中無限の怨恨を獨語すること頻りなり、驚き惑ふデスデモナは妾は決してさる婦人にあらず、一人の夫を守る貞操無二の貞女なりとて誓文立て、争へども、オセロ一向に聽入れず、聽てエミリアを呼入れ、己れは席を蹴立て、退場せり、後に、デスデモナは獨り此不思議なる濕衣の出處に迷ひ、此上はイアゴーを呼び此始終を語りて其原因を探らしむるに如かずとなし、直ちにイアゴーを呼入れしむ、間もなくイアゴーの來れるに、二人口を揃へて大將が罵詈惡口の次第を語り、其原因の

那邊にあるや更に了解し難き由を云ふに、イアゴーそは思ひも寄らぬ事にはあれど、恐らくは國事に關する心配事の爲めに、御心にもなき入つ當りをせられしなるべし、其御心配事だに過去らば、元の大將殿にならせ給はむは疑なしなど慰むる中、晚餐を報ずる喇叭の音の聞ゆるに、デスデモナはエミリアと共に涙を拭ひながら退場、イアゴー一人残れる所へロ德里ゴー入來り、又イアゴーを責め、何時迄待てども玉は手に入らず、携帯の財布は空虚となりて、世に一文なしの身となれり、此上は自ら進んでデスデモナを見、今迄の一伍一什を打明け、是迄デスデモナにとて送れる無数の寶玉を取戻し、我戀を願下げとなさむ、若し此等の寶玉我手に還らざば、我は足下に對して相當の處置を取らむと、思ひ決したる顔色たゞならざるに、イアゴーは例の落つき拂ひ、足下にして其勇氣あるを聞けば頼もし

とも頼もし、足下の戀は間もなく成就せむ、たゞこゝに一の難事あり、足下は未だ知らざるべけれど、今日ゼニスより使者來り、オセロは此島を去ることとなり、カツシオ代て此島の總督たるやう命ぜられたり、さればデスデモナはオセロに従ひ、直ちに此島を去るべし、さては足下の望も叶ふまじければ、デスデモナを此島に引留むるが第一の手段なり、それには、彼のカツシオを如何にかして、オセロに代るべき資格なからしむるが安全の策なり、驚く勿れ、カツシオは今夜彼が情婦ピアンカの許にあらむ、予も彼と共に彼家にあらむ、さて十二時と一時の間に彼を促し、歸途に就かむ、足下は時刻を測り、途中に待伏して、彼を斬れ、予も傍に在て足下を幫助せむと、例の詭辯を弄して、ロ德里ゴを弄絡す、ロ德里ゴ、遂に又之を諾す

第三場　ゼニスの使者ロドリゴを襲せる晚餐終りて、ロドリゴの辭

し去るを、オセロ散歩ながら彼が宿迄送り行かむとて出て行く、出て行く時デスデモナを顧み、今夜は汝の閨房より侍女を遣さげ、只一人にて眠に就け、予は間もなく歸り來らむと、デスデモナ其何の故なるを知らざれど、命のまに、侍女エミリアに此由を告げ、如何なる心にや、臥床の上には結婚の當夜用ひたる蓐被を敷かしめ、さてエミリアの助を借りつゝ、衣服を脱する中、ふと胸に浮びしは、柳の歌なり、こは彼女が母の侍女なるもの戀人に、棄てられし、死の床に、歌ひながら死しける歌なり、デスデモナは此歌を思ひ出すと共に、それを歌ひ試みむとの念止み難く、遂に之を歌ひつゝ、寢衣を着了し、即てエミリアと相別る

(第五幕)

第一場　イアゴ、ロ德里ゴをして、街上の一隅に身を潜め、以てカツシ

オの来るを待たしむ、時は十二時と一時の間にて、カッシオはピアンカの寓より、今しも歸り來ると見えたり、イアゴー自身も少し離れたる處に待ち居る中、聽てカッシオは來れり、ロ德里ゴーは斬りつけたり、然れどもカッシオは不思議に無事なるを得、且つ抜合せて却て、ロ德里ゴーに重傷を負はせしが、イアゴー後より忍寄りて、密かにカッシオの脛を薙ぎ去れり、此に於て二人の負傷者は街上に平臥して、交る／＼救助を呼ぶ中、ロドリゴー、グラーチアノの二人來り合はせ、此聲を聞きつけ、急かすがに思ひ惑ふ所へ、イアゴー奔り出て、恰かも此深夜の叫聲を聞きつけ、わざ／＼出來りしが如き風を装ひ、二人に會釋してカッシオの傍に立寄り、如何したると問へば、何者にか關討せられしなるが、下手人の一人は此邊りに倒れ居らむといふ詞の終らぬ中、ロ德里ゴーが又救助を呼ぶ聲のするに、イアゴー

つと奔り寄り、己れ惡漢と云ひ、ロ德里ゴーを刺殺せり、さてこれにて彼の二人も負傷者のカッシオなることを知り、驚くこと大方ならず、兎も角もカッシオを彼が宿所へ擔ぎ込まむと、倚子を輻となし、人夫を備うて荷ひ去らしむ、此以前彼のピアンカも叫聲を聞きつけ出來りしが、カッシオの負傷せるを知り、大に愁傷の軀なるを、イアゴー意味有氣に、ピアンカを視て、此女こそ、カッシオ暗殺の陰謀に關係あるべき疑ありとなし、乃ちピアンカを引立て、一同と共にカッシオの後を追うて行く

第二場 一燈幽かに燃ゆる寢室の中、臥床の上には、デステモナ既に眠りてあり、ロドリゴーを送りて歸來れるオセロは、今や殺意牢として、抜く可らず、然かも床上に眠れる天使の如きデステモナが姿を見ては、感慨に堪はず、大理石像を欺く彼女が肌膚に、刀痕を加へて醜うするに忍びず、せめ

ては刀痕をも與へず、血をも流さざる様に殺害せむと諳きつゝ、眠れる唇に向ひ、訣別の接吻をなすこと、兩三度、デスデモナ遂に目を開けば、只ならぬ夫の様子に、今更のやうに驚きつゝ、問答數回にして、愈よ夫に殺意あるを知り、其理由を問へば、カッシオと不義の行爲ありし由を述べ、其證據としては、嘗てオセロが與へし貴重の手巾をカッシオに贈り、現在カッシオがそを所持するを目撃せりし事實を擧ぐ、デスデモナ百方辯解すれども、オセロ頑として聽かざるに、然らばカッシオを呼寄せ尋問せられよと云へば、カッシオは既に白状せり、然れども、今や彼が口舌は永久に閉ぢられたり、今頃は、イアゴーが既に彼を殺害したる筈なりとの、オセロの言に、思はず、戦慄しつゝ、尚ほ明日迄妾を生かし置き、よと乞ふに、聽かれず、さらばせめて祈禱を捧ぐる間と乞へども、それも聽かれず、オセロは遂に彼

女を床上に、壓殺せり、デスデモナの未だ全く息を絶たざる中、烈しく扉を叩く者あり、是れ別人ならず、何事をか告げむとて、エミリアの奔り來れるなり、オセロは寢臺の帷帳を引きて、デスデモナの屍を見えぬやうになし、さて扉を開けば、入來るエミリアは、遽たゞしげに、只今彼方の辻にて殺人犯あり、エニスの若紳士ロドリゴなる者、カッシオ殿の爲めに殺されたりと告ぐるに、さてカッシオも殺されたりしかと問へば、否なカッシオは殺されずといふに、オセロ意外の感爲す中、帳中のデスデモナは、まだ息の根の残り居けむ、幽けき聲にて、其身は無實の罪に死ぬる由を云ひて、全く絶息す、エミリア初めて、デスデモナがオセロの殺す所となりし由を知り、殺害の理由はカッシオとの不義なりて、よ、オセロの詞を駁し、て餘力を残さず、加之大聲を發して人殺しと連呼する中、モンタノ、グラチ

アノ、イアゴ―等入來り、何事ぞと尋ね惑ふを、エミリア早速イアゴ―に向ひ、卿は果してオセロに告ぐるに、デスデモナ殿不義の事を以てしたりやと問ひ、然りとの返答を得て、デスデモナの冤を雪ぎ、イアゴ―の告口の誤れるを辯じ、しかく天使の如きデスデモナを殺害せし、オセロの愚を責むること痛切を極む、グラチアノ初めてデスデモナの横死を知り、デスデモナの父は女を失ひし悲みが素因となり、此程世に亡き數に入りたるが、想へば却て幸なりしと嘆くを、オセロ聞いてそを憫みながらも、デスデモナは正しくカツシオと不義の行爲ありたり、其證據は彼女の手巾をカツシオが所持するを、彼自身目撃したりと辯ずるを、エミリア聞きてさてはと思ひ、當れることあり、否とよ彼の手巾こそは、妾が偶然拾ひ取りしを、兼ねて、イアゴ―の望めるまい、暫し與へ置きつるなりと、容赦もなき高聲に、オ

セロも悟る所あり、一座の面々又さてはと思ふ、景色に、イアゴ―早や堪へずやありけむ、物をも云はず、我が妻エミリアを刺して逃れ去る、かくと見てモンタノは直ちに彼を捕縛し來らむとの目的にて、イアゴ―の後を追ひ行きしが、暫くして、イアゴ―を捕へ、ロドリゴ―と輜に乗れるカツシオとをも伴ひ歸り來る、さてオセロはイアゴ―に向ひ、かくまで彼を欺きし理由を尋問すれども、イアゴ―は一切口を開かず、他くまで剛腹鬼の如き大悪漢の運の盡きさこそと思はしむ、カツシオはオセロに向ひ、思ひも寄らず、彼が受けたる嫌疑は、根も葉もなきことなるを辯じ、且つ彼の手巾は己が宿にて拾ひ取りしものなるが、こはイアゴ―が目的ありて、わざと其處に落し置きたるものなることを、只今イアゴ―の自白に依て知れりと告げ、又ロドリゴ―等も交る、オセロに向ひ、ロ德里ゴ―が衣囊の中に

て發見したる二三通の書面にて、イアゴーが彼を教唆してカッシオを殺害せしめし事、又彼の祝賀の夜は、ロドリゴをして、わざとカッシオに挑ましめ、遂に彼の如き大騒動を惹起し、爲めに彼をして副官の職を失はしめし等皆なイアゴーの計略なりしこと判明せる由を告ぐ、かくてロドリゴは、ゴニス政府の代表者として、オセロが職權を返還せしめ、カッシオを以てサイブラスの總督となし、イアゴーの所刑はカッレオに委ね、オセロは捕縛して、ゴニスに伴ひ行き、政府に上伸する所あらむと告ぐ、されどオセロは、今更、ゴニスに連れ還られ、耻辱を重ねるに、忍びずやありけむ、其場に、自刃して、デステモナの屍骸を接吻し、其上に倒れて、息絶えたり、一面々顔見合せ、長嘆息すること稍や久しくして幕梗概完

本篇に對する二三評家の言

本篇に對する諸家の評論は、沙翁劇中にも殊に其多きに苦む方なるが、何れも本篇を以て、キングリア、ハムレット、マクベスと共に、沙翁が、四大劇と稱するに於て、一致せり、又中には、オセロを以て、沙翁劇中の白眉と考ふる、大家も、尠からず、現存の沙翁學者にては、ダウデン氏は、リアを以て、沙翁が唯一最大の成功と考ふれども、クレীগ氏は、オセロを以て、リアの上に置かむとする者の如く、又故人にては、ゲーテは、ハムレットを以て、沙翁が天才の最上表現なりと稱すれども、コレリツヂは、オセロを以て、沙翁が成熟せる思想の全力を、驚くべき程、權衡善く表現したるものと考へ、又マコイレイは、オセロを以て、世界中の最大傑作なりと稱揚せり、更に其内容に關する評言としては、古來の名評と稱せらるゝドクトル、ジョンソン并びにハズリットの批評の一部分を左に抄譯すべし

ドクトル、ジョンソンは曰く「此劇の美點は、説明解釋の助けを借らずして、直ちに讀者の心上に強大なる印象を與ふ、度量廣く、率直にして欺かれ易く、人を信任すること度なく、愛情は燃ゆるが如く、決心は曲げ難く、復讐の念は屈し難きオセロが朴訥、怒りを言語に表すことなく、畫策に敏に、己が利益と復讐の考慮を忘るゝことなき、イアゴーが冷靜なる惡意惡行、己が眞價を信じ、己が無垢を自覺せるデズデモナの温雅朴實、又彼女がカツシオの爲めに、オセロへの哀願を容易に撤去せざりし無邪氣さ、己が嫌疑の的たることを容易に心付かざる罪のなさ等、是皆な沙翁が近代の作家に求む可らざる程、人情の機微に熟通せるを表はすものなり

「イアゴーがオセロの疑心を深からしめし漸次の成行、及び彼が嫉妬心を煽動するが爲めに使用せし様々の情況は、如何にも巧妙に自然的に按排

せられたれば、設令、オセロ自身が自家を評して云ひし如く、容易く嫉妬は起さぬ男とまでは信ずるを得ざれど、彼がさばかりの嫉妬を起して、殆んど亂心に近づきたるを見ても、吾人は一片同情の涙を禁じ得ざるを覺ゆ……又エミリアは往々かいなでの女性に見るが如く、其道念薄きが如くなれど而かも全く之を缺けるに非ず、動もすれば、輕小の過失は事もなく犯さむとするの傾向あれど、重大なる惡事を見ては、忽ち奮ひ立て之に反抗す云々」

ウキリアム、ハズリットは曰はく「オセロ」が吾人の同情を動かすことや非常なり、そが齎らす教訓は、沙翁劇の他の如何なるものよりも、人生に密接の關係を有するを以て、直ちに吾人の情緒を衝いて、切實の感を與ふ、「リア」を讀んで受くる感動は、更に一層恐ろしく且つ激烈なるには相違なし、然

れども、オセロに比すれば不自然的にして、日常生活に縁遠し、又、マクベスの中に現れたる人情も、これ程の同情は吾人に與ふることなし、ハムレット中の興趣は吾人の情を衝くこと更に迂遠にして且つ婉曲なり、オセロに至ては、其興趣深遠なると同時に、同様の度に於いて感動的なり……「オセロ」に於ける情の推移は、マクベスのとは非常の差あり、マクベスに於いては、殆んど初めより終りまで、相反せる二の情緒の間に、即ち野心と良心の刺撃との間に激烈なる争闘あり、オセロに於いては、相反せる二の情緒の衝突は、同様に激烈なれども、短時にして止み、其後は様々の情緒が代る／＼勢力を擅まにする所と、此上なく温かき愛情と、際涯もなき信任とが、何時か思ひも懸けず、嫉妬の苦痛嫌惡の狂念に移りゆく所とに、大なる興趣は感ぜらるゝなり……オセロが性質は高雅にして人を信じ、優美

にして寛大なれど、彼が血は最も燃え易く激し易し……沙翁が其天才と人情を描出するの能力とを十分に發揮したるは、此の如き大人物(オセ)をして、急激なる而かも秩序ある變遷を経て、憫むべき境遇(嫉妬)に墮落せしめたる其手際にある……イアゴの性格は沙翁が天才の逸出して成りたる副産物の一なり、穿ち過ぎたる或る評家は、此性格を以て不自然なりとなせり、其理由は、彼が爲せる惡事は、十分なる犯罪の動機を缺くを以てなりといふ、然れども詩人なると同時に哲學者なる沙翁は全く之と異なる考を有したり、蓋し彼は力の愛即ち一名惡事の愛は、決して人間に不自然ならざるを知らるなり云々」

譯者

オセロの悲劇

オセロの悲劇は、オセロの嫉妬から始まる。オセロは、自分の妻デズデモナを、モルドゥエロと通奸していると信じて、彼女を殺す。オセロの嫉妬は、モルドゥエロの陰謀によって引き起こされる。モルドゥエロは、オセロの妻デズデモナと通奸し、オセロを殺す。オセロの死は、モルドゥエロの陰謀によって引き起こされる。オセロの死は、モルドゥエロの陰謀によって引き起こされる。オセロの死は、モルドゥエロの陰謀によって引き起こされる。

登場人物

エニス公

ブラバンシオ 元老院議員

此外元老院議員大勢

グラチアノ ブラバンシオが舎弟

ロドリゴ ブラバンシオが一族の者

オセロ エニス政府に備はる、ムールの貴族

カツシオ 右の副官

イアゴ オセロの旗手

ロドリゴ エニスの紳士

モンタノ サイブラス總督府に於けるオセロが前

任者

道化役 オセロに召使はる、我邦の茶道の如き

者

デスデモナ ブラバンシオの女、オセロの妻

エミリア イアゴの妻

ピアンカ カツシオが情婦

此外水夫、使者、傳令使、役人、紳士、樂人、

従者等

場所

エニス及びサイブラス島海岸の一市

オセロの悲劇

第一幕

第一場—エニス 街上(時分は深更)

ロドリゴ、イアゴ登場

ロドリゴ 云はれなく、某が財布の紐の締括を、貴殿の自由に任すも何故、

知りつゝ素知らぬ振は、御不親切と申すもの

イアゴ 決して、左様ではないが、よも辯解を聞いては呉れまい、若し夢

にだにこんな事を、此身共が知て居たなら、それこそ如何なる憎悪でも

ロア 貴殿こそ、彼奴(ロセ)をば、憎み居るやう云はれしならずや
イア ①はて憎まいて何と致さう、先づ／＼御聞きやれ、此市のさる大官方
が、三人迄も彼奴に向ひ、此身共を副官に御採用あれと、口づから腰を
屈めて立ての依頼を、身共とてもさる地位に、足はぬ事は萬々ないと、
自ら固く信じて居るに、彼奴我意を貫かんず驕慢心から、大袈裟な情
實を並べ立て、生兵法の講義交りに唾き散し、擧句の果が、イヤ副官儀
は、既に選定致してゐるとは、コリヤどうぢや、さて其彼が選んだ男と
いつば、口先斗りの生軍師、フロレンス生れのミカエル、カツシオと
申して、女房の美しいので半分惹けた男、戰場にて一隊を率ゐしこと
は、思ひも寄らず軍配の心得などは、娘、子も同然、知つて居るは、兵書
中の小理屈ばかり、束帯の公卿でも、彼程にはやつてのけう、實技なし

の口前ばかり、それが彼奴の技倆ぢや、乍去其男は首尾克く入選、ロド
スの島や、サイブラス、其外正教異教の國々にて、現在彼も目撃なせし
が如く、戦功ありし此身共は、貸借の勘定、算盤は、ぢく其外には、何も知
らぬ素町人に見す／＼地位を奪はれしとは、ても好機會に廻り合せ
て、彼は副官、此身共は、あなあはれ、ムール殿(ロセ)のやつと旗手(副官の
士居る)

ロア 副官よりも旗持よりも、某は寧ろ刑官となつて、彼奴を縊つてやり
たかつた

イア ハテ今更どうなるもので、奉公の辛いは、こゝの事、昇進の道は、手引
手蔓、年功で順々に進むなどは、逆も／＼、さてこれにても、此身共が、彼
のムールを憎まずに、居られるか、居られぬか、道理をよく考へて判ぜ

らしい

ロア 左様な者に從て居るとは、某などは厭な事だ

イア あゝそれはかういふ譯ぢや、身共が彼に從て居るは、彼を足場に
して、自分に奉公を致すのぢや、人が皆主ともなれず、又主たるものが皆、
忠義な家來計りは持たれぬもの、わが身を繋ぐ、頸の鎖を嬉しがり、主
が厭の驢馬同様、當てがひの飼料の外に慾もなく、むざ／＼一生を空
に過し、老さらばえて棄てらるゝ、馬鹿正直な忠義者も、世には中々
多けれど、そんな阿呆は話の外、忠義らしい面鉢を粧り立て、心の底で
は主は何の我身の上、うはべ計りに何事も、主の爲めと見せ懸けて、
其實主はほんの食物、己が腹を肥した上は、おさらばと出懸る家來も
あるが、かやうな者こそ、少しは魂のあるといふもの、何を隠さう即ち

身共は其一人、尤も身共ぢやとて、若しムールと地位を替へたら、今日
のイアゴーでないは定、身共が彼に事ふるは、たゞ自身に事ふるのみ、
さら／＼彼に對し尊敬の、忠義のといふ爲めではない、さう見せかけ
て、實は此方に目的がある、若し身共が表面に表す行爲にて、心の底が
見え透く様なら、さらけ出した心腸を、袖の上によら下げて、鳶鳥の突
くがまゝに任せるといふもの、イヤ身共は見懸通りの男ではない
ロア 此まゝして事が済むなら、彼の厚唇(厚唇)のオセロ奴は、ほんに何た
る果報者

イム 此上は寸時も早う、デスデモナの父親、ブラバンシオを叩き起して、
此始末を告るがよい、そしてオセロの後を追かけ、歡樂最中へ毒を注
し、街上にて面の皮を剥ぎ、女奴が親族を煽ぎ立て、彼奴が溫柔郷のた

のしみに五月蠅く邪魔を入れさせて、よし歡樂を悉く奪ふ事は出来ず共、その歡樂の色の幾分なりと、穢め果る迄弄つて遣れ(此の時丁度オが館の前に來かゝる)

ロア 早や此處が、ブラバンシオの館の前、大きな聲で叫つて呉れうか

イヤ それがいよいよ、繁華の市中で真夜中に、いつか燃え上つた火事の

火の手を見付出した時の様な頓興な凄まじい聲を振立て、

ロア モーシ、ブラバンシオ殿、ブラバンシオ大人、モウシ、

イア 御目覺あれ、ブラバンシオ殿、盜賊でゐる、盜賊々々、御館の中を御注意あれ、お娘御や御家財を、ヤア盜賊々々

ブラバンシオ二階の窓に現れ出る

ンア シオバ けた、ましいい聲をして、拙者を呼ぶは何故ぞ、ハテ何事ぢや

ロア 御家族に御異状は、ムりませぬか

イア 御戸締りに變つた事は

アラ 何故左様な事を尋ねるぞ

イア これはしたり、閣下は御盜難に罹られましたに、ハテ御見苦しい、早く御上衣を御召なされ、御胸も裂け御精神も消えよとばかりの、御心配事が出来ましたぞ、此今といふ今も今、真黒な古牡羊奴が、御手飼の白牡羊を手籠に致して居ります、早や、閣下、警鐘鳴して市中の夢をば早や破らせられい、さらば閣下の御孫に、とんだ魔物が持込みませう

アラ 何と、其方達は氣が狂ふたな

ロア 恐れながら、閣下、某が聲音に御記憶は、ムりませぬか

アア イヤ少しもさういふ其方は

ロア ロドリゴーてムります

アラ 然らば益す以て厭はしい、拙者が館の近邊を彷徨く事は相成らぬと命じた事を忘れたか、何を隠さう拙者が娘は、其方に與れぬと告げしならずや、それを遺恨か晚餐の膳にたべ酔うて、狂亂の餘り惡意を挿み、拙者が安眠を妨害せむとて來りしよな

ロア イヤ〜閣下――

アラ 乍去拙者には、其方共に思ひ知らせて呉れる程の勇氣もあり權力もある事を忘るなよ

ロア 先づ〜お静に――

アラ 何ぢや盜賊が這入つた、此處はゼニスの中、野中の孤屋ではない

ロア モシ、ブラバンシオ閣下、清淨無垢雜氣なしの好意にて、閣下を御尋

ね申せし某

イア はてさて閣下、さては閣下も、神明に事へよと、告る者が惡魔ならば、信心をも止めるといふ、其連中てムりますな、閣下のお爲を思つて参りし我等を、惡者なりとて御用ひなく、それ故お娘御を何處ぞの亞刺比亞馬に連添はせて御携ひなされずば、追々御親族の中には、嘶きかくる甥姪やら、栗毛の従兄弟、葦毛の従々兄弟やらが、定めてお出來な

アラ 汚らはしい無禮者、其方は何者ぢや

イア 某はたゞお娘御が、彼のムールと畜生道の、初山踏をせらるゝ事を、御報知申さむとて参りしもの

アラ 己れこゝな悪黨奴が

イア さいふ閣下は……いやさ元老院議官様

アラ ヤア、ロドリゴ、此かる無禮者を伴ひ來しも其方の責

ロア

如何なる責をも負ひませう。乍去を聞なされ、彼の美しの令嬢が、草木も眠る此夜深に、たつた一人の賤の男の、船頭風情を供にして(エニ市街は濠を以て通路となす故、何處へ行くにもゴンドラと稱する)邪淫極小船に乗るの必要あり、此小船を漕ぐ船頭を召連れたりとの意(邪淫極)まるムールの許へ、我から御身を任せられたは、全く閣下の御心から、熱と御勘考の末、御許可有ての上でムリますか、どうやらその様にも思はれますが——ハテ此れが御承知御同意での上の事ならば、いかにも某は大きな無禮を致しました。乍去此事を、微塵も御存じないならば、乍恐無禮は却て閣下にありと申すもの、不肖ながら禮儀作法も

打忘れ、妄りに閣下の尊嚴を冒すものとばし思されな、更めて申しませが、若し閣下御許可ありての上の事ならずば、令嬢にはいかい御不孝をなされました。御一身の義理も容致も、知慧も未來も一緒にして、定まる宿とてもない、異國人に任せられたは實てムリます。御館の中を改めて御覽なされ、若し令嬢が御居室に、又は何處なりとも御館の中にあらせられたら、閣下を欺く某が罪、國法を以て、御處分なされても、苦しうはムリませぬ

アラ ヤア、誰かある燈石を打て、灯火持て、家中の者を呼起せ、どうやら夢とも思はれぬ今夜の事、想ひ遣ても胸が通る、ヤア燈火を持て——

とアラバンシオ二階の窓より引込む

イア ロドリゴ、さらばぢや、身共はこれで行かずばなるまい、長居をし

て證人に喚出され、ミールの反對に立つは、穩かでない計りか、此身の不利益、ハテ此一事が、よしや多少の障礙を與へても、政府は中々、彼が官職を奪はむことは思ひも寄らず、はや始まれるサイブラス島の戦役に、なうて叶はぬ人物なるに、能く三軍を指揮すること、彼程の大將が他にあらうとも思はれず、そこを思へば、身共も彼を厭ふこと、獄道の呵責の如しとはいへども、現在の必要から、ほんのたゞの配號ながら、忠義といふ旗印を掲げねばならぬ仕義、足下は追手の者共を引連れて、サギタリーの旅館に御出あれ、彼は必ず彼處に居るであらう、身共も一緒に居る所存、おさらば

とイアゴー退場

アラバンシオ、並に燈火を携へたそ家來大勢登場

アラ　こりや眞實も眞實の災難、女は逃亡振棄てられた此身の行末には、悲嘆の外何も残らぬ、コレ、ロドリゴー、何處で娘を見懸けたぞ——不憫の娘、ナニ、ミール奴とぢや、あゝ人の親には何がある、して何うして娘ぢやといふことが分りしぞ、あゝ思ひも寄らぬ程父を出し抜き居つた言葉でも懸け居つたか——もつとく、蠟燭點けい、親族縁者を呼集めい、最早婚儀を済ましたか、さて何と

ロテ　仰の通り済ました事と存じます

アラ　さてもく、どうして家出を致したやら、あゝこれは、骨肉の謀叛ぢやな、あゝ世の父親達、初々しい舉動を見て、息女の心に氣を許すな、さては年若い娘子の、心を銷がす、何ぞ妖術がありはせぬか、どうぢやロドリゴー、さやうな物を、書物で、も見た事はないか(我女もオセロの妖術)

にわかれられし)

ロア ムりますとも

アラ 誰ぞ愚弟を呼起して参れ——寧ろ其方に與れれば宜かつた——

一人は西へ、一人は東へ早やう——さて何處に彼の駈落者は潜んで居るか、其方は承知か

ロア 屈竟の入夫を召連れ、某と御同道下さらば、訖度尋ね出して進ぜませ

アラ そんなら案内を頼む、何處の家でも叩き起さう、拙者の詞に反抗うものはよもあるまい、物共、物の具取揃へたか、夜衛の役人も呼んでまゐれ、さらばいざロドリゴ、骨折の報酬は訖度致すぞや

と一同退場

第二場——他の街上

オセロ、イアゴ、井に從者共、手にく燈火を携へて登場

イヤ 戰場に於てこそ人をも殺せ、謀殺は致されぬが、良心の本轉てムリませう、時としては自己の利益とも相成るべき、悪心の足らぬことを覺ゆる某、今も今、凡そ九度か十度程、彼奴が肋の下邊りを、蹴付て呉れうと思ひましたが、(彼奴とはロドリゴを指すならむとの説、然れども見れば、無意義と見るもよし)

オセ 思つたばかりで、却て宜かつた

ロイ 乍去、彼奴閣下に對し、無禮傲慢な言語を吐き、聖賢ならぬ某には、堪へ切れぬ程でムりました、何はしかれ、はや御婚儀は御濟みなされま

したか、御聞あれ、彼のブラバンシオ殿は、いたく人民の尊敬受け、其實此市の公よりも、二倍の勢力がムリますれば、閣下を追放せむと致すか、さらば己が権力の、有りつ丈を振廻して、國法の許す限りの呵責を加へむと致すは必定

オセ 如何なる事をも致さば致せ、拙者が從來、國家に盡し、功勞は、彼が不平の咄を嚙ませ得て餘りあらう、且や自慢も名譽と信ずる故公言致すが、元と拙者はさる王族の血統を傳ふる者、況して從來の功勞もあり、此度彼女を手に入し程の幸福は、立派に受ける資格がある、積つても見よ、あの優しいデスデモナを愛すればこそ、さもなくば、わたつ海の底にあるてふ、凡ての實に代へやうとて、家持たぬ獨身者の氣儘な境界を振棄て、急屈な身の上になるべきか、アレ見よ、彼方より來

る灯の光は

イア デスデモナ殿の父君が、知己朋友をかり集め、尋ね廻るのでムリませう、家内へ御入りなされたが宜しうムリませう

オセ イヤ、拙者は逃げも隠れもせぬ、拙者の器量、役柄、潔白な精神に對しても、尾籠な舉動は致すまい、愈よ彼等に相違ないか

イア これは間違ましたやうてムリます

カツシオ及び若干名の役人手に、松明を携へ登場

オセ これは公の御家來と、某が副官でムつたか、ようこそ御出なされた、して何ぞ變つた事でも

シカオ 公よりの仰出には、時を移さず、即刻御登城あれとの事にムリます
オセ さて何事であらうぞ

カツ サイブラスにて何事か、火急の事件が起りし事と察しまする、今夜しも船が持て来る使者の數々、踵を接して到着致し、議官達も俄に召集相成て、はや御前會議が始まらうと致す所、閣下の御宿所へも御召の使者が向ひました、御不在とあるに由て、御行衛を尋ぬる爲め、某等を初め三手の人數が、更に處々方々へ向ひました次第でムります、オセ 其中にても、足下に尋ね當てられたは、何より僥倖しよさてこれなる家に、一言申置くべき事がムれば、其後かきにて、直様同道致すてムらう

とオセロ退場

カツ 旗手殿、大將は此家こゝに何御用て

イア されば大將には、よい親船へ乗込まれて、ムるが、是が正當の御獲物と極つたなら、實に一生涯の御果報者

カツ 何の事やら一向解らぬ
 イア 御結婚なされたと申す事
 カツ それは何處どこの女子と

オセロ再び登場

イヤ 南無三——大將にはこれより直ちに
 オセ いざ／＼同道致さむ
 カツ 閣下を御尋ねの人數が、又彼處へ参りました
 イア あれこそブラバンシオ、大將、御氣付けられい、よも好意を以ての御出いでては

ブラバンシオ、ロアリゴ、並に役人共手に／＼松明、劍戟を携へ登場

オセ ヤア留まり召され

ロテ あれがムールでムります

アラ 打据ゑよ、盜賊ぢや

と皆々拔連れ兩方に立向ふ

イア 其處に居るはロデリゴか、サア來い敵手を致す

オセ 刃は鞘に藏められい、露が附着らば錆るてムらう、御老人、刃物三味に訴へるより、御年齢に訴へて御思案なされたが宜しくはムらぬか

アラ エー汚はしい盜賊め、拙者が女は何れへ隠した、汝愚なれども、妖術を以てたぶらかしたに相違あるまい、何う考へても彼の娘が、魔術の鎖で繋いでないなら、あの優しい美しい樂しげな娘盛り、同國人の金満家で、しかも美男の若殿原から、受くる結婚の申込さへ、承諾ぬ程で

あるに、何の世間の物笑ひに、親の膝下を脱出て、汝如き人非人のうそ氣味悪い懐へ何を目當に逃込まうや、汚はしい妖術もて、たぶらかしたか、さもななくば、何を申すも纖弱い娘、魔薬を用ひて精神を鈍らし、たに相違はないと、拙者が鑑定に曇りはあるまい、ハテ飽くまで糺明致さいては、積つても大抵知れた事、世の中を騒がす、御法度の魔法遣と見たは癖目か、それ物共彼奴召捕れ、反抗うたら容赦に及ばぬ

オセ 雙方とも静まりめされ、拙者の役割が廻て來れば、後見人の差圖はなくとも、勝手に喧嘩は致して見せる、さて閣下には、某を何處へ御連れなされて、御糺明なされますな

アラ 早速法庭を開き、汝を召喚致す迄は、先づ牢屋へ繋ぎ置く

オセ 仰せに従はゞ如何てムらう、國事に關して、早急に、公より某を御召

の使者、此處に相待ち居るものを、公にはそれでも御満足に思召されませうか

役人 げにその通りでムリです、公には俄かの會議をよ開きなされ、閣下の御館へも、お召の使者が向ひし筈

アア 何と、公には會議を開かれしとや、此夜深に、イヤ此奴を召捕り引立てよ、拙者には等閑ならぬ理由がある、たとひ公御自身なりとも、又は同役の誰彼とて、よも之を他人事とは思ふまい、若しかゝる悪事を棄て置かば、奴隸共や蠻民風情が我廟堂の上迄彌蔓らうに

と一同退場

第三場—會議室

エニス公、元老院議員大勢車を圍みて控へ居る、其他役人共

公 まだ今迄の所では、信を置くに足る程の、注進はないやうぢや

甲議員 いかにも所説まち／＼でムリです、某への通信には、兵船凡そ百七艘

公 予が手許への通信には、一百四十艘とある

乙議員 某へのは二百艘、乍去たとへ精確の點は合はずとも、そはかゝる折にありうちの事、兎も角も土耳其の海軍、サイブラスへ寄するとの、一事丈は皆な明白

公 それはさもあるべきこと、多少の相違あればとて、虚報ならむと安心は致されず、恐れても恐るべきは其大體に誤謬なかるべき一事なり、

水夫 (奥より) 御注進く

役人 海軍方よりの使者でムります

水夫登場

公 さて何事ぢやな

水夫 土耳其の軍勢、ロドスの島へ向ふに就き、此旨政府へ御注進仕れと
アンヂエロ閣下の御命令故、即ち馳参じましてムります

公 これはまた變つた注進ぢやが、各の考は

職甲 どう考へても左様の事があらうとは、察する所敵を欺かむず擬勢
ならむ、彼のサイブラスは、土耳其が爲めに要害の地、ロドスの島より
遙かに樞要、加之防禦の設備も彼島の如く堅固ならず、さればサイブ
ラスこそ、彼等が取らむと欲する所にして、又取易しとなす所、然るに
其取易き所欲する所を棄て置て、欲せざる所、難き所に立向ひ、先んず

べきを後になし、無益の危険を冒さむなどと、土耳其はなか／＼左様
な拙ない事は致しますまい
公 いかにも萬々、ロドスの島を襲ひは致すまい、イヤ又々注進が参りし
様子

使者登場

使者 賢明なる殿下に申上ます、土耳其の海軍、ロドスを指して急ぎし
が、其處にて後詰の兵船を待受け、今は總軍全く勢揃を了りましてム
ります

職甲 さればこそ某も、左様の事と考へ申した、して彼等が船數は如何程
と思はるゝな

使 三十艘ばかりにムります、さて只今は元來し海路を取て還し、明白

にサイプロス攻撃の態度を表しました、忠勇兼備の御大將、モンタノ閣下の命に依り、御注進の次第右の通り、御信用あらせらるゝ様、伏て願上まする

公 さてこそサイプラスと極まつたり、さて、マールカス、ルツシコスには只今市中に居るかどうぢや

驥甲 イヤ、フロレンスに居らるゝ筈でムります

公 然らば予よりの書面を認め、早馬を以て傳送致せ

驥甲 ヤア、ブラバンシオ殿、并に勇敢無比の、ムール殿が見えられました

アラマンシオ、オセロ、イアゴ、ロアリオ、並に役人共登場

公 勇敢なるオセロ殿、公敵、オットマンに對して、早速卿を煩すべきことがムる(アラマンシオに向ひ)おゝ、卿も其處に、ようこそ御出乍去、今夜は卿が、意

見と助言とを聞きえざりしこそ残念なりし

アラ それは某よりも申す事、御許容あれ殿下、今夜某を、寢所より起し申しは、某が役目でもムらねば、又承つた御用の筋でもムりませぬ、さては、公の心配事も、現在の某には、少しばかりも感じませぬ、樋口を溢るゝ洪水の、支ふべくもあらぬ程、堪え難なき私の悲みが、あらゆる心配事を打消して、某が心中は、只其悲みが一杯でムりまする

公 して、それは何事ぢやな

アラ 女おゝ、女が

一同 頓死でもなされましたか

アラ いかにも某に取ては死せしも同然、彼女彼女は辱められましたしてムります、如何なる籤醫の調劑か、盛りつけられし魔薬と魔術で、精神を亂さ

れました白痴でもなければ、盲目でもなく、人並の識別は有つた女、それが妖術の爲めなら、箇様な間違を致しませうや

公 左様な邪なる手段も、卿が息女をたぶらかし、卿が掌上の珠を奪ひし、其悪人は誰にもせよ、卿は親ら容赦のない法典を、如何程でも好な程、嚴酷な意味に讀みときて、處分せられて宜しからう、たとへば其悪人が、子が息なりしとて、何條躊躇に及ぶべき

ア 辱うムります、其犯人こそ誰あらう、今夜國事の御爲めとか、特別の御召にて御召寄なされました、これこそな、ムールてムります

一同 ハテ困つた事ぢやナア

公 (オセロに向ひ) 卿は何と、言譯は

オセ 何のムりませう、事實かやうてムります

オセ 我が畏敬し奉る、至嚴至正なる殿下、並に御一座の高官方、某是なる老人の息女を連出しましたは、眞實でムります、加之結婚をも致しました、某が犯し、罪はたゞ是丈でムります、元來辯舌に爛はぬ某、浮世の人の、優しい言葉遣ひは、少しも存ぜず、七歳の幼立より、此今迄、天幕の中に起臥して、戦鬪の事にのみ拘づらひ、平和な月日を送りしは、一年と迄はムりませぬ、されば某が口にし得る所は、只戦争の駈引許り、此廣い浮世の事は、何一つ存じませぬ、従て某が此度の所業に就き、辯解致しますればとて、ほんの無益でがなムりませう、乍去暫時の御辛抱を乞ひ奉り、取締のない骨露の戀の筋道、先づ一通り御耳を汚し參らせむ、ブラパンシオ殿の御詞通り、果して如何なる魔藥、如何なる妖術を用ひしや、其邊熱と御聞下され

アウ まだほんのおぼこ娘、我と思ひ浮べし事にさへ、顔に紅葉の初々しさ、さる生娘が、その性質、年の頃、生れ故郷、世の信用、あらゆる物を顧みず、日頃は見るも恐れし、荒くれ男を慕ふとか、完全無缺の乙女子に、左程まで自然の人情に背ける所業ありとは、取留もない臆断辯説と申すもの、必ず忌々しき邪道をもて、迷はせられしに相違ないと、見るより外に術もムらぬ、更めて申上まする、一度飲めば、血潮を亂す戀藥、さなくば妖術の魔水をもて、女は迷はせられたに極まりました

公 左様な淺墓なる當推量、だらう量見などよりも、もつと明白な、確かな證據がない上は、何と申されても、それが證據にはなるまいが

賤甲 イヤ、オセロ殿、ちとよこしまな無理手段で、彼の少女が愛情を、征服したか、但しは又、互に思ひ思はれて、精神と精神とが通ふてふ眞實の戀

の筋道をゆかれたか、其邊よく御話し下され

オセ 願くば方々、サギタリ一の旅館へ使者を遣し、デスデモナを召喚の上、親父の面前にて委細を語らせ、熟と御聽問下されたし、若し彼女が白狀にて、某が所爲に、不正の廉を御見出あらば、某に對する御信任、官爵は申すに及ばず、嚴刑をもて、某が一命、御召上に相成るとも、露苦しとも存じませぬ

公 然らばデスデモナを召寄せよ

オセ それイアゴ、御使者を案内致せ、汝は彼處(サギタリ一の旅館)を承知の筈

とイヤ、及侍者退場

さて彼女が參着を待つ間、神の御前に懺悔を致す其様に、露隠し立なく、詐りなく、如何にして某が彼の少女の愛を得るに至りしか、又如何

にして某が彼女を戀ふるに至りしか、ありやうを其儘白狀致すてム
りませう

公 それは聽問致すてムらう

オセ

彼女が父親ブラバンシオ殿は、日來某を愛せられ、屢ば御館へも招
かせられ、其度々に某が身上嘶、年々の閱歷、親しく經來りし野戰攻城、
轉變の身の上どもを尋ねらるゝに、乃ち生立の昔より、其當時迄の經
歴談、此上なう悲慘かりし椿事の數々、海陸の恐ろしき變事、間髪を入
れざる不思議の逃亡、暴敵の捕虜となりて、奴隸に賣られ、漸く鐵鎖を
通れし物語、さては國々を經廻りし旅中の珍談、廣大なる洞穴、不毛の
荒野、礦山、岩窟、天を支ふる山嶺、さては友喰の食人鬼、肩より下に、首の
生えたる人間など、それやこれやを見聞のまゝに語りしに、彼のデス

デモナは、此物語にさも執心の躰なりしが、家事の爲めに度々中坐、な
れども急ぎ用事を濟まし、戻來れば再び物語に耳傾け、更に飽く事を
知らざる様子、此躰を察せし某は、好機を見て此物語を、反覆せむかと
ほのめかせしに、頼むゝとの切なる願、斷續には聞知れども、連續て
は知らぬ廻國嘶、是非再びとの請を容れ、即ち改めての身上嘶に、若年
の折の、慘ましかりし出來事共に及びし時は、彼女は甚く感動の餘り、
落涙に及びしことも幾そ度、さて物語の終りし時、某が得たる報酬は、
彼女が無限の溜息吐息、實に不思議、此上の不思議やある、げに哀れ、此
上の哀れやあるとの切なる詞、寧ろ斯る物語に耳傾けざりしならむ
にはと、悔みながらも更に又、天我が爲に、かゝる偉丈夫を、得させたら
ましかばなど申されつゝ、某に感謝の詞を述べ、眞實卿が身上嘶は何

人の口より出るも、妾が愛を惹いて餘ありなども申されました、さてこそ某も遂に意中を打明けました次第でムります、されば彼女は某が過來し幾艱難の故に某を愛し、某は亦彼女が其幾艱難を憐むの故に、彼女を愛するに至りました、某が用ひし妖術とは、是より外にはムりませぬ、イヤ最早彼女も参りましたれば、御聞糺し下さりませい

アスマモナ、イアゴ、侍者若干名登場

公 其様な談話を聞かせられては、予が女などでも堪るまい、コレ、ブラバンシオ、かう事は破れても、穩便に纏めて置くが何奇、まとめて置けば破長刀も空拳には優る道理

ナラ 何卒彼女が申す所をお聞き下され、眞實彼女が幾分なりとも、オセロを慕ふに相違なくば、彼を侮辱せし某が、天罰立ろに至るべし、コレ

娘、先づ此のやうに、歴々方の御列席の其中で、其方が一番服従の義務を負ふは何人ぢや

アアス 父上様妾が身に負ふ義務には二通りムります、父上には、生の御恩に此年來、御教育の御大恩、それに酬ゆる子たる者の義務、何の忘れて宜いものか、乍去父上様妾も今は夫持母上様が其昔し、生の父御を後にして、父上様に御附なれし其様に、此上は妾も亦、これなる我夫ムール殿に、従はねばなりません

アラ チエー情なや、しなしたり——此上は殿下、お構ひなく國事の御相談をお始めなされい、あゝ有つまじきものは子なりけり、他人の子を養ふたが幾倍の優——ヤイ、ムール女は喜んで貴公に呉れるは、まだこんな事のない前なら、貴公等風情に、指でも差せる事ではなけれど

——女シヅメよつく聴け、其方の外に、子といふものゝなかりしが、今思へば却て僥倖しあはせ、其方に懲りて妹等に壓石おしを附置くし殘刻しんかくさを、見ずに濟むは先づ何寄り、殿下某が用事ははやは迄てムります

公 其諦めは、予も同意、此上は新夫婦との交際かざいをば圓滑えんかつうせらるゝ様、ちと談義を致して聞かさう、治療の方の絶えたらば、絶望の淵にこそ、悲みは却て消ゆるもの、過去りし不幸を悲むは、新たに不幸を求むるに異ならず、運命の呵責も、勘忍の前には、玩弄あそび物も同然、笑て盜ぬすらする人間は、盜ぬすより何をか奪ふ道理、無益むやくに悲む人間は、自分て自分を刺ぐといふもの

アラ 然らば彼のサイブラスも、土耳其の自由にお任せなされ、此方こつて笑つて居る間は、全く奪とられは致すまい、胸に幽鬱ゆううつのないものには、唯慰藉なぐさ



ACT I Sc. 3

ステ此上は妾も亦これあふ我夫ル殿に.....

を得るのみ故、御忠告の名言にも服しませう、足らはぬがちなる勘忍
袋から借金して、悲みへ拂へとは、苦艱の重荷へ名言の重荷を添ふる
と申すもの、兎角名言と申すものは、場合次第で、甘くもなり苦くもな
るもの、詞は詞丈、耳からの注薬で、心の苦痛が癒つたとは、聞いた事も
ムりませぬ、イヤ此方にはお構ひなく、何卒國事の御相談をお始め下
され

公
さらばオセロ殿、土耳其の軍勢大舉して、サイブラスへ寄するとの事
なるが、彼處の固めは、卿熟と承知の筈、鎮守の代理總督が、適任の將官
なることは、人皆の認むる所なれども、論旨に等しき輿論の聲は、卿の
赴任を冀ふ様子、就ては何卒卿には、新婚の慶事を斬つ、はっつの騒ぎも
て、掩はんことの淺ましけれど、是非に領承せられよかし

オセ 戦場を家なる習慣は、楯を敷寝の箱枕も、毬毛の厚衾に變りませぬ、如何なる困難の其中にも、直ちに慰安を求むる某、オットマンとの戦争は、屹度引受申すてムらう、それに就き折入ての御願には、愚妻へ然るべき御準備を下し置かれ、相當の御待遇、御手當、また彼女が育ち柄に相應はしい住居と付人をば、何卒御配慮下さりませすやう

公 父親方へ、預け置ては如何ぢやな

アラ 其儀は御辭退仕りませう

オセ 某も其儀は

アス 妾も其儀は、朝夕面を見せましては、父の怒を誘う計り、殿下への御願には、妾が申條を何卒御聞取下されて、不束なる此身の願を、偏へに御贊助下さりませ

公 して和女が願とは

アス 何處迄も夫と共に、思ひ込みました此妾、思切て箇様な事を致します上は、世間へ憚ることもムりませぬ、妾の戀ひ慕ひましたは、夫の人物、夫の姿を其心中に見る妾、此身の精神と運命とを、投げ懸ましたも、夫が名譽、さては其勇敢なる氣象へてムります、その夫は戦場へ馳向ひての幾艱難、それに妻たる此妾は、後に殘て榮華の蠶魚て暮し、ましては、契約の詮もなう、歸國待つ間の物うさは、嘸かしてムりませう、それ故何卒妾には、夫と同行致すやう、御許しなされて下さりませ

オセ 此儀は何卒御聞届下さりませ、方々、天も照覽せ、某がかく願ひまするは、さら／＼以て肉慾の渴をいやさむ爲めならず、又年甲斐もない若氣の熱情を満足させむ爲めもなく、其他何にもせよ、少しも我慾

の爲めではムりませぬ、たゞ彼女が優しい心の爲すがまゝに任
 さう爲め、さては某妻の側に在るの故をもて、身に負ふ此大任を怠る
 如き者と思召されな、はかなき戀の歡樂が、此心身を腐らして、身の職
 責を誤る如きことあらば、某が武運も末、頭に戴く此兜は、鍋ともなつ
 て臺所の隅に埋れもせよ、あらゆる災厄振懸り、汚名を被る法もあれ
 そは同伴せらるゝとも、せられぬとも、卿の心任せがよい、何はしかれ、
 國事は一刻も早くと迫る程に、急いで仕度を致さずばなるまい

甲 今夜にも御出立あらせられい

オセ 心得ました

公 明朝九時には、再び會議を開くであらう、オセロ殿、部下を一人残しお
 かれい、改めての令狀や、官位格等何や彼やの傳達は、其者を以て送ら

せ申さむ

オセ 然らば旗手イアゴーは、正直律義の男故、愚妻の護送をも彼に任せ
 ますれば、後より御命じ下さるゝ必要の事共は、皆な彼に仰付け下さ
 りませ

公 然らば左様致すであらう、何れも、さらば——(向ひに)これブラパンシ
 オ殿、徳は美を缺かずと申す上は、卿の婿殿が、肌が黒いとして仔細はな
 い、飛んだ美しい男であらうが

乙 さらば、ムール殿、デスデモナ殿を大切になされませ
 アラ コレ、ムール、足下が眼の玉の黒い間は、女房に氣を付けたがよい、父
 をさへも瞞した女、足下とても瞞されぬものでもない

と公、隨官達、役人等退場

オセ 何のく、デスデモナの貞操は、命を賭しても保證致す、コレ、イアゴ
 ー、デスデモナをば、屹度汝に預けるぞよ、汝が妻に冊かせ、善い機會を
 見て、恙なく連て参れ、——ハテ、デスデモナ、此上は汝と睦じい浮世語
 りも、はや束の間に迫りしぞや、時刻到れば、否應なしに、出立致さねば
 ならぬ此身

とオセロ、デスデモナ退場

ロテ モシ、イアゴ殿

イア 何事ぢやな

ロテ 何う致したら、宜いてあらう

イア ハテ家へ歸て寝むが宜いてはないか

ロテ 此まゝ入水でも致したい

イア 左様な事を致すなら、身共は足下を見限る計り、さてく阿房らし
 い事ではある

ロテ 生存へ居るは苦痛と知りつゝ、生存へ居るこそ阿房らしい、苦痛を
 癒やす其醫者は、死より外にないならば、死ねとの處方に不思議はム
 らぬ

イア ヤレく情ない事ぢや、身共も二十八年來浮世を見て、損益の差別
 が識別る様になつて以來、世間をかう見渡すに、自己を可愛がる方を
 會得した男といふはないものぢやなア——身共などは、婦女子一匹
 の爲めに、身を投げやうなど、云ふ程なら、人間を廢めて猿にてもな
 る所存ぢや

ロテ ハテ何うしたら宜いてあらう、實に此様に、焦れて居るは耻辱であ

らう、乍去某には之を癒す力はない

イア 力も糸瓜もあるもので、かうするも彼アするも、皆んな自分の意志から、鉢軀が鳥なら、意志は則ち鳥作男、大根を植ゑうと、蒿苳を蒔かうと、午芳を残さうと、胡蘿蔔を取去らうと、一種類を仕立てうと、多種類もて雑返さうと、但しは怠けて荒さうと、丹精して肥さうと、鳥を左右するは、鳥作男の方寸にある、人生といふ權衡は、一方が理屈、一方が肉慾でもつたもの、若し其理屈の一方が缺けたなら、人間の血性と劣情とは吾人を導いて、飛んだ終結へ陥すてムらう、幸に理屈といふものがあるに依て、燃る情熱、肉慾の刺撃、其外有ゆる心猿意馬の暴れ狂ふを、繩に繋ぐ事も出来る、足下が戀ぢや色ぢやと騒ぐ其物は、草木で申せば、枝葉も枝葉、外界から持て来た接木の芽

ロア イヤ、左様なものではムらぬ

イア イヤ、其戀こそは放縱な血の氣の凝結で、意志の羈で制へぬ故に出來たもの、サア、男らしくするがよい、猫の兒や盲目の狗兒ではあるまいし、入水して死ぬとは何事ぢや、足下の腹心と契った身共切ても切れぬ羈で、かく足下に繋がる上は、足下故に一骨折るは、今を措て他時にはない、財布に金を詰め込んで、附髻で顔を更へ、此度の戦争に従軍せられぬ、繰返して申すが、財布に金を詰込んでぢや、あのデスメモナが何時迄も、ムールを慕つて居られぬ道理がない——財布に金を忘れぬやう——ムールとても同じ事、此戀の始りが、激しかった其割に女の方での飽口も、屹度激しい事でムらう、何がさて財布に金が専一、えてムール人と申すは、意志の變り易いもの——財布に金を忘

れまい——今こそ彼奴が口に甘しと思ふ食物も、苦くなるは瞬く間、
女の方でも、若い男が欲しうなるは火を賭るやう、ムールと二人居並
んで、熟々考へて見たならば、とんだ婿選びをしたものと、悟る事もあ
るであらう、イヤ是非さうあらねばならぬ筈、ぢやに依て財布に金を
詰込みめされい、どうせ思切つた事を致すなら、入水などより、もつと
氣のきいた事を致すがよい、ハテ出来る丈の金を才覚するのぢや、行
衛定めぬ野蠻人と、高尚なゼニスの子との其中に、云替した其契り
が何のどれ程固からう、身共が知慧の有丈と、地獄から借る悪魔の力
で、破ることが出来るなら、ハテ女は足下が掌中の物、金を才覚せいと
はこゝの事、入水は思留るがよい、何の益にも立たぬ事だ、思ふ女を手
にも入れずに死なうより、望を叶へて縊らるゝ方が當世といふもの

ロア 然らば成行を待て居る程に、屹度某の爲めに計つて下さるか

イヤ 氣遣には及ばぬ事、先づ金を才覚なされい——これ迄度々申した
が、其上にも反覆し申す様に、身共は、ムールが大嫌ひ、其理由は心の底
の底迄深く沁て居る、足下とても同じ事、此上は協心同力、復讐を致し
て遣りたい、足下が首尾克く、彼奴の額に角を生して遣るならば、足下
にはおたのしみ、身共にも善いなくさみ、時といふ腹からは、種々の事
が生るゝもの、いざ／＼さらば、金の才覚に出懸なされ、明朝又相談を
致すと致さう、おさらば

ロア して明朝は何處にて

イヤ 某の宿處と致さう

ロア 然らば早朝御尋ね申さう(と出行かむとす)

イア おさらば——イヤ、ロドリゴ！一寸一言

ロテ 何てムる

イア 入水は愈よ廢止さうといふ氣になられたか

ロテ 某は全く腹を變へました、此上は急ぎ田地を賣却なし、金子才覺致すてムらう

イア さらば、ずつしり、財布を膨脹まして置くがよい

とロドリゴ退場

イア かう世の中の痴漢奴は、みんな乃公の金箱だ、自分の娛樂と利益を外にして、彼な痴漢を片相手に、貴重な時を費したなら、乃公の智慧に對しても、知慧冥加に外れると申すもの、我が嫌ひは彼のムール、乃公の閨房を辱かしたと、世間の取沙汰は、信れぬが、よし嫌疑にもせよ、

事實にもせよ、其まゝには濟されぬ、幸ひオセロは乃公を信じて居れば、仕事の都合は誂ひ向、カツシオは好男兒、おゝそれ、彼奴の役を横取して、日頃の願望を叶へたなら、それを眞の兩天秤、さて其計略はどうしたもの——おゝ、好い機會を見計らひ、カツシオがデステモナと、餘り親しうして居るはと、そろ／＼ムールの耳に毒を注せば、容貌から舉動迄、女殺しと出来た男、嫌疑を惹くは疑なし、それにムールは馬鹿正直、人間といふものは、見懸通りに、皆な正直と心得居て、鼻端の先で從順く、引廻される驢馬のやう——おゝ、さうぢや、隠謀の種子は既う蒔いた、此上の仕事には、地獄から借る悪魔の力と、闇夜の邪氣で密々に、二葉に仕立て上げずばなるまい

と退場

第二幕

第一場——サイブラス島海岸の一市 阜頭附

近の廣場

モンタノ、及び紳士二人登場

タモン 彼なる岬の沖の方に、何か見ゆるものはムラぬか

甲紳士 何もムリませぬ。潮の高く躍る計り、空と海との境にも白帆一つ見

えませぬ

モン 陸では酷い大嵐、あのやうに城の狭間を揺すりし例は、聞いた事もムらぬが、海でもあの通りであつたなら、山と崩るゝ高浪に、いかな樫の木、の肋骨も(軍船)碎けずには居られまい、何の様な事か起りはせま

いか

紳乙 定めて土耳其艦隊は、ちり／＼ばら／＼てムリませう、浪打際に立て居れば、逆巻く浪は雲を衝くかと疑はれ、高く長く恐ろしい鬢のやうな形して、推寄せ行くを見る時は、きらめく北斗を浴せかけ、周囲の小星の光は今、あはや消えむと思ふばかりでムりました、箇様に凄い海上の有様は、嘗て見た事もムリませぬ

モン いかにも土耳其艦隊、何處の港へも隠れずに、嵐に暴され居たならば、沈没の難はえ遁れまい、あれを持堪へられう道理はない

紳丙 吉報が参りました、戦は終結此大嵐で土耳其の野心は水の泡、彼等艦隊の大概は、難船破船、目も當てられぬ有様と、今着いたエニスの船が現場を見て來ての噂でムる

モン 何とそれは眞實でムるか

神丙 エロナの港(管轄地)を解纜したる船一艘只今着港彼勇敢の聞え
高きオセロが副官、ミカエル、カツシオと申す者が参られました、オセ
ロが乗船はまだ着港に及ばねど、彼は此度此島の總督に任せられ、そ
れて参られるとの事でムる

モン それは某も喜ばしい、彼ならば屈竟の總督ぢや

神丙 乍去副官カツシオも、敵艦の敗滅は喜びながら、オセロ殿の身の上
が何うなられたかと、驚ぎ切て居られます、あの嵐に吹分られて、互
に消息知らぬとの事

モン 何卒無事にしたものぢや、當初某も、彼が部下に居たことがムる
が、實に名將とは彼が事、イザ／＼海岸へ参て、入港の船をも見、又勇敢

なるオセロの乗船が、沖の方に見ゆるかどうか、海と空との區別さへ、
見分かれ程になる迄も、眼を見張て見詰めませう

神丙 さらに皆々諸共に、かういふ中も、後から／＼と、入港の船が心懸り

カツシオ登場

シカツ 當サイブラスの天晴干城たるモンタノ殿、ムール殿を左様にお褒
め下さるとは、有難い事でムります、危き海上にて、見失ひたる彼が身
の上、願はくは、昊天も風波を退け、御擁護あらむことを祈ります

モン 御船は堅固でムりませうな

カツ いかにも御船は堅牢、水先案内は、人も許せし其道の達人、夫故某も
至て心強く覺えます

と此時奥にて「帆影が／＼／＼」といふ聲聞ゆる

丁紳士登場

カッ 彼の騒ぎは

紳丁 市中は空虛、市民は海岸に總出にて、アレあの通り帆影々と叫びます

カッ どうやら其船はオセロ殿の

と此時砲聲聞ゆる

紳乙 あれは船より打出す禮砲の響、何れ味方の船に相違はムらぬ

カッ 何卒早う往て到着なせしは何人なるか、確めて来て下されい

紳乙 畏まりました

と退場

モン それはさうと副官殿、大將には、はや奥方をお持なされましたか

カッ いかにもお仕合せと、若い奥方をお持ちなされました、それはその

美しさは物語の美女は愚か、筆舌の盡す所ではムりませぬ、如何な書工も筆を棄て、如何な詩人の空想も及びもムらぬ

乙紳士再登場

して着港なしたる其人は

紳 大將の旗手にて、イアゴと申す仁でムります

カッ それは大層早うムつた、道がの暴風激浪、さては暗礁沙洲など、船舶の強敵も、美といふ觀念はあるかして、デスデモナ殿の乗船には、其残忍の性を藏して、無事に過らしめたものと見える

モン デスデモナと仰せらるゝは

カッ 即ち只今御話申せし、大將殿の北の方、イアゴと申す者こそ、其御

扈從でムりますが、思ひしより七日も早くお着なされました、此上は大デヨブ神、オセロ殿を御擁護あり、神ながらの氣息をもて、御乗船の帆をはらませ、少しも早う、其大艦の姿を見せ、此港を導んぜしめ、デスデモナ殿の腕には戀の喘ぎを抱きしめ、我等が沈んだ元氣には、復活の火を點じつゝ、サイブラス全島の慰藉を贈らせ給ふ様祈るばかりでムりまする

デスデモナ、エミリア、イアゴ、ロテリオ及び従者大勢登場

おゝ御覽あれ、積んで参つた寶物は、早や荷上が済みました(デスは上陸の意)、サイブラスの人々達、さゝお下に居られませい——これは夫人、御無事で祝着に存じまする、昊天の御恵み、尙ほ此上にも貴女の行先、前後左右に降りかゝり、及ばぬ限もないやうに祈りまする

デス 忝なうムります、カッシオ様、して我夫の御行衛は

カッ まだ御到着遊ばしませねば、如何おはすやら存じませぬが、必ず追付御無事で御入港遊ばす事でムりませう

デス ても氣掛りな事ではある——何うして卿とは離れ——に——

カッ 彼の暴風に吹分けられ、激浪に隔てられ——ハテお聞なされ彼の聲は

奥にて「帆影がく」といふ聲に引續て發砲の音聞ゆる

紳乙 城砦への禮砲でムります、又もや味方の船が入港致したと見えま

カッ 急ぎ御聞糺し下されい

と乙紳士退場

イヤ、イヤゴ殿、御苦勞てムた——（ア更に向ひ）これは令聞、ようこそ御出（接吻しなから）イヤゴ殿御免あれ、幼少よりの習得にて、憚りもなうかやうに致さねば、氣が済まぬが某の作法てムる

イヤ イヤ某には舌の留度もない程、しつこく饒舌べる女てムりますが、其舌數程貴殿に唇を御許し申したなら、いかな貴殿も堪能なさらう

アス そのやうな事を、至て口數の少ないエミリア

イヤ どう致しまして多過ぎて困り入ります、某が眠い——と思ふ時ても、容赦もない長談義、去りながら奥方、心中に何事か思ふことがムる時は、それを口に出さぬだけは、いかさま寡言てムります、心て人を輕蔑する癖者

エミ そのやうな事、此身に云はれる記應はない

イヤ ヤイ、外へ行けば繪にかいたお姫様、客間へ出れば、鈴のやうな作り聲それで居ながら、臺所では野猫のやうにいがみつけ、惡戯を爲た時の如菩薩顔、怒った時の如夜叉面、仕事に懸て能く遊び、寢室へ退むて能く稼ぐ

アス 惡口ばかり、ちとたしなむだがよいわいの

イヤ 眞實を申すのでムります、若しこれが違つたなら、如何なる御蔑視ても受けませう、ヤイ、エミリア、起て遊び寝て稼ぐとは汝が事ぢやな

エミ 女房の讚附は止して下され

イヤ おゝ、定めて耳が痛からう

アス 若し此妾に讚を付けやうならどのやうなことを云やるかや

イヤ 奥方それは御免下されませ、惡口の外には何も知らぬ男てムりま

す

アス 大事な、云うて見や——誰ぞ埠頭へ往ったかいなう

イア 参つた者がムります

アス 妻はちっとも面白い事はないけれど、面白さうに見せ懸て、自分で自分を紛らして居るのぢやわいな——さア——妻の讃附は

と是よりイアゴ一輕口交りに様々の女の讃附をすること

あり、アステ聞き終りて一杯食はされたといふ風情

アス 喃エミリア、汝の夫てはあるけれど、最早何も聞くまいぞや——カ

ツシオ様、ほんに口の悪い、何にも構はぬ男てはムりませぬか

九ツ 實に——詞の露骨な男てムります、いや其様な事をお聞きなされうより、戦争の事でも、お聞きなされたが、お慰みてムりませう

とカッショオ、アステモナの手を取り、羞しく挨拶する

イア (旁) 彼様ことを云ひながら、奥方の掌を弄うて居る、ようこそ——囉

き話、其様な舉動を蛛網にして、カッショオ如き圖大な蜻蛉を捉へるは、

乃公が御手の物——ウム、今度は笑ひかける、よい——其得意の禮義

を鎖に使用して、今に貴様を縛つて呉れるわけに——貴様のいふ通り、乃公

は兵法に長て居る、副官といふ貴様の役目は、其禮義で奪て遣す程に、

貴公子氣取の其三指の接吻は、いづれ後悔の種であらう (貴婦人の前に

接吻するは當時の) イヤ、よい——ようこそ——其接吻、此上もない作法

そりや又唇へ三指ぢや、貴様の爲めには、寧ろ、搜瓶の口でも啣へたが

優だらうに—— (此時喇叭の) や、ムール殿ぢや、彼こそたしかに閣下の

喇叭

カツ いかにも左様でムらう

アス そんなら早くお出迎を

カツ それ其處へお出遊ばしました

オセロ及従者連登場

オセ おゝ美しの女武者

アス 懐かしのオセロ殿

オセ 汝に今此處で逢はうとは、喜悅と驚愕が等分ぢや、おゝ心から嬉し
いぞ、嵐の後の長閑さが、何時も箇様であるならば、吹けよ風、狂へよ嵐、
死人の眠を覺さむ迄も、沖漕ぐ船は、忽ち天上に揺り上げられ、忽ち奈
儘落の底に落つるかと思ゆる斗りに、揉まれもせよ、あゝ嬉しや、寧ろ
此今死なば、之に増す幸やある、行衛もわかぬ將來に、此程のたのしさ

が又あるべしとも思はれね程、心の中に充つる悦喜

アス そんな縁喜でもない事を、二人が中のたのしみは、月日と共に積る
計りに致したうムります

オセ 何卒其様にしたいもの、胸に溢るゝ此嬉しさ、云表はさむ言葉もな
い、いてゝ此れが(ながら)二人の中の、たつた一つのもつれあひ

イア (白)おゝ今こそ其の様に琴瑟調和、聽て不調和を入れて呉れるは、正
直な乃公の方寸に在る

オセ いざゝ入城致すと致さう——これゝ人々、戦争は早や鎮まつ
て、土耳其の軍勢は皆溺没——さるにても此島なる舊知の人々は如
何致せし、何れも拙者を痛う愛し呉れたれば、汝とても、屹度歡待せら
るゝであらう、おゝデスデモナ、拙者は悦喜の餘り取亂して、色々の事

を申したな——イアゴー、大儀なから、港へ參て手荷物を揚て呉りやれ、そして船長をば、城内へ案内致して置きやれ、誠に善い人物なれば、随分疎略のないやうに待遇すが宜い——コレ、デスデモナ、返すくも嬉しい出遇を致したな

とイアゴー及びロテリゴーの外一同退場

イア これロテリゴー、後刻港で出會うと致さうが、先づく、此方へ——世話にも懸すれば、生れもつかぬ、天晴な氣象が出ると申せば、足下とても同様と心得るが、果して然らば身共が申す所をお聞あれ、彼のそれ副官にはな、今夜警固の場にて、徹夜番をせらるゝ筈、イヤ其前に話して置くべき一事は、デスデモナは近頃彼奴に首丈——

ロテ 何、あのカツシオに、まさか其様な事は

イア ハテ黙つてよう合點の參るやうに聞くがよい、荒唐無稽な一場の法螺故に、彼の逆上方を考へて見るがよい、實のない法螺計かりて、何時迄惚れて居られやう、足下の胸にそれが判らぬ筈はない、デスデモナぢやとて、眼に保養をさせいては、然るにあのムールの畜生面を見て居るが何の保養情の血といふものが、一通りの歡樂にも倦み果て、だるく鈍くなつた其時は、火を入れて新たな情慾を起さう爲に、男の顔の可愛らしさ、年頃の似合はしさ、又相應はしい心榮やら相貌やらが入用となる、ムールにはそれが無い、其入用品の拂底から、女心は樂まない、次第に倦怠が來て、ムール奴が厭になる、これは自然の人情がさする業で、果は二度目の夫定め——サア是丈の前置は、無理のない免れぬ推察、さて其上で考ふるに、足下が野心の前途に立ちはだか

て邪魔ひろぐ奴原の第一番は、彼のカツシオを除いて誰あらう、油断のならぬ男なれば、賢者顔して、然つべらしう粧へども、胸に一物、燃ゆる情慾の願望を叶へむとの心計り、機會さへあらばと鶴の目鷹の目、來もせぬ果報などは待て居ず、我から果報を作り出すといふ、箸にも棒にもかゝらぬ奴搦て、加へて、男は美し年は若し、生心付いた、年端のゆかぬ娘などに、好かれさうな柄にさへ出來て居る、されば彼のデスデモナも疾くから彼奴に目星を付けた

ロア どうも彼の女に其様な事があらうとは、優にやさしい彼の女に

イア 優にやさしいとは何の事、彼女とても同じ葡萄の酒を飲む女、優にやさしい女なら、マイルにも惚れはしまい、遂先刻も、男の手をぢっとしめ、掌を弄り合うたが、足下の眼には留まらぬか

ロア それは某も見届けたが、あれば禮義作法といふもの

イア イヤ、あれは色事と申すもの、不義な戀慕の曖昧な序開き、あの囁き合うた口と口、吐く息も漏み合う程、實に大それた淫行ではある、コレ、ロドリゴ、筒様に雙方から熱り合うて見れば、愈よ實事となつて、戀物語の本文に入るも真近い中ぢやが——乍去何事も身共の指圖に任せて呉れい、どうせゼニスから足下を連出したも身共ではないか、ぢやに由て、差當り今夜は足下も警固に出るがよい、其後の事は身共からよきやうに指圖を致すと致さう、カツシオが足下を知らぬは幸ひ、身共は見え隠れに足下の側を離れまい、足下は何でも、折がな高聲を發し、若くは彼が家來共を罵り、さては臨機應變の手段にて、いかにもしてカツシオを怒らす様に致すがよい

ロア 成る程く

イア 彼奴性急者の怒り易い性分で、足下を打擲も致し兼ねぬが、わざと其様に持懸けいすりや身共の計略で、サイブラスの人民を煽ぎ立て、カツシオを追放せぬ中は、鎮まらぬ様に計らはう、彼奴既になき上は、前途を塞ぐ一大障碍は、首尾克く除けたと申すもの、其後の計略は又其時の事と致さう、さてこそ足下が願ふ所への道程も餘程近くなるといふもの

ロア 巧くさへ行く事なら、いかにも其様に致して見やう

イア そこは拙者が保證致す、何れ後刻營所にて又御意得ると致さうか、身共は大將の旅行を、是から陸揚致す所、さらば

ロア さらば後刻

とロア退場

イア

(白)あのカツシオがデスデモナに、戀着て居るは紛れもない、彼女がカツシオに惚印といふもありそうな事、乃公は嫌だがムール奴は、確然とした罪のない立派な男、デスデモナの爲めには、又とない好い良人でもあらうか、何を隠さう乃公も彼女を少々慕つて居る、といふのは全くの好色心からでもない、何の道邪淫の罪は這れねど、どうもオセロが乃公の閨房を暴したらしいと疑へば何とやら、嚙下した激薬に、臟腑を嚙まれる心持、其堪へ難き苦みの報酬せうの心から、我妻を取られた代りに、人妻に疵をつけて、雙方平均になる迄は、此の魂が承知せぬ、よし失敗つても、如何な理屈も癒やされぬ、嫉妬といふ心の苦痛を與へて止まらうや、此目論見て、エニスから連て來た彼の瘡狗(テロ

「ゴ」を噓しかけて、程よく操つて置く上は、ミカエル、カツシオは思ふがまゝ、彼奴もどうやら迂散臭い様でもある故、何ぞムールに取留もない讒言をして追拂はせ、ムールには恩を被せ、乃公を善い者に思はせて、ずつしり褒美を取てやらう、でも馬鹿を見るのは彼のムール、さしも安穩で過せる身を、狂亂の躰に仕立て、遣るのか、イヤ何事も此胸の中に、混沌として潜んで居る、悪事の姿は仕立て、見ねば見えぬものぢや

と退場

第二場 街上

傳令使布令を宣べながら登場、人民大勢従ひゆく様

傳

我が尊敬すべき、勇敢無比の大將軍オセロ殿の御意で、只今土耳其艦隊全滅の確報ありしにつき、各随意の祝賀を致されよ、或は舞蹈或は烟火、其外面々の好みに應じて、如何なる遊戯宴酒たりとも、存分に致すが宜い、これは勝利を祝ふ計りてなく、オセロ殿が新婚の披露をも兼ねての事、大將の御意は右の通り、城内の各室人民の出入勝手たるべし、只今五時より十一時の振鈴迄酒宴遊興思ふ儘に致されよ、天よサイブラスの島に幸せよ、神よ名將オセロ殿が身の上を護らせ給へ

と退場

第三場 城内の書院

オセロ、デスマモナ、カツシ、オ侍者大勢登場

オセ ミカエル殿、今夜は警護の者共を取締つて下されい、いかに祝勝の宴なればとて、お互に餘り遊興の度は過ぎぬが宜しからう

カツ 萬事イアゴーが心得居る筈でムリですが、尙ほ其上に某も、自身取締を致すてムリませう

オセ イアゴーはほんに正直者、さらば御免あれミカエル殿、明朝早々、都合次第でちと話したい事がムる——(デスに)いざ——(向ひに)デスマモナ、新調の品物を樂むは是からぢや、さてやがて二人が中に、利子を生むこともあるであらう、さらば

とオセ、デス、及侍者一同退場、イアゴー登場

カツ ようこそイアゴー、最早警固に出ずばなるまい

イア いや副官、まだ十時にもなりませぬに、今直ぐ出懸けるにも及びませぬ、大將には奥方が戀しいので、早々と我等を置去になされたが、いかさまそれも御尤の事、まだとう／＼一晩も、御一緒に御過ごしなされた事もなし、それに奥方はあの通り、人間の者には惜しい程の美しさ

カツ 實に優秀の美人でムるな

イア そして風流の嗜みにも乏しからぬ御様子

カツ いかにも蕭洒した華奢なお性

イア 彼の御目附がどうも云はれませぬ、彼の御目が物云うて、男に挑み

かけるかと思はれます

カッ 成る程人を招いて居るやうな美しい御目ぢやが、それで極柔順しいやさしい眼

イア そして口を開けば、戀の御用心と云はねばかりの其嬌音

カッ 實にあれば完全な美人でゐる。

イア 御二方の閨房萬歳を祈りませう——それはさうと副官、こゝに葡萄酒が一瓶ゐる、それにサイブラスの酒落者共が、是非オセロ殿の健康を祝せむ爲め一献酌み替はしたいと、彼方に待つて居ります

カッ 今夜は御免蒙らう、悲しい事に某は、少々酒を過すと直ぐ腦が亂れて來る、豫て酒の代りに、何か禮法を破らぬやうな、御馳走がありさうなものと冀つて居る位

イア ぢやと申して、彼等は何れも某が入戀の者、たつた一盞で宜しうムリませう、お助太刀は某が致しませう

カッ 某が今夜飲んだはたつた一杯、それも密と水を割つたのぢやが、見られよ此通りの顔色、酒量の弱いには困却く、此上一滴たりとも口に入れて、見悪い躰を見せたらうない

イア 大丈夫の御身としてそのやうな弱い事を、祝勝會ではムリませぬか、それにもだしがたい人々の願

カッ してその人々は何處に

イア 途扉の外に待つて居ります、御手づから御案内下されば、此上の事はムリませぬ

カッ 然らば呼んで參らう、乍去迷惑の事ではある

と退場

イア 最早餘程まゐつた様子、此上一杯強ゐついたら、御姫様が御寵愛の矮狗といふ格で吠えつき噛みつき、嘸騒がしくなるであらう、そこへ持つて来て、あの薄鈍のロデリゴは、戀て性根も何處へやら、殊にデスデモナの健康を祝すとかで、今頃は圖部六であらうに、その男も番に立つ、それにあのサイプラスの三人の若者……彼奴等はいやに高慢ちきて、見識を高い處にぶら下て居る、謂はゞ此喧嘩好の島國の生粹、それを己が強ゐつけて、どろんけんにしてあるが、彼等も番に立つといふ、どれもこれも醉漢の向ふ見ず、其中へ彼のカツシオを突放して、宜い様に突いて遣り、何か此島人の感情を害する様な騒動を起させて呉れう——さういふ中に來たぞ、思ふ通りにいささへすれ

ば、風は追風潮流はよし、先づ船頭は安心といふもの

カツシオ、モンタノ及び其他の紳士と共に登場、召使共酒道具を携へ後より出来る

カツ 實以て某は、既や此通りの大酩酊

モン イヤ小さいのでたつた一盞、澤山とは申しませぬ、軍人に虚言はム

らぬ

イア コレ、酒ぢや、(と云ひながら)

唄を鳴らせや、鳴らせ、チンカラリ、鳴らせや、鳴らせ、盞を、戦争する身

も同じ人命は、夢ぢや、夢の間よ、さゝ酒でもあがらんせ

サア、酒ぢや、

カツ これは、愉快な唄

イア これは英吉利で覺えた唄でムリですが、いや英吉利人は酒が強う
ムリます、デンマーク人が飲むの、日耳曼人が飲むの、又は布袋ッ腹の
和蘭人が強いのと申したとて、英吉利人に比ぶれば何でもムリませ
ぬ

カッ 英吉利人は、飲むことにかけては左様に上手でムるかな

イア 丁抹の飲酒家などは、何の雑作もなく盛潰し、汗一滴流さずに、日
耳曼人を酔ひこかし、瞬く中に和蘭人に小間物店を出させます

カッ 大將殿の健康を祝さうではムリませぬか

モン 某も御同意でムる、副官殿、イザ頂戴致さう

イア お、懐かしの英蘭(又鼻唄)になる

唄「スチブンはよい王様、御召の洋袴が「クラオン」それでも少々高

價いとて仕立屋御叱責頂戴し

王様でさへ其通り、それにお前は小身者、國の亡ぶも驕傲故、古い衣
物で我慢しなく

コラ〜酒ぢや〜

カッ これは又前のよりも、一段と面白い

イア も一度御所望でムりますか

カッ (既や酔潰れたる)不要々々、彼奴其様な事を致すとは、己が身分をも

省みぬ奴ぢや、はて神は萬人の上に在り、神助に預るやうに定つて居
る人もあれば、預ることの出来ぬやうに極つて居る人もあり

イナ 仰せの通りで副官

カッ そこで某自身はと申すに——大將殿や其外高貴の人を差措いて、

無禮の段は御容赦——先づ神助に預らうと思ひ居る

イア 某なども矢張り御同様の考て

カツ 乍憚、それは某の方が先ぢや、副官が旗手に先んずるは順序といふもの、イヤもうこれて宜い解つた、これより勤務に取掛らう——神よ我等が罪を宥させ給へ——サア方々勤務に就かうてはムらぬか、某は酔うては居りませぬぞ、こゝに居るのは旗手、此方が右の手、此方が左手、どうぢや、酔うては居りますまいが、此通り確乎立つ事も出来れば、はつきり喋舌る事も出来ますわい

一同 其通りてムります

カツ ハテ然らばそれで宜しい、假りにも某が酔うてるなど、考へめさぬが宜しい

とカツシオ退場

モン 然らば諸君見張場へ、警固に参るてムらう

イア 閣下には副官が只今の舉動に御目留められましたか、古シイザの幕下に屬して、三軍を指揮するとても、やわか仕損じは致さぬ程の武官でムるが、只だ彼一つの癖がムる故、善悪等分イヤ氣の毒な事てムります、それにオセロ殿の厚い御信用もある事故、ひよと彼の癖が起つた時、此島にとんだ騒動でも起さねば宜いがと、それが何より案じられてなりませぬ

モン はてそれは度々の事てムるかな

イア 酔うて眠る前には、必ずあの序幕がムります、醒てさへ居られたら、一晝夜でも身動もせず、にちやんとして居らるる仁てムりますが

モン それは豫め、大將に注意して置きたいものぢや、恐らく大將はそれを御存じあるまい、彼の通りの善い御方なれば、カツシオが性質の善い所ばかりを取て、悪い處はまだ知らぬ、どうぢや左様ではムらぬか、

ロドリゴ一登場

イア (小聲にて) コレサ、ロドリゴ一、副官の後を追うた〜

と是にてロア退場

モン あの結構なムール殿が、己れに次げる大役を、左様な悪癖ある危険な人物に托し置くとは、こりや如何にも氣の毒ぢや、密と此事を告げて置くのは、却て潔白な所業でムるぞ

イア それは此美しい島一國に代へましても、某には出来ませぬ、某はカツシオをば、心から愛して居ります程に、それよりは今の中、あの悪癖

を改めさする様に致したうムります、や、御聞きあれあの騒ぎは

と奥にて「助けて呉れ〜」と叫ぶ聲聞ゆる、同時にカツシオ、

ロドリゴ一を追ひながら登場

カッ 此奴が〜

モン 何事なるぞ副官

カッ 身共に向て要らざる差圖立を致した奴、打て〜 打ちのめし、海鼠のやうにせにや、措かぬ

ロア 何打つ、何の

カッ まだぬかし居るか、此馬鹿めが

とカツシオ、ロアを打つ

モン これさ副官、先づ〜 此手をお離しなされ

カツ 打棄うつちやんて置きめされ、それよりか頭の臚たまでも、割られぬやうに用心を
するがいゝ

モン コレ／＼貴殿は酔うてゐる

カツ 何酔うてると

とモンタノに打てかゝる

イア (ロアロアに叫あび) 彼方あちかへ、早う構外かまひへ出て、騒動さわご／＼と叫んだ／＼

とロア退場

副官殿これはしたり、誰人どなたぞ早く御助け下され——副官殿——モン
タノ様——申し方々かたがた——イヤハヤこれはとんだよい警固ぢやわい

と警固の音聞ゆる

や、あの鐘の音は——南無三、市民の眠を覺すであらう、これは副官

およしなされ恥辱ちじよくてゐるぞ

オセロ侍者を引連れ再登場

オセ 何事なるぞ

モン 御覽あれ此通りの出血、某は重傷を被りました

オセ 止せ、コレ、じだばた致すと命はないぞ

イア およしなされ副官——モンタノ殿、コレサ御兩人——場所と御役
目をお忘れなされましたか、大將殿よりの御詞ごことばでゐる、およしなされ
と申すに、御名譽ごなごころに拘ります

オセ 如何なれば箇様の樁事さきが起りしぞ、さては我等は下賤げせんの者となり
下り、土耳其人とこにさへ天も禁め給ひたる、同士撃どうしをばし始めしか、基督キリスト
信者しんといふ名に對しても、さもししい争ひはよしませい、己が私憤しひんを漏

さむなど、安りに物騒な舉動を致す者は、一命を疎末に致すと申すもの、一いきまきで首はないぞ——警鐘留めい、島中を騒がすてあらうに——でも方々、そもく、此は何事てゐる——あ、汝はイヤゴ、正直者、いたう心配氣に見受るが、此騒動は誰が始めた、包まず語つて聞かせよ、拙者が命令ぢやぞや

イア 某は一向に存じませぬ、二人共遂今の今迄と睦まじく、新夫婦が今も床入といふ風て入らせられましたに、いかなる星の祟てか、俄に變る空模様、刃物が飛出す斬つ、撃つ、の腥さ騒ぎ、譯もない喧嘩の初めといふは、どういふ次第か申されませぬ、こんな事を見る爲めに、某をば此處迄運び参りたる、二本の脛が恨めしい、事を名譽ある戦場で失ひましたらばと存ずる位

オセ ミカエル殿、事の起源は何とてあるぞ、我身の程を忘られたか

カヲ 何卒御容赦下さりませ、某は申上る詞もムりませぬ

オセ モンタノ殿、貴殿は日來禮節を旨とし給ふ御習性、まだ御若年の砌には、沈着温雅の譽高く、御名は既に心ある人々の口々に稱へられしに、今其二なき名譽を傷け、喧嘩買の汚名を取らせ給ふは如何なる次第、御返辭が承りたい

モン 賢明なるオセロ殿、某は重傷を負ひましてゐる、萬更御答の出来ぬでもムらぬが、只今はどうも痛ましくて申上兼ますれば、イヤゴ殿より御聞取下されい、乍去、自愛といふ事が時として悪事であり、又狼藉者に對する正當防衛が、犯罪であるならば、いざ知らず、さらば今夜、某が一言一行の端にだに、過失ありしとは存じませぬ。

オセ 情激し感昂ぶり、理非の分別も何處へやら、憤怒の導くに任ずる此身、これ此軀が揺ぎ出て此拳が飛んだら最期、何奴此奴の容赦はないぞ、早や、事の次第を白状致せ、事を始めた其者は、設令拙者が存の同胞なればとて庇は致さぬ、戰場ならむず土地の習ひ、まだ人民は戦々競々、そを安んぜむが爲め、まつた市中に事なからしめん其爲めに、わざ／＼設けし警固の場の此夜深に、言語同断の所業、思ふも口惜し——イアゴ、事の起源は何にてあるぞ

モン 私情の爲めに擲まれてか、職責の上から憚つてか、若し少々でも事實を曲げたら、イアゴ、殿、貴殿の武士は廢らうぞ

イア 其様に責めなされるな、カッシオ殿の御不利益を此舌で喋らうより、事を引抜いて切て捨てたうります、乍去、有様を其儘申すのは、決

して人様悪しかれと思ふ譯ではムりませぬ故、知り居る丈を申しませう、箇様でムる御聞下され、モンタノ殿と某と談話を致し居る所へ、助けて呉れと叫びながら、一人の男が逃げて参りし其後より、カッシオ殿が抜刀をかざし、追駈て参られました、其時これなるモンタノ殿、其中へ割て入り、暫く／＼と御控へなされる、某は亦其男の恐ろしい叫聲が、市中を騒がしは致すまいかと、後から追駈て参りましたが、素早い奴でとう／＼逃げられ、たゆたふ所へ太刀打つ物音、遂に聞いた事もない、カッシオ殿の、斬るぞ殺すぞとのけたまわしい叫び聲に、急ぎ取て還して来て見ますれば、斬つ撃つ、の眞最中、閣下御手づから御引分なされた時も、其通りでムりました、某が存じ居るはたゞ是丈、乍去人間は人間だけ、いかな賢者でも過失といふはムります、憤然とした時

には幸あれと思ふ親友をも、思はず打つ事はある習ひ、カッシオ殿が彼の男を追駈られましたは、必ず忍ぶに忍ばれぬ程の罵詈譏を御受けなされたからてムリませう

オセ あいや、イアゴ、それは其方が正直な心と、カッシオを疵ふの心から、事を小さくして、罪を軽くせうと思ふのであらう——コレ、カッシオ、拙者が足下を愛する心は變らねど、今から役目を取上たぞ、左様心得めされい

アスマモナ侍女を連れ登場

見られい、女共さへ此騒ぎに起きて参つた、是も畢竟餘の者への見せしめぞや

アス 何事でムります

オセ いや最早何事も無い、早やう寢所へ戻るが宜い——モンタノ殿御負傷は某が自身療治を致して進ぜます、それ者共御手を引て

と侍者モンタノを扶けて退場

イアゴ、其方は市中に心を配り、此騒動で驚かされた人心を鎮めて置け——さらばデステモナ、武夫の習ひ、太刀打つ音で熟眠を破らるゝは常の事ぢやわ

とカッシオ、イアゴの外一同退場

イア 副官殿、御怪我をなされたか

カッ 最早如何なる療治も叶はぬ程

イヤ これはしたり、飛んだ事を

カッ 怪我といふは名譽、名譽、名譽ぢや、某は名譽を失ひはてた、いや某が

一身は不朽の部分が失なつて、残るは五尺の形骸ばかり、イアゴー實に名譽は惜しいよな

イア いや某は何處ぞ御身軀にお怪我をなされたやうに思ひましたが、名譽と違ひお身軀は大切、何の名譽と申すは取留もない實もないもの、自分の心でさへ左様のものは失さぬとして置けば、決して失しは致しませぬ、ハテ大將のお機嫌を取直す方は幾らもムる、大將とても實御憎しみからでなく、全くの政略から、只だ一時の御懲罰、罪なき犬を打据えて、暴れ獅子を誡むるやうなものでムりませう、御詫をなされませ、御許容は目の前ぢや

カッ いや彼の様に結構な大將を、此様な不確實な酒癖の悪い粗忽しい副官で瞞着さうよりは、寧ろ御排斥あるやうに御頼ひ申さう、飲んだ

くれて、取留もない口をさし、喧嘩口論、罵詈譏、己が影法師を捉へての大悶着——おゝ眼に見えぬ酒の精に、定まった名がないならば、悪魔といふ名を命けて與りたい

イア して副官が抜刀で追駈なされた彼の男は、何者でムりました、何事を致しました

カッ 某は少しも存せぬ

イア 左様な事がムりませうや

カッ 様々の事を肥臆居れど、皆な夢の様で朦朧ぢや、喧嘩は致したが何故なりしやは少しも存せぬ、さるにても人間と申すは、我身の仇(酒を)を口に啣んで、性根を奪はせるやうな事を致すとは、又は喜び娛み、亂舞歡呼の其中に、何時か畜生同様に成下るとは、さて、神も恨めし

イア 乍去只今は全く御酒も醒めた御様子、餘りお早いやうてムりますな

カッ 憤怒の悪魔が来ると其儘、醉狂の悪魔は大満足て何處へやら、さるにても一非去て一非来る、此身にほどく愛想が盡き申した

イア それは餘りお堅過ぎると申すもの、時も時場所も場所此國の事情柄箇様な事の無かりし方、望ましいは山々ながら、悔むも既に後の祭、此上はたゞ御一身の利益となるやう、精々御盡力なさるが宜い

カッ 宜しい然らば復職の儀を嘆願致すとして、さて大將の御詞に、貴様は大の飲酒家ぢや——某に九頭龍程澤山な口があらうと何と其返辭が云はれうや、あゝ今の今迄人並の心ある男と思へば、忽ち阿呆、忽

ち又獸ぢや、世に盡程淺ましいものがあらうや、皆な魔の水が盛つてある

イア コレサく、よくさへ飲めば善い酒は善いものでムる、酒の御批難はそれで澤山、さて副官には、某が貴殿に對する好意の程を御信用下されますか

カッ それは既に證據さへ見えた事實、某は泥醉致して居つたに——
イア それは貴殿に限らず生きて居る人間なら、誰しも時には泥醉れることもムります、某が一計をお授け申さうなら、大將殿の其又大將は、デスデモナ殿てムりませう、何故と申せば、今の大將の有様は、彼の夫人の才識やら、美貌やらに、凡て御心をお注ぎなされて、浮の空で居られます故——事情をとくと夫人にお打明なされて、よい様にお頼み

なされずりや、屹度御復職の叶ふやうに御盡力下さらう、寛大で親切で、誠に好い氣性の婦人、人の願を十二分に叶へて遣らねば、義理が立たぬと思ふ程で居らるゝに、その良人と貴殿との中の、切れた藕を繼合せてとの事でムれば、御頼みが叶ふばかりか、雨降つて地固まり、以前にまさる御仲とならせらるゝは御請合申しまする

カッ いかにも御忠告尤ぢや

イア 是はたゞ某が貴殿に對する尊敬と忠信との熱誠から、お勧め申すのでムります

カッ イヤ心から忝ない、さて然らば明日は早朝デスデモナ殿に對面致し、とくと頼み聞ゆると致さう、それも叶はなんたら、某は最早破れかぶれぢや

イア それでこそ、さらば御寝みなされませ、某は是から警固てムる

カッ 左らば、イアコゝ殿

とカツシオ退場

イア (語)さて乃公が悪黨を働くとは、何處の何奴の目に見える、今の忠告は、心から出た正直の考、誰の胸にも誠らしく、そして眞實ムールの機嫌を取直す一法ぢや、萬物を造成する地水火風程情深いは、デスデモナ、其女に心からの嘆願をして、叶へて貰うは造作もない事、彼女の身になれば、オセロを動かすは自由自在、宗旨替ても法衣替ても勝手氣儘、兎に角オセロが精神は、女房の愛で金縛り、何事も女房の心のまゝにぐなりしやなり、デスデモナの思ふ所欲する所は、即ち彼に取ての神意神諭、然らばカツシオ奴に、デスデモナを頼めと勧めた乃公は、ど

れ何處が悪黨だ、へん是が即ち悪魔の極意、大悪業を人間界に播かむ
ず初めは、神様めかした、有難がらせが先づ肝腎、乃公が仕事は丁度そ
れ、彼の馬鹿正直奴がデスデモナに泣き付いて、其デスデモナが一心
に、ムールへ辯解の其最中に、ムールが耳朶へ毒薬の一滴、デスデモナ
がカッショを留めむとは、己が肉慾の渴を癒さむ爲めと匂はせて、辯
解の數が重なる程、嫌疑も重なるやうに加減する、即ちデスデの貞操
を不貞に使つて、その善行で畏れを作り、彼奴等を一時に陥れるとは、何
と何と甘いものか

ロアリゴ一登場

ヤア是はロドリゴ一

ロア 遠くから吠える計りて、狩場の獲物は、我手に懸くこともならぬ

哀れの此身、金は大抵遣つて了う、今日も今日とて、えら酷い棒に當て
られたが、結局犬骨で苦い經驗を嘗めた計り、一文なしの元の壘阿彌
で、又ぞろエニスへ歸國が結着てあらう

イア さて、辛抱の足らぬ者程、情ない者はない、一夜で癒る傷が何處
にある、魔術でもない人間の知慧でする仕事が、さう急々に仕上がる
もので、先づ是迄は巧く往つたと申すもの、足下がカッショに打たれた
爲め、少々傷を受けられたが、見事カッショは放逐の身となつた、兎も角
も段々思ふ壺へ入って行く故、先づ、満足するがよい、イヤ最早夜も
白白、面白かったり忙しかったり、それで時がいかう短かい、先づ、宿所
へ引取るが宜しからう、様子は段々、後から御報知申す、はて御歸りや
れと申すに

と是にてロアッコー退場

さて乃公の爲すべき仕事は二通り——先づ女房に命令いひつけて、デスデモ
ナにカツシオの頼みを聴いてやるやうにと勸めさせ、其中拙者は、あ
のムールを遠くの方へ引張出し、丁度カツシオがデスデモナの前へ
出て、叩頭たたか依頼して居る處へ、連れて戻つて其光景あやうを見せてやる、あゝ
さうぢや、善は急げ此上は少しも早う

と退場

第三幕

第一場——サイブラス 城砦前

カツシオ及び樂人共登場

カツ コレ——太夫達一曲頼む、謝禮しやうらいはしっかり致さう程に、何ぞ短い曲うたを、
そして、お早うムる大將殿と定文句を附けて呉りやれ

と樂人樂を奏する

(新婚の翌朝音楽を奏して新夫婦の眠を驚かす音あり、オセロ夫
妻は事實昨夜が新婚なればカツシオ樂人に向ひ右の白ありしと
知るべし)

城内に召使はる、道化(我邦の茶坊主)登場

道化 コレ——太夫達、其樂器たがもはチーブルス仕込か、音色がいかう鼻にか

かる(花柳病は初め子ノブルスに發生し子ノブルス)

甲樂人 何を仰有りますや

道 それはさうと太夫達、サア謝禮を進ぜます、そして大將殿は御前方のその音楽がお氣に入つて入りぬいて、最早何卒止めにして欲しいとの御意ぢや〜

樂甲 左様ならば止ませせう

道 尤も耳に聞えぬ樂器があるなら、もっと聞きたいと仰せらるゝ乍去人の噂に大將殿は、元來音楽は餘りお好きなさらぬと申すことぢや
樂 我々共も左様な樂器は持合せませぬ

道 そんならその笛共を早く袋へ納めるがよい、早々往んで貰ひませう、おさらばさらば、西の海へサラリ

と樂人共退場

カツ もし〜是は輕少ながら納めて呉りやれ(主と金貨を茶坊)アノ大將の夫人にお附の婦人(妻イアゴリア)が、最早お眼覺なら、カツシオと申す者が、一寸面晤を得たいとお話し申して呉りやれ、どうぢや承知か
道 彼の御婦人ならお目覺てムります、若し此方の方へ御出になつたら、そのやうにお話し申す都合に致しませう
カイ 何卒さうして呉りやれ

と道化退場

イアゴリア登場

これは宜い處へイアゴリア殿
イア さてはとう〜お寝みなさらぬな

カツ いかにもとう／＼、足下と別れた時最早既に夜明てムつた時にイ
アゴ殿、ちと憚てムるが、只今御内君に面會を求めた處、と申すは内
君に御依頼して、デスデモナ殿へ近づく便を得たい爲め

イア 然らば早速妻を御目に懸らせませう、そして何か方を設けて、ム
ル殿を引張出し、その御不在中に御遠慮なくお話をなさるやうに計
らひませう

カツ それは重々忝ない(トイアゴ)イヤ拙者が同郷の者などには、彼様に
親切な正直者は一人もない

エミリア登場

エミ これは／＼副官様、大將の御不興、御氣の毒でなりませぬ、乍去今に
御歸參は叶ひませう、大將と夫人と御噂なされてムりますが、夫人

には貴郎の御肩をいかう御持ちなされませぬ、大將の御返辭には、貴郎
が御打ちなされた彼の仁(トモ)こそ、サイブラスで評判な、そして縁故
の深いお人なり、大事を取つて考へれば貴郎の御不興は免れぬ所、去
りながら大將も御寵愛の貴郎故、他人からの頼みはなくとも、安全な
機會を見次第、のがさず貴郎の御歸參をお計らひなさる思召との事
てムります

カツ それはさうでもあらうけれど、叶ふ事なら、デスデモナ殿に内密の
御面晤を、暫しなりとも得らるるやうに、何卒御取持ちを願ひたい

エミ そんなら此方へ御出なされませ、奥底なく御心を御打明なされる
所へ、御案内申しませう

カツ それは千萬忝ない

と二人退場

第二場 城中の一室

オセロ、イアゴ、及び紳士若干登場

オセロ イアゴ、此書面を船頭に手渡し致せ、さらば船頭より元老院へ傳達致すであらう、それが済んだら、拙者は城砦を散歩致して居る程に、後から參るがよい

イアゴ 畏まりました、左様致すてムりませう

オセロ 然らば方々城砦を一巡致しませうか

紳士 御案内申上るてムりませう

と一同退場

第三場 城門前

アスアモナ、カツシオ及びエミリア登場

アス 御安心なされませ、カツシオ様、及ばずながら精々骨を折りませう

エミリア 何卒さうしてお進げなされませ、イアゴなどは、自分の事でもあるやうに、萎れ返つて居ります

アス お、ほんに彼は實直な男ぢやな、カツシオ様、御心配なされませ、すな、良人と貴郎との其仲は、此妾が屹度故に還してお目に懸けます
カツ 忝なうムります、夫人、ミカエル、カツシオはどうならうと、其御親切は決して忘れは致しませぬ

アス 其御志は忝ない、豫て大將とお仲の善い、又永年の御知己なる貴郎

の事、政略の上からは兎も角、さもなくば貴郎を決して疎略には致させませぬ

カッ 去りながら夫人、その政略といふも長く続くか、はかない事情にま
つわらるゝか、時と場合で政略の源が増すやも知れず、其間中某が役
目は他人の者となり居らば、大將には某が身の上などはお忘れはな
さるまいかと、それが案じられてなりませぬ

アス 其様な御心配は御無用になされませ、エミリアは證人、貴郎の御役
目は此妾が請合ひました、一旦かうと御引受申す上は、貫かすには止
めぬ此身、良人には息もつがせず、夜の目も合はさせず、堪へ切れぬ程
責め立て、睡眠の間も食事の間も、お嘆願の舌を休めず、何を爲さる
お暇にも、カッシオ様の御詫を云立てませう、それ故らと榮々しうな

されませ、貴郎の御依頼を、其まゝ反故に致さうより、死んだがましと
思ふ此身

オセロ、イアゴー 彼方の隔りたる處へ登場

エミ 夫人、大將が御歸り遊ばしました

カッ 然らば夫人、某は御暇に致しまする

アス ハテ此處に御在なされて、様子を御覽なさりませ

カッ どうも只今は、何とやら氣が落つかず、心も進みませねば

アス それならよいやうになされませ

とカッ退場

イア おゝ好かぬ

オセ 何と申す

イア 何でもムリませぬ、アノたゞ——イヤ何と申して宜しいやら
オセ 只今愚妻と別れて往ったはカッシオてはないか

イア 何と仰せられます、カッシオては——いや／＼カッシオてはムリ
ますまい、閣下の御出を見ると其まゝ、罪ある者でもあるやうに忍び
去つたはたしかに癖者

オセ いやカッシオに相違ない

アス もうし我君、アノ妾は只今或者の嘆願を聞いて居りましたが、其者
は貴郎の御不興受け、萎れ返して居りまする

オセ それは誰の事ぢや

アス 誰あらう副官のカッシオ、不束な妾の申し事でも、御聽取下さるな
ら、何卒同人の詫を御ゆるしなされて下さりませ、彼のカッシオこそ

正眞の主思ひ、過失とても知つての上の事ではなし、皆々知らずに致し
たこと、若し妾の申す事が違ひましたら、此身は人の顔を見て、善惡の
判断もつかぬ、愚な者でムリませう、どうぞ御呼返し下さりまし

オセ 今出て往ったは彼であつたか

アス 左様でムります、沈み返つた其様子、後まで眼先にちらついて、此身迄
悲しいやうな、どうぞ御呼返し下さりませ

オセ イヤ今はならぬ、何れ其中

アス 御近い中でムりますか

オセ 汝にめんじて可成早う

アス 今夜晩餐の折では

オセ いや今夜と申す譯には

デス そんなら明日晝餐の折に

オセ 明日の晝餐は外とよて認まひる筈、城内にて士官共と會食の約ある故

デス そんならどうぞ明日の晩よるもなくば火曜の朝か、晝か、晩か、又は水曜の朝なりと何時いつと仰有て下さりまし、たゞ此三日の中にどうぞお赦しなされませ、眞實後悔致した様子、それに其落度おちどと申すも普通の考では——陣中にてはいかな良將も掟おきてに照して、一軍の懲戒おこしに致すとやら、それは兎も角——破門絶交と申す程の落度とも思はれませぬ、ほんに何時御呼戻し遊ばします、御申聞け下さりまし、妾わがならば、貴郎の仰せらるゝ程の事、何を御否み申ませう、躊躇ためらふ程の事さへ致さぬ覺悟でムりますには、はてミカエル、カツシオと申せば、そもやそも貴郎が御出来いでの御供を致して、度々館やうざんへも參られ、其時妾が、貴郎の御

噂を申上ぐれば、何や彼やと種々の辯護いひわけをなされた人、その復職を願ふのに、これ程骨を折らうとは——不束ながら此身なら——

オセ もう止せ、何時でも勝手な時に還すがよい、汝のいふ事を何拒まう

デス これは品物を御ねだれ申すのとは違ひます、どうぞ御手套てぶくろを御召し下され、滋養物いじやうぶつを御食くがり下され、冷ひやえぬ様に、暖ぬかかい御衣服おんいふくをお召し下され、さては何でも御身躰おんみんたいの御利益おんりやくになる様に、遊ばして下されと申上ると同じ事——ハテ貴郎の御愛情おんあいきを試たして見やうなど、思ふなら、それこそ此様な事ではなく、何ぞ容易ならぬ一大事で、滅多に御閉濟おんへいせいはならぬ様な事を願ひませうに

オセ 汝の申す事に否やは申さぬ拙者、それ故何卒拙者が依頼たのをも聴い

て、暫時彼方へ往つて呉りやれ

アス 御依頼とあらば、何しに否と申しませう、左様ならば且那樣

オセ さらばデスデモナ、後から直に參るぞ

アス サア、エミリア、其方の思ふやうにどうともしや、其方のいふなりに任せる此身

とアスデモナ及びエミリア退場

オセ え、悪い程可愛い奴だとひ我が魂魄は地獄へ墮つとも、汝は可愛い懐かしい汝可愛い思ひが失せたら、此身の胸は暗闇ぢや

イア モシ閣下――

オセ 何ぢやイアゴ

イア ミカエル、カツシオには、閣下と夫人との御仲を、豫て承知てムリま

したか

オセ いかにも、事の始終を承知の筈――何故汝はそのやうな事を

イア いやなに少と心に懸ることがムリます故、それを晴らさう爲めに伺つただけで、深い意味はムリませぬ

オセ 汝の心に懸ることゝは、コレ、イアゴ

イア 某は彼の男が、夫人を御存じとは、思ひも懸けぬ事てムりました

オセ 我等二人が中に立ち、度々橋渡しをさへ致した男

イア ハテ眞實そのやうな事が

オセ 何眞實、いかにも眞實の事ぢやが、それにつき何ぞ思當る事でもあらんと申すか、何とカツシオは正直な男であらうが

イア 何正直な――閣下

オセ 何正直な——いかにも正直な

イア 閣下、某の承知致す所では、げに正直者でムリますな

オセ 汝は何を心に懸け居るぞ

イア 何を心に——閣下

オセ 「何を心に——閣下」——拙者の口眞似を致し居る、何ぞ心の中に云ふを憚る、恐ろしの大事があると見える——意味有氣な汝の素振、遂今の程、出行くカッショを見送って、「お、好かぬ」とは何が好かぬ、又妻を迎ふる始終の様子を、承知致せしと告ぐるを聞き、眞實そのやうな事が「と頓興な聲を出し、眉根に皺を寄せた様子、或る恐ろしの感念を胸に閉籠め置くと見た、汝若し拙者を思ふの心あらば、包まざるその胸中を語つて聞かせよ

イア 君を思ふ某が誠忠は、閣下も御承知

オセ いかにもその誠忠はあるであらう、そして拙者の存ずる所では、萬に情深く忠實で、熟と考へた上ならては、一言一句も吐かぬ汝、それ故汝が此様に詞を中斷するは不審でならぬ、虚偽の多い者には、かゝる思はせぶりもある習ひながら、正直者が箇様な事を致すには、何ぞ心の奥から溢れ出て、せき留兼て途口の端に表れたものであらう

イア ミカエル、カッシオ儀に就きましては、誓てたゞ正直一遍の男とのみ、某は思つて居ります

オセ 拙者とても其通り

イア 人は見懸通りに致したいもの、若し不正直な者がムりましたら、正直らしい面付は致させたくもムりませぬ

オセ 實に、人は見懸通りに致したい

イア ハテ然らばカッショは、正直者でムリませう

オセ イヤどうもこれには深い意味があらう、何卒ぢや、汝の考を有の儘

に語つて聞かせい、そして無遠慮な推察を無遠慮な詞で云うて見や

イア 閣下それは御免下されませ、義務ならば如何なる義務をも辭退は

致さねど、奴隷でさへも許さるゝ思想の自由を抛つて、心の中を白状せ

いと、そりや御言葉とも存じませぬ、ハテ思想と申すは汚い卑しい

ものでムリませぬ、どんな結構な宮殿でも、時には穢いものも立入る習

ひ、如何な生無垢な胸の中でも、さもしい考が隅の方に、立派な考と袖

を連ねて、ちんと濟まして居るもので御座ります

オセ コレ、イアゴー汝は親友たる拙者をば、態々苦むると申すものぢや、

拙者が汝の詞故に、此通り煩悶致すを見て、心に秘めたる一伍一什を、
語つて聞かさぬとは聞えぬぞや

イア 何卒それは——イヤ某の推察は大方間違つて居りませう、取留もな
い事に要らざる詮索を致すが某の癖、それに嫉妬といふものが、有り
もせぬ罪科を勝手に作ることもムリませぬば——箇様に當てにな
らぬ想像を致す某如き者の、ふと云棄てたはかない詞などは、何卒御
氣に懸けられず、我から御懸念をお作りなさるやうな事は遊ばしま
すな、某が心中の疑惑を御話し申すは、閣下御安心の種にもあらねば、
何の御役にも立つ事ではムリませぬ、又某とても正直な知慮ある一
男見として、左様な御話は致したうもムリませぬ

オセ ハテ、解し兼ねる汝が詞

イア 令名と申すは男女を問はず、生命から二番目の寶物でムります、財布の金は盗まれても、それは惜むにも足らぬ物、どうして我有たりとも人の有にもなればなり、幾千人の有でもあった物、乍去一度令名を盗まれたら、生涯取還す見込はない、ちやと申して盗みし者を富ますものでもムりませぬ

オセ 愈よ汝が心中の秘密を、發見ぬ中は、承知がならぬ

イア イヤ某が心を抜き取て、閣下の御掌の上に捧ぐればとて、どうして秘密が御眼に留まらう、まして某が胸の中にある上は、逆もくくてもムります

オセ 何と

イア お、閣下、御嫉妬を御用心なされませ、嫉妬と申すは眼玉の青い怪

物で、取て食ふ犠牲を、先づ斃弄すものでムります、不貞の妻に泥を塗られたと承知しても、其妻を愛せぬ男は、まだ仕合せてムりますが、可愛い女房に嫌疑を懸け、其貞節を怪みながらも、尙ほ可愛うてならぬ男は、お、何たる因果な月日を送ることてムりませう

オセ お、その因果さは

イア 貧なれども足ることを知るものは、畢竟富者に異ならず、富めども安んずるなき者には、無限の富も何にかはせむ、昊天願くば我等人間の心中より、嫉妬の炎を消させ給へ

オセ 何故そのやうな事を申すぞ、月の表面の變る様に、日々新たなる嫌疑を起して、嫉妬の生涯を送る拙者と思ふか、否、一度疑惑を起す上は、虚實は一擧にして決せんのみ、汝の推測する様な、取留もない愚かし

い臆説に、心を傾くる様な事があつたら、此身は獸類に墜されう、拙者が妻は美しうて、能く飲み能く食ひ、客を好み、談話を好み、能く弾き能く唄ひ、能く躍るなど、聞いたとて、それて嫉妬は起すまい、節操さへあるならば、是も結句女の装飾、又は連れ添ふ此身が醜いとて、妻に疑心などは少とも懸けぬ、ハテ眼あつて拙者を撰みしならずや、否々イヤゴ、拙者は目に觸れぬ事は疑はぬ、疑ひし上は實否を糺さにや措かぬ、糺した上は愛を棄るか嫌疑を棄るか、二者其一を撰ぶぢやまで

イア
それ承つて某も大に安堵、今は奥底なく某が誠忠を、閣下に捧るを得るといふもの、さらばいざ誠忠より出づる某が苦言を御聞下され、證據と申してはまだムりませぬ、夫人に御注意遊ばしませ、カシッオとの御仲に御目を留められませ、乍去嫉妬がましい御様子、又はわざ



ACT III Sc. 3

アイ 夫人に御注意遊ばしませ、カシッオとの御仲に御目を留められませ、乍去嫉妬がましい御様子、又はわざ

とらしい無頓着もようはムリませぬ、某は閣下の寛大な御性質に附
込んで、不義を働く者あるが憎うて堪へられませぬ、御用心なされま
せ、我國人の性質は某よく承知致しますが、エニス婦人は夫に知らさ
れぬ淫行を致すが常とは天知る地知る、左様な舉動は慎まうとは思
ひもせず、いかにもして秘し隠さうが、彼等が道念の頂上でムリませ
ぬ、ハテそれ程迄とは

イア 夫人とても生みの父御を欺いて、閣下に御奔りなされました、閣下
の御顔貌を恐るゝ様に見せ懸けながら、其實慕うて御在なされまし
た

オセ 實に其通り
イア 其通りてムリますもの——彼のやうに御若いに、父御の眼をさへ

眩まして、魔術とまで思はせる様な御手際——イヤ申譯もムりませぬ、是も畢竟閣下を思ふ真心が過ての上と、何卒御容赦下さりませ

オセ 汝の志は一生忘れぬ

イア どうやら少々、御心を悪騒がせ申しましたやうてムりますな

オセ いや少しもく

イア どうも悪騒がせ申したやうて——只今申上し事は全く某の誠から出たる事と覺召し下されませ、イヤどうもたゞとも思はれぬ御様子——情願でムります、某の申條は、たゞ全くの嫌疑に過ぎませねば、それを御心で推し擴げて、たしかな事實ぢやなど、御推測下されませぬ

オセ 左様な事は致さぬ

イア 左様な事をなされたなら、御爲を思つて申し、詞が、思ひも寄らぬ結果となります。カツシオは某が良友でもあり——閣下、どうも御激動なされた御様子

オセ いや左程激動も致さぬが、あのデスデモナに不貞な行爲があらうとは、どうも拙者には合點が参らぬ

イア いつくまでも、どうぞ夫人はその通りで、閣下の御考も、其通りであらむ事を、祈る計りてムります

オセ とは云ひながら、如何なれば自然の人情に背き——

イア 實にく其處でムります——憚らず申上げますれば——國を同

じらし、肌膚を同じうし、階級を同じうする所に靡き従ふは、人情の自然でムりますに、それ等に御目も呉れぬとは——あゝかゝる行爲の

裡には油断のならぬ下心、さもししい心根、不相應な悪企などの潜めるもの、乍去御容赦下され、是は夫人の御一身をのみ申すのではムリませぬ、たゞ某の恐るゝ所は、何時か又自然の人情に御立戻りなされて、乍恐閣下の御身を自國の殿原と御比べなされ、動もすれば御後悔遊ばすやうな事がありませぬかとの一條でムリます

オセ 此上とも認めた事があたら、報告して呉りやれ、そして汝が女房を隠目附に致して置け、今日はこれで別れると致さう、おさらば

イア (行ながらい) 然らば閣下も暇を致しまする

オセ 口悔しい此結婚——一定彼の正直者奴今申した事などより、もっともと見知れる事があるであらう

イア (又戻り) 閣下、何卒此事は此上御糺明遊ばされぬやうに、偏に願上ま

する、暫く打棄置いて様子を御覽なされませ、カツシオ復職の儀は誠に結構、あのやうによく副官の役目を勤むる者はムリますまい、乍去尙ほ暫らくが間、彼を御遠ざけ置遊ばさるれば、如何なる舉動を致すか様子は尤も能く判る事でムリませう、夫人には如何程まで御執心に、彼が復職を御迫りなさるか、それ等を御覽あつても御合點の参らるゝ事がムリませう、たゞ差當りては某が要らざる心配故に、圖らず御節介を申上げ、御騒がせ申せし段、悪しからず思召下されませ、そして御情願でムリます、何卒夫人は御寛大に——

オセ 心配致すな、短慮な舉動は致さぬ拙者

イア 然らば又御暇に致しまする

とイヤ退場

オセ 思へば彼奴は類希なる正直者、そして人間行動の大綱に精通致し居る——さはれ手飼の鷹に手を噛まれたなら、脚につけたる革紐は、よし飼主が玉の緒なりども、風のまに／＼、行衛も知らず放ち遣り、運命の餌食をあさらせむ、此身は黒人、大宮人の雅びたる聲作は思ひも寄らず、さては年齢さへさだ過ぎしを厭うてか——もとより老朽らしといふにもあらねど——妻は此身を見棄てし様子面に泥を塗られし此身、此上は妻憎しと思ふ念を起し得ば、それぞ唯一の慰藉なるべけれ、おゝ厭ふべきは結婚、彼の美し者を我者と呼びながらも、其情慾の放縱を制へることの出来ぬとは——愛する女の情の片隅を我有にして、他人のなぐさみに供へうより、寧ろ岩窟の中の陰湿い空気を吸ふ、蟾蜍と果てるが幸福、下賤の者にてあらば、心ゆく舉動も致

さるれど、身分ある身の悲しさは、左程の事も致されず、思へばこれも違れぬ宿命、生あれば死あるが如く、母の胎内に宿りし時より、身に定まれる因果であらう、や、彼女が参りし様子

アス アモナ、エミリア登場

彼の顔で醜い行爲のあらうとは、造化の神の悪戯か、否々拙者はどうあつても、左様の事は信ぜぬ覺悟

アス 如何遊ばしました我が君、晝餐の準備も出来、それに御招待なされました此島の歴々方、貴方の御來席を御待申して居りますに

オセ おゝ、これは拙者が疎漏であつた

アス どうやら御聲の頼ひまするは——御氣色の勝れぬのでは——
オセ 前額に痛みを覺ゆる故

アス それも御道理、夜前は碌々、御眠りもなさりませぬ、直ぐにお癒り遊ばしませう、ちやっとこれにて御鉢巻を——今の間に御快くおなりなされます

オセ イヤ、其手巾では小さ過ぎる、打棄て置きやれ(とアス、オセに鉢巻をさ
せむとしたる手巾を取
落し心付かず)、どれ、一緒に参らう

とオセ、アス退場

エミ 嬉しやこれ爰に、御手巾が落ちて居た、これはムール殿から、夫人へ初めての贈品、あの放縦な良人が、是を密と盗んでと、五月蠅程の御ねだれなれど、ムール殿から肌身離さず持て居やとの御詞故、夫人にはそれは、接吻したり物云懸たり、大切に持て御在の品、お、妻は先づ此刺繡の文様を取って、そしてイアゴー殿に渡して進げやう、これ

て、何をするにやら、それは少しも知らぬけれど、喜ぶ顔を見るも一
興

イアゴー登場

イア コレ、獨りて何を致して居やる

エミ そのやうにがみ、いはぬもの、貴郎に進げるものがあるわいな

イア 乃公に呉れるものが——乃公に計りぢやない、誰にても——

エミ 何と

イア いや、誰でも、頓間な女房を持つは詰らぬものぢや

エミ お、それだけで——そんならあの手巾の御禮には、貴郎は何を下
さりませ

イア 手巾とは何の手巾

エミ 何の手巾、ハテ、ムール殿から、デスデモナ様へ初めての御贈物、アノ貴郎が密と奪てと度々話のあった品

イア そんなら首尾克く盗み取ったか

エミ 何のいな、夫人が遂鳥渡お落しなされたを、幸と妾がこゝに居合せ、圖らず拾ひ取ったのぢやわいな、これ之を見なされや

イア 好い娘ぢや、此處へ遣せ

エミ 盗て呉れいとあのやうに、いかう執心なされたが、これで何を爲さるのぢやえ

イア (奪取り) それ聞いて何にする

エミ さしたる入用もないならば、此方へ戻して下さりませ、おかわいさうに夫人は、お失しなされたとお氣がついたら、狂氣の様におなりな

さらう

イア 拾うたなど、云うてはないぞ、乃公にはちと用途がある程に——
もう用はない彼方へ往きやれ

とエミリア退場

うまい——此手巾を、カツシオが宿へ落して置いて、さて彼奴に拾はせう、どのやうに詰らぬ物でも、嫉妬の目にはお經の文句程確かな證據に見ゆるもの、これも何ぞの役に立たう、先刻吹込んだ乃公の毒で、ムールは既に色を變へた、嫉妬といふも元來毒藥最初は苦い物でもないが、一度血潮に交つたなら、硫黄の坑と焼えひろがるは目前——
證據は眼前、彼方から來るアレ彼の姿を見れば判明る

オセロ登場

あなあはれ、世界中の魔睡薬も、今日は昨日の安眠を、最早與ふることではない

オセ (語) さて、此拙者に泥を塗るとは

イア 申し大將閣下、最早其事は御心に懸けられますな

オセ ヤイ、退れ、拙者を此苦境に墜した奴、知らずもあらば如何な耻辱を受くるとも、生中知るには優るべきに

イア 如何なされました閣下

オセ 彼女奴が不義の快樂を貪るなど、は思ひもつかず、眼にも見ず、夢にも見ねば、不快を覺ゆることもなく、其事ありし後とても、嬉しく樂しき俱寢の床、カッシオが接吻の痕を、彼女が唇に認めもせなんだ、盗まれしとて何一つ失せる物でもなき上は、盗まれたと知らずもあら

ば、結句盜難の苦は知るまい

イア 左様な御詞を承る此身の苦しさ

オセ 我が全軍の將卒擧て、名もなき雜兵の末迄が、彼女が身軀を嘗め廻はさうと、知らずに居たらば、此苦みはよもあるまい、心の平和も今は是迄、満足も安心も既やあさらば、兜の星を閃かす千軍萬馬、功名の争ひを善事と勵む、野戰攻城も昨日の夢、馬の嘶き喇叭の響き、心も勇む太鼓の音、耳を貫く笛の聲、錦の御旗や何やかや、威武堂々の軍裝束、さては雷神の雄叫びを、其身に摸す大砲、小砲、それもこれもこれが訣別、オセロの役目も既や是迄

イア それ程迄に、閣下

オセ ヤイ、汝は、我愛しの者を淫婦と呼びしな、然らば眼に見ゆる證

據を見せよ、それが成らずば、犬猫と生れても、拙者が怒りに逢はなん
だらと、後に口悔しく思ふてあらう

イア これ程までにおなり遊ばしましたか

オセ いざ／＼證據を見するか、さなくば委細を語りて、一點の疑を容れ
ざる迄に證明を立てよ、それも成らずば命はないぞ

イア 申し閣下――

オセ 汝若し故なきに彼女を誹り、妄りに拙者を苦むるならば、それぞ此
上もなき大悪業、今より汝神に背き、道を棄て、悪を積み、天も泣き地も
顔なく程の非道を爲すとも、之に増す神罰はよも受けまい

イア おゝ救はせ給へ、天も御加護あらせ給へ――閣下、それでも大丈夫
の御身てゐるか、それでも精神といふもの、思慮といふものを有たせ

給ふか、神明の御加護を御願ひなされませい、某が好意を御容れなさ
れませい――おゝ、さるにても此身の愚かさ、正直故に罪を得るとは、
さて／＼世の中は奇怪千萬、おゝ、浮世の人々、御用心あれ、露骨に正直
なは安全の道ではない――難有うムります、かう悟りましたも閣下
故、以後は又と人の爲を圖る事は致しませまい、かやうな恨みを買ひ
まするも、畢竟餘りに人の爲を思ふ故(と行かん)

オセ いや待て、汝は矢張り正直が宜い

イア いや某は、も少し狡猾に致すが宜うムります、正直は即ち愚直、勞し
て功を收むることは出来ませぬ

オセ え、我が妻を正しと思へど、左あらぬやうにも思はれ、又汝を正し
と思へど、同じく左あらぬやうにも思はれて、こりや何ぞ證據がなく

ては、娼妓(貞節の)の面の其様に清淨無垢なりし彼女が名も今は汚れて黒々と宛ら我顔を見るやうな、えゝ其處らに繩はないか、劍はないか、毒も薬もない事か、彼奴を投込む火水はないか、若しあつたら我慢がならぬ——ちえゝ無念、證據を見て満足が致したい

イア 憤怒の餌食と御身を御任せなされましたな、それも畢竟某故と、後悔致せど詮もない——何と、證據が見たいと仰有りますか

オセ 何見たい——いや見ねば承知がならぬ

イア その御望みは叶ひませう、乍去、どうして御満足なされます、閣下、上官の閣下が指を銜へて惘然と——夫人の他人に奪らるゝ所を

オセ おゝ、死んで奈落へ墜つるとも、そのやうな事なるべきや

イア げに其様な光景を、御覽に入れるは一大難事でムリませう、當人同

士の眼の外に見るべきものではムリませぬ、果して然らば何とてムリます、ハテ何と申してよいやら、これでどうして御満足が得られませう、縦令彼の御二方がさかりの附いた獣の様であらうとも、閣下の御覽に入れることは思ひも寄らず——乍去、只だ事の真相を手間探る緒ともなるやうな事實談で御満足なされうなら、御話し申すは易い事でムリます

オセ おゝ、然らば彼女が不貞なりてふ、生きた事實を語って聞かせよ

イア 面目もない役目ながら、人様の御爲を思ふ愚直故に、こゝ迄乗りかかった舟でムれば、寧ろお話し申ませう、遂此程の事、某はカッショと供養を致しましたが、烈しき齒痛に悩まされ、終夜とう／＼夢をも結びませなんだ、世には精神にまだらがなく、睡眠の中に己が秘密を口走

る者がムリですが、カッショオも其一人と見え、いつしか讒言にいふを聞けば、コレいとしのデスデモナ、用心が専一、二人の仲を悟られぬやうに——」さて某の手をぐつと引いて握りしめ、お、可愛い奴と口を寄せ、接吻といふものが某の唇に生て居るを、根ごきにでもするやうな荒々しさ、やがて腿の上に脚をのせかけ、溜息吐いたり口を寄せたり、舉句の果が、このやうに可愛い奴を、何の因果でムールの持物

オセ 奇怪千萬

イア いや、これはたゞ彼が一夢に過ぎませぬ

オセ 即ち前以て、左様な實事もありしことを示すもの、夢に過ぎねど嫌疑の廉は至て深いわ

イア げに仰有れば、薄弱な他の證據に、力を添ふる一助とも成りまする

オセ 八裂にしても飽足らぬ女

イア いや、左様な御短慮はなりませぬ、まだ實事を認めたてはムリませねば、至て操正しく居らせらるゝやも測られませぬ、只だ一つ伺ひまするは、閣下には夫人が、草毒の刺繡のある、御手巾を御持ちなさるを、御覽なされた事はムリませぬか

オセ 其手巾こそは拙者より妻へ初めての贈物

イア その事は存じませぬが、夫人の御持ちなされたに相違のない、右様の手巾にて、今日カッショオが髯を拭うて居りまするを見届けましてムリます

イア 果してそれがそれならば

イア それであらうと、これであらうと、夫人の御所有品である上は、これ

も證據の數の中でムリませう

オセ おゝカツシオ奴の命の數が千も萬もあればよい、たつた一つを奪ただけでは此恨みは晴されぬ、今は何疑のあるべき、二人が不義は事實であらう、これ見よイアゴ、愛も戀も、今はおさらば、天に向つて棄てたぞよ、此上はおゝ、汝復讐の惡魔、地獄の窟を早や出てよ、戀童子は汝が冠と胸奥の玉座とを、暴逆無道の、嫌惡に讓れ、毒蛇の舌を包めや我胸

イア 先づ御心をお鎮めなされ

オセ チエ、復讐の血を見るまでは

イア 御心を御鎮めなされませ、時經つ中には又御考も變りませう

オセ 決して變りは致さぬ、傳へ聞く彼の黒海の冷き潮は、留度もなく進みくゞて、プロボンチス、ヘレスポントへ注ぎ入り、未だ嘗て一度

も逆流したることなしとか、我復讐の念も其通り、急潮後を顧るの暇もなく、流れくゞて殺戮の血の大海に、合さる迄は退潮もせじ、愛の磯邊へ寄せはせじ、昊天もみそなはせ、諸天諸神を證人にして、某は茲に復讐の事を誓ひます

と腕きて誓を立つる

イア イヤ暫くく其儘に、某も御一緒に誓ひまする——天に在す日月星辰、我等を包む地水火風もよく聞け、茲に我イアゴ、智の有丈、愛の有丈、腕の有丈を捧げて、オセロが復讐に犬馬の勞を致さむことを誓ひまする、何事も彼が思ひのまに、如何なる殘忍の行爲たりとも、惟命惟従ふ事を拒みませぬ

と二人同時に立上る

オセ 忝ない汝の志、遠慮なう受くると致さう、さて早速汝に依頼致す一事と申すは、今より三日が中に、汝の口より既やカッシオは、此世の者ならずとの詞が聞きたい

イア 畏りました、親友ながら彼が命は、某が貰ひ受けます、閣下の御依頼故にかくの通りに致します、乍去夫人は何卒御助け遊ばしませ
オセ おゝ彼の淫婦奴も奈落の底に墜さて置かうや——イザ彼方へ参らう、拙者はこれより、何ぞ簡便の手段を以て、彼の妖婦を亡くなさむ工夫を致さう——副官の役目は今より汝に與ふるぞよ

イア 一生御恩命は忘れませぬ

と退場

第四場——城門前

アス アモナ、エミリア、道化登場

アス 副官カッシオ殿の御宿は何處か、汝は存じて居やらぬか

道化 御宿は何處ぢや、コレ此處ぢやと御告げ申せば、此私は虚言者

アス 何をいふやら譯もない

道 はて、私は御宿を少しも存じませぬに、手製の出鱈目で、やれ此處ぢや、やれ彼處ぢやと申上げるは、眞赤な虚言家でムりませうが

アス そんなら人にも尋ね、聞糺したもれい喃

道 然らば諸人と問答を致し、其返答に依つて御宿を聞定めまするてムりませう

アス 尋ね當てたら、こゝへ参るやうにいうてたもれ、又大将殿へは、宜きやうに取做して置きし故、萬事故に復るであらうと傳言しや
道 ハ、ハ、左様な役目ならば男兒たる者に、勤まらぬ事はよもムるまいぢやに依て御説の趣、屹度致して見ますてムりませう

と道化退場

アス 喃エミリア、何處へ失した事ぢや、ら、ほんに不審はあの手巾

エミ 妾も一向に存じませぬ

アス 黄金を入れた財布ぢやとて、此様に惜しうはあるまい、大将殿の御心が高尙くて、恪氣深い世の常の男のやうな、さもしい所がなければこそ、さもなくば、屹度何とかお思ひなさらう
エミ そんならアノお恪氣は御有ちなされませぬか

アス そりや誰が、大将殿が——何のいな、大将殿のお生れ故郷は、大層熱い國ぢやに依て、其様なお恪氣などは、蒸殺されて失せたやら、跡形もないわいな

エミ それ／＼御噂をすれば、彼處へ御いてなされました

アス 今度こそカツシオ殿を、御呼還し遊ばすまでは、お側を離れることではない

オセロ登場

オセ これは我郎君、御機嫌は如何てムりませぬ

アス 何ともない無事ぢや——(旁白)お、何げなき様子を装ふ其苦しき——して其許は

アス 妾も何ともムりませぬ

オセ 一寸其許の手を（とアスの手）此の脂ぎったみづくしさを
 アス ぢやと申して、まだ年端も行かぬ身の、憂世の憂さも知らぬ手てム
 ります

オセ 是ぞ其許が多情の證、この水々しく温かい事よなう、ハテ此手は少
 々氣隨氣儘を慎んで、祈禱斷食、難行苦行を致させいで——此手の
 中にこそ、思はぬ道に其許を誘ふ、多淫の妖魔が潜むて居るぞよ、實に
 好い手ぢや情深い手てはある

アス 實にさう仰有れば其通りでもムりませう、妾の愛情を貴郎に捧げ
 たも、コレ此手てムります

オセ げに情深い手てはある、心を籠めて手に手を取りしは昔の縁組、今
 は手と手ばかりて心は空



ACT III Sc. 4

「さしづみづみたつき脂此」セオ
 ら知もさ憂の世憂の身ぬ行も端年だましてし申とやら「ステ
 「すまりムて手ぬ

アス そのやうな御話は存じませぬ、それはさうと御約束は
オセ 約束とはそりや何の
アス 只今貴郎と御話を致すやうにと、カツシオを呼びに遣しましてム
りますが
オセ 拙者は眼が痛んで涙が出る、其許の手巾を貸して呉りやれ
アス そんなら此品を
オセ それではない、拙者がいつぞや贈りし品を
アス それは茲に持合せませぬ
オセ 何ぢや持合はせぬ
アス 眞實でムります
オセ とは不覺ぢや、デスデモナ、彼の手巾は誰あらう、我亡父が、さる埃及

の婦人より乞ひ得し品、其婦人こそは人の心を讀み得し巫女、我母彼の手巾を所持せる間は、我父なる人の愛を惹き、母が情のまに／＼、父の心を和らげ得むも、一旦之を失ふか、さなくば他人に與へなば、我父の目は忽ち我母を厭はしきものに見下して、心密かに他の増花を思ふに至るべしと告げしとやら、さて我母臨終の際そを拙者に譲り、他日妻を迎へなば、妻なる女に贈れよとの御遺言、さてこそ其許に贈りしなれば、随分大切に秘藏せい、彼品を失すか、但しは又他人に與へなど致さうなら、それこそ其許が一身の破滅ぢやぞや

アス 其様な事がムりませうや

オセ 實にや其織目の中に、魔術の印が結んである、世に二百歳の切を経たる梓巫子の、龜卜の表に激され聖められたる、蠶の虫の吐きつる糸

にて繅箔し、熟練家が潰けし處、女子の心臓の才乃伊にひたして集めたるもの

アス アノそれは眞實で

オセ 紛れもない眞實の事ぢや、ぢやに依てよく／＼大切に致すがよい

アス そんなら寧ろ、初めから其様な品などは

オセ ヤイ／＼、何故汝は左様なことを

アス ハテ、マア、其様な恐ろしい御聲を遊ばして

オセ 失ったか、なくなつたか、取還しものつかぬか、コレ、どうぢや

アス 神よ御慈悲を――

オセ サア何と

アス 彼品は失しは致しませぬ、乍去若し失した其時は――

オセ 何と

スア 決して失しは致しませぬわいな

オセ 然らばこゝに持つて参つて見せるがよい

アス それは容易い事てムりますが、只今は厭てムります、其様なことを

仰有て、妾の御願を外になさらう御目算、御願てムります、どうぞカッ

シオを再び御召還し遊ばしませ

オセ 手巾をこゝへ持参致せ、心に懸かる事があるわ

アス ハテおよしなされませ、あの様な副官が又とムりませうや

オセ 手巾引

アス どうぞカッシオの御相談を

オセ 手巾引

アス 從來とても、たゞ／＼貴郎の御情故立身出世も致した男、貴郎と共

に冒した危険も幾そ度

オセ 手巾引

アス そりや餘りてムりますぞい

オセ えゝ出てうせい

とオセロ退場

エミ これでも御格氣はないと仰有りますか

アス 従来は遂ぞ此様な事もなかつたが、さては眞實彼手巾に不思議があ

ると見える、それを失すとは運の盡き

エミ 一年二年で男の正躰は判らぬもの——男は胃臓女は食物、食ふ時

は飽くまで食ひ、飽けば吐出すが胃臓の習ひとムります、——アレ御

覽じませ、カツシオ殿とイアゴーとて

カツシオ及びイアゴー登場

イア 他に致し方もない、是非夫人の御盡力に依るより外はムリなすまい、いや是は幸ひ早う往て御願ひなさるがよい

アス これは、カツシオ様、アノ何ぞ變つた事でも

カツ 又々例の御情願でムります、何卒夫人の御情深い御取成にて、某が一心不亂に尊敬致す、大將殿の御愛顧を恢復す事の叶ひますやう、偏に願上ます、最早某は、此上御待申す事が出来ませぬ、若し某が罪科重くして、過去の忠義も、現在の悲嘆も、さては心に誓つた將來の精勤も、御愛憐を購ふに足らずとならば、縦しそれとても、少しも、早う結局を知るが某の身の爲てムります、愈よ左様な身の上と定まらば、強ひ

ても泣寝入りに、他の渡世に浮身を棄し、運命の弄るがまゝに任すばかりでムります

アス あゝコレ、カツシオ様、御詫も今は折が悪い、大將殿は故の大將殿ではムりませぬ、あの御心の變つたやうに、御様子がお變りなされたなら、お見それ申す程であらう、妾が精一杯の御嘆願故、詞が過ぎると大將殿のきつい御不興も、少し御辛抱なされませ、及ぶだけは致します、自分の爲めなら出来ぬ程も致しませう程に、差當りどうぞそれ御満足

イア 大將には御立腹なされましたか

エミ たった今此處から御出なされましたが、常にない、穩ならぬ御様子であつたわいな

イア 我君にして御立腹遊ばすとは——某は眼前戰場にて敵の大砲が御手兵の幾列を、空中に吹上げたりし其時に、彈丸は宛ら魔物の如く、我君の御側なる御兄人を一吹に吹倒し、を見ましたが、大將殿には、其時の顔色常の通り、左様な御方が御立腹あらう筈はムらぬに、こりや何ぞ重大な事件でも——すりや早速伺候致さねばならぬ、彼君が御立腹あるからには、一大事があると見える

アス どうぞさうしてたもれい喃

とイアゴー退場

國事に關する一大事の通知が、ゴニスから届いたか、但しはこゝサイプラスで、未發の樁事が露顯せしか、其様な事で、御心が亂れたものであらう、男の常でかやうな折には、心は大事にありながら、目下の者に八

當り、お互に指一本痛うても、五体中がすぐれぬもの、まして男ぢやとて神ではなし、花聲になりたての、其優しさを常も望むは無理である——ほんに妾とした事が、喃エミリア、妾は今の今迄も、大將殿の不親切を、心で責めて居たなれど、かう思へば無實の罪であつたわい喃

エミ 仰の通り、國事のお爲めばかりで、夫人に關する事や、法界悋氣のお爲めでは、アノ、ないやうに致したうムります

アス 何のいな、お悋氣を受けるやうな覺えは、此身にさら／＼ない

エミ 覺えがないとて、男の悋氣は止まぬもの、悋氣深い故に悋氣もします、原因有て悋氣するのでは、ムりませぬ、悋氣と申すは、我から我を産み、自分で自分を造る、不思議の怪物でムります

アス 何卒そのやうな怪物を、オセロ殿の御心の中に、間違つても入れた

うない

エミ ほんに左様でムります

アス 妾もこれから一寸御目に懸かって來やう——カツシオ様、暫らく此

處らに御待ちなされ、折善くば大將殿に申し上げ、精一杯御許容ある

やうに願ひませう

カツ 忝けなうムります

とアスアモナ、エミリア退場

ピアンカ(カツシオ)登場

ピア これ申しカツシオ様

カツ 何用あつて其許は此處へ、コレ、いとしのピアンカ、如何致した、實は身

共も、そもじの許へ、折角行かうと思つた所

ピア 妾とても丁度貴郎の御宿處へ、參らうと存じた所、どうした事やら、

最早一週間も御來臨がない、ほんに此七日七夜、時に積れば百六十幾

時といふ、其間の待詫し、戀する者の胸の時計は、一日が千日、それは

辛うござんしたわいなア

カツ 許して呉れピアンカ、此中は甚う心に懸かる事が有つて、心ならぬ無

音も致したが、何れ近い中に、此埋合は屹度するぞい——さてピアン

カ其許に頼む事がある、此模様を取て呉りやれ

とアスアモナの手巾を交付す

ピア カツシオ様、是は何處から御手に入りました、外の女からの御音物、

さてこそ此中、御來臨のなかつた其譯も——え、此様事にならうとは、

口惜しい

カッ こりや女、何處の悪魔に、其様な邪推を教はったか、棄て、了へ、還して
了へ、此手巾が、仇し女の紀念物ぢやと疑ふか、そんなものではさらさ
らない――

ピア そんなら誰のでござんすぞへ

カッ それは知らぬが、身共の居室に落て居た、落し主の現れぬ中、どうぞ
模様を模て置きたい――いさくさ云はず、其様にしてたもれ、そして
今はこれて往んで呉りやれ

ピア 往んで呉りやれ、そりやまた何故に

カッ こゝは大將殿の御供前、女を伴て居る所を、御目にかけるは不面目、
又好もしい事でもない

ピア その又仔細は

カッ 其許憎い故ではない

ピア たゞ可愛くないばかり――そんならどうぞ少の間、還路を送つて
下さりませ、そして今夜は早々と往て遣ると、仰有つて下さりませ

カッ そんなら送つて行くのは、ちつとの間ぢやぞや、其代り今夜は早々と
出懸けやう

ピア 宜うござんす、時と場合で仕方がない

と二人退場

第四幕

第一場——サイイプラス 城門前

オセロ、イアゴー登場

イア 左様に御考へなされませうか

オセ 左様に考へるとは

イア ハテ、内證の接吻を

オセ そは許し難き猥らな接吻

イア 然らば一時計りが間、猥らな意は少ともなければ、同一衾に帯紐解

いて寝た時には

オセ 同衾して、それで猥らな意がない、それぞ外道の偽善といふもの、縦

ひ淫猥の念なくして、左様な事を致すにせよ、天意を冒す無道の舉動、遂には魔道に墮つるであらう

イア でもムリませうが、眞實無垢であるならば、罪宥すべきでムリませ

う、乍去、若し某が、女房に手巾を與へるなら——

オセ さて其時は

イア 申すまでもなく、それは最早女房の有、何處の何様な男に贈らうと、

それは随意でムリませう

オセ 乍去女には又守るべき名聞と申すがある、それをまで、他人に與へ

て宜からうや

イア 其名聞と申すは目にも見えず、手にも取られず、所有てぬ筈の者が、動もすれば所有ちます物、乍去手巾なら——

オセ あゝ、それよ、折角忘れて居たものを、汝の言葉で——凶事を報せて啼く鴉が、疾病ある家の棟に栖つた様に、その厭はしき想出が、此胸の中に浮びしぞや——え、拙者が手巾をカッシオ奴が

カッ してそれが何致しました

オセ 今はそれを云ふも厭ぢやわ

イア 然らば彼が不義の現場を某が見届けたなど、申したなら、又は思ふ女を口説落すか、先方から懸想されて、戀の出来た時などは、えて行く先々で、惚話吹聴は、治郎の常てムリですが、其様に彼のカッシオが惚ける所を、此某が立聞したなど、申したなら、ハテ何となされませる

オセ 彼奴が何ぞ申したか

イア 申しましてムリですが、カッシオをお糺しなさらば彼方にも逃口上はムリませう

オセ さて何と申した

イア かういふ事を致したと——いや某は矢張り——

オセ 何、何と

イア 寝た事が——

オセ デスデモナと

イア そこは何とでも、宜い様にお解釋さ下さりませ

オセ ちえ、彼女と、奇恠千萬、手巾の一條もあり、又た此の自白——あゝ、手布——懺悔して縊らるゝとは世の諺、さてこそ縊られうとての其自白か、あゝ想へば肌に粟、此様に我胸の騒ぎ狂ふは、確かに事實のあ

る證據、我五臓をして、かく震ひ顛^{うた}からしむるは、實^{まこと}もない謗^{うたが}のみて
はあるまい——あゝ二人が鼻と鼻、耳と耳、口と口——左様な事が—
—何、自白ぢや——手巾ぢや——え、惡魔が

とオセロ憤激の餘り氣絶する

イア 廻れく、乃公^{なつか}が注ぎ込んだ毒が廻れく、馬鹿正直な奴原は、みん
なかうして毘^びに懸ける賢女とやら、貞女とやらも此通り、見ん事濕衣^{ぬれぎぬ}
は着せて遣る——(オセロの耳元へ口を寄せ) 如何なされました閣下、コレサ閣下、
オセロ殿

カツシオ登場

これくカツシオ殿

カツ 何事ぢやな

イア 大將殿が、癩癩^{かたかた}を起されて此通り、これが丁度二度目でムるが、昨日
も卒倒なされました
カツ 御頭^{ごつし}を揉んで進ぜるがよい
イア いや却て、此儘が宜しうムる、御病勢に逆はぬやうに、そとして置
き申さぬと、御口端から泡^{うぶ}を吹き、遂には狂氣のやうにおなりなされ
る——お覽あれ、お動きなさる、貴殿には暫らく彼方^{あつち}へく、直ぐにお
氣がつかれます、そして大將がお歸館なされたなら、後で貴殿に御話
し致したい、重大な事件がムります
とカツシオ退場
如何なされました閣下、御頭が御痛みなされましたか
オセ 何、拙者を嘲弄致すか(妻を盜まれし夫は、頭^{かぶ}に角を生ずとの傳説あるよ
りイアゾーが詞に、頭^{かぶ}が痛むかとの問は角^{つば}の生ず

らるが爲めに、閣下の頭は痛むならむとの意味に取
られ、さてこそオセロは怒りて此語ありしなり)

イア 閣下を嘲弄——けしからぬ、左様な事は——何卒大丈夫らしう、御
不運を御忍び遊ばされませ

オセ 頭に角の生えた此身は、既や畜生ぢや、怪物ぢや、大丈夫などは思
ひも寄らぬ

イア 果して然らば、人数多き都會の中には、数多の畜生や、然つべらしい
怪物がムります

オセ ハテ、カツシオは眞實自白致せしか

イア 男らしうなされませ閣下、妻を有つ男と申すは、みんな御同様でム
ります、汚れた臥床を我専有とのみ安心して、夜なく快眠を貪る夫
は、幾何あることとてムりませう、それに比ぶれば閣下などは、宜い方

てムります、おゝ安心したる間の中で、不義女の口を吸ひ、通れ貞女と
思ひ居るとは何たる悪魔の戯れ事、いや某などは、知らぬが佛は大嫌
ひ、知ったからには腹のゐるやうに致しまする

オセ それがよい、さもあらう筈

イア 只今閣下が、御人柄にも御不似合な御愁傷で、前後不覺に御なりな
されました時、丁度カツシオが参りし故、宜い加減に云ひくるめて還
しましたが、後刻又出直すやうに、話柄があると申したを、承知致して
立去りました、追つけ来る事でムりませうが、閣下には暫く彼方へお
退きなされ、御辛抱有て會談の模様を、御立聞きなされませ、又もや得
意の惚話を語らせ、何處で、何うして、何時の頃から、幾度程、又此次は如
何にして、なんと、夫人と逢引の寸法を吐かせます、其時の彼が顔ばせ

に御目留められ、眼つき、口つき、一顰一笑の末迄を御吟味なされませ、たゞ努々、勘忍といふ事を御忘れなきやう、若し御忘れなされたなら、乍恐閣下は、憤怒の一塊、肉、大丈夫とは申されませぬ

オセ 勘忍にぬかりはないが、これ聞け、拙者は、飽く迄——殘忍ぢやぞや
(森婚森夫を容赦はせじとの意)

イア それは萬々御尤——たゞ遠てずに、悠々となされませ、先づ——何卒彼方へ——

とオセロ片隅へ退く

かう欺瞞して置いて、さてカツシオには、ピアンカの噂を持懸ける、情を賣つて、衣食を求むる賣女の常、多勢を騙して、一人に騙さるゝ掟に漏れず、彼奴カツシオに首、丈、カツシオとても、彼奴の噂を聞く時は、喜

び笑ひが制まるまい——お、噂の主が参る様子

カツシオ再登場

カツシオが笑へば、オセロが狂ふ、嫉妬の眼で見る時は、彼が笑顔は云はずもあれ、身振素振の末までが、とんだ意味に取れるであらう——これは——副官殿

カツ 副官の役名を聞くにつけ、身を截断らるゝ思ひが致す

イア デスデモナ様に御頼みなされば、御安心なものでムります、乍去これがピアンカ殿への御依頼なら、どんなにか、早う埒が明くのでムらうに

カツ いやはや困り女て
オセ (語り) 最早相好を崩して居る

イア 彼の様に情夫を慕ふ女は、遂ぞ從來見た事もない

カッ いやナニ、とんだお轉婆女ぢやが、某には眞實心中を立て居る様子

オセ (語) 口で貶して、笑顔で紛らす不屈者

イア 時にカツシオ殿

オセ (語) そろ／＼惚話を引出さうと致して居る、出来し居るわい

イア 愈よ御婚儀を挙げるとか、ピアンカ殿の御話でムりますが、全く左

様で

カッ ハハア／＼

オセ (語) 其笑ひは勝鬨か、此の色道の剛の者奴が

カッ 某が彼女と婚儀を挙げる、何ぢや彼女は賣女風情、某が心を、其様に

見縫つたものでもない、それ程墮落も致さぬに、ハハア／＼

オセ (語) さうぢや／＼、勝者は屹度笑ふが常

イア 乍去世間では、御婚儀の噂が専てムります

カッ 宜い加減の事は云はぬもの

イア 虚言を云つたら、某の顔は立ちませぬ

オセ (語) 拙者の顔に泥を塗つた不所存者めが

カッ 其噂は皆な彼の猿めが、自分て吹聴したのであらう、己が己惚心か

らの獨り極、某が約束致した譯ではない

オセ (語) イアゴーが、あの目くばせは、逢引の一伍一什をこれから語ると

の意味であらう

カッ 遂先刻も此處へ尋ねて參つたが、行く先々を、尾け廻はされるには困

却々々、先日もエニスノのさる人々と、海岸にて會談致し居る中、突然參

つて襟頭へしなだれかゝり――

オセ (語) あゝいとしのカツシオ様と叫んだか――彼奴の様子で察せらるゝ

カツ 釣下るやうに凭れ込み泣いたり突いたり引張つたり、いやはやそれには――ハッハッハッ

オセ (語) それからとう／＼拙者の室へ引張り込まれた物語か――えゝ

汝の鼻を引きちぎって、投げて呉れう狗の、其處らに居ぬが残念だわい

カツ いや、どうしても、手を切らねば埒が明かぬ

イア 南無三、噂の主が見えました

カツ さて／＼麝香猫のやうな奴、五躰中を香はせて――

ピアンカ登場

何故其様に憑き纏ふぞ

ピア 憑き纏ふとはよう仰有った、えゝ事そ、魔物でも憑けば宜い、先刻下された彼の手巾は、ありや何てムリますへ、それを受取つた妾は阿呆様を摸れなど、飛んでもない、いかにも／＼貴郎の室に落ちて居て、落し主が判明りさうもない品物、それも其管外の情婦からの貰ひ物、それに妾に模様を摸れい――サア／＼御遣し申します、何處ぞの人に、御遣りなさるが宜いわいな、此方や何處で拾うたのでも、模様を摸るのは眞平／＼

オセ コレ／＼ピアンカ、何のこつた

オセ (語) ヤアあれこそ正しく拙者が手巾

ピア 今夜は兎も角、御膳立して御來臨を御待ち申します、若し今夜御來

臨がないなら、後は一昨日御待ち申しますぞへ

とピアンカ退場

イア さ、さ、後追懸けて御留めなされい

カッ 實にさう致さずばなるまい、市中を喚めき廻るてムらう

イア して晚餐は彼處にて

カッ 其心算で

イア 左様ならば、後刻又御目に懸れませう、少々御話し申したい事がム
ります

カッ 何卒尋ねて来るやうに

イア サア、最早何にも仰有りますな

とカッシオ退場

オセ (片隅の方よ) コレ、イアゴ、如何して彼奴を殺して呉れうぞ

イア 御覧なされましたか、己が亂行をさも誇り顔なあの笑顔

オセ お、さ、イアゴ、

イア して又、手巾に御目を留められましたか

オセ 彼品は、拙者の手巾であつたらうが

イア 確かに左様でムりましか、でも馬鹿らしいは夫人、折角カッシオに、
御遣しなされたあの手巾が、外の情婦の手にあるとは、よも御存じは
ムるまい

オセ 五年も十年も縛って置いて弄殺しに殺して遣りたい、それにつけて
も、口惜しいは、デスデモナ、美しい奴、いとしい奴

イア 其の御執念は、御棄てなされずばなりません

オセ イヤ、今夜の中に亡き者にして、焦熱地獄へ墜す所存ぢや、逆も生けては置かれぬ奴、拙者が心は石のやう、打てば却て拳が傷れう——お、乍去、彼様な可愛の者が又とあらうか、玉座の側に侍つて如何な帝王をも左右し得る奴

イア ハテ、其様な御心では

オセ イヤナニ、たゞ實際を申す計り、縫針の道には立優れ、糸竹の技に懸けては、猛獸の心をも和らぐる程の腕前あり、萬に才絶れ想裕に——

イア 左様に絶れておはする丈、一倍罪も深いといふもの

オセ おゝ幾百千倍深いやら——そして彼のやうに柔順な性質

イア 餘り御柔順が過ぎました

オセ 實にさうぢや、乍去考へれば悲しいわい、おゝ考へれば情ない

イア ハテ其様に御未練がムるなら、不義不貞御構へなしの、御特許を御

出しなされませ、閣下さへ御構へなくば、誰が文句を云ひませうぞ

オセ いや、斬りさいなんて微塵にする、拙者を怪物に仕立てた奴

イア おゝ何たる御醜行

オセ 人もあらうに部下の士官と

イア 益す以て

オセ 毒薬はないか、イアゴ、猶豫は無用、此の今夜——あの美しさ優し

さが、此決心を鈍らせうも知れぬに依て、何にも云はず、唐突に此の今夜

イア いや毒薬は御無用になされ、御床の中で——御自分で汚した、其現在、の御床の中で、御縫めなさるが上分別

オセ ツム、妙々、それでこそ刑罰の旨意にも叶ふであらう、至極妙
 イア して又カッシオ奴は、某が片付けますてムりませう、此夜半には吉
 左右を、必ず御聞かせ申しまする

オセ 満足に思ふぞ、イアゴ

と奥にて喇叭の音聞ゆる(案内を申込む合圖也)

あれあの喇叭は

イア エニスより何者か参りし事と察しまする、や、公よりの御使者、ロド
 ビコー殿の御來臨てムります、夫人と御一緒に、それそこに御來なさ
 れました

ロドビコー、アステモナ、及從者若干登場

ロド 大將殿御健勝て祝着致す

オセ 忝なう存じます

ロド 公爵并に元老院より御見舞の御書面でムる

と封書をオセロに交付する

オセ 方々より御好意の御書面、恭しく頂戴致しまする

とオセロ封書を開き讀む

アス してロドビコー様、何ぞ變つた御話は

イア ようこそ御來臨なされました

セド いや忝ない、して副官カッシオには

イア 御健在でムります

アス ロドビコー様、御聞き下され、大將殿とカッシオ殿との其中に、ひよ
 んな御不和が出来ましたわいな、乍去、貴君の御盡力を願うたなら、屹

度故々に治まる事でムリませう

オセ (語) 其様な心で居るか

アス 何と仰有ります

オセ (書面を) 貴殿に於ては必ず御履行可有之——

ロド いや、貴女への御詞ではムらぬ、書面を御讀みなされてとムる、はて大將殿とカツシオとが、左様に御不和になられましたか

アス 困った事になりましたわいな、カツシオ殿が不憫でなりませぬ故、どうぞ圓う治めたいものでムります

オセ (語) え、どうして呉れうぞ

アス 申し旦那様

オセ (語) こゝな愚物めが

アス どうやら立腹致した様子

ロド 若しや書面の趣が御氣に障ったのではあるまいか、カツシオ殿を代官として留め置き、大將殿には、御歸國あれとの趣と察しますれば

アス 左様ならば、妾は寧ろ喜ばしう存じます

オセ 眞實左様か

ダス 旦那様

オセ 汝は逆上致したな(汝はカツシオを此地に留めて、エニスに歸るをよむむの意)それを見るこそ喜ばしい

アス 何故其様な事を、コレ申しオセロ殿

オセ え、こゝな魔物めが

とオセロ、アスアモナを打擲する

アス 其様な御折檻を受くる覺えは

ロフ これはしたり、かやうな御舉動があらうとは、此眼で見たと誓を立てしも、ゴニスの人々は信じますまい、餘りの御處置でゐる、夫人はあの様にお泣きなされます、さ、御慰めなされませ

オセ お、淺ましや、若し此大地が、女の涙で孕むなら、此奴が墮す涙の滴よりは、鰐魚が生えるであらう(鰐魚は人を食ふ時空涙を流すといふ、故に空涙を指して鰐魚の涙といふ、故)え、目通りを下げ

アス そんなら御氣に障らぬやうに、妾は彼方へ参りませう

とアス行きかゝる

ロフ 御柔順な事ではある——大將殿御呼還しなされませ

オセ デスデモナ

アス 旦那様

オセ (ロフに) 貴殿は彼女に何御用で

ロフ 何某てゐるか

オセ いかにも、彼女を呼還せと、貴殿仰せられたては、ムらぬか、彼女はよう還ります、真直に行くかと思へば、忽ち又かへります、そしてよう泣きます、そして柔順でゐります、仰の如く柔順で、至極柔順で、至極柔順でゐります(アスに)泣け、いくらでも——(ロフに)此義に就いては——(アスに)あ、よくも工んだ空涙——(ロフに)某は歸國致せとの事にゐります(アスに)行け、後程呼びに遣るわ——(ロフに)謹んで仰に従ひます、そしてゴニスへ歸ります——(アスに)行け、行けと申す

とアス退場

に——某が役目は、カッシオへ引渡し申すてムらう、そして今宵は何卒御會食が致したい、聊かサイブラスへ、貴殿を歓迎の志てムります——え、多情多淫の獸め

とオセ退場

ロド さても、これが彼の元老院の人々が、完全無缺の名將と、歌ひ囃せるムールなるか、これが彼の、喜怒哀樂も冒すに由なく、其高德は災難の彈丸も觸るゝに難く、禍難の槍も貫くこと能はざりし、寛仁大度の英雄なるか

イア 大將には大分御變りなされました

ロド あれでも正氣か、ちと氣が觸れては居ぬか

イア 御覽の通りてムります、某にはとやかう申す事は出来ませぬが、ど

ロド うも尋常ではムりませぬ、其様な事てなければよいがと存じます

イア 妻を打擲致すとは何事ぢや

ロド それも宜しい事ではムりませぬが、某は又、それよりも悪い事をなさらぬやうにと祈ります

イア そもそも、これが彼の習慣か、さては又、書面の趣に業を煮やし、箇様な暴行をも致せしか

ロド 某が見聞致した事もムりますれど、それを申上げるは、某の身分として、いかゞはしい事てムります、乍去、此後の御舉動に御目留められますれば、某が申さずとも、御合點の参ることがムりませう、いざ後から御出なされて、どうなされるやら様子を御覽なされませ

イア さては彼が人と成りを、今迄買被って居つたるか

と一同退場

第二場 城中の一室

オセロ、エミリア登場

オセ 然らば其方は、何も見た事はないのぢやな

エミ 聞いた事も、お疑ぐり申した事もムりませぬ

オセ たゞ夫人とカツシオとが、一緒に居たを見た計り

エミ 去りながら其時には、何事もムりませず、御二方の御對話の一言一句も餘さずに、みんな此身が伺ひましてムります

オセ 耳語などは一度も

エミ 決して左様な事などは

オセ 又は其方に、其場を外させなどは

エミ 決して左様な事も

オセ 扇子を取つて参れ、手袋を、假面をなど、命じた事も

エミ 決して左様なことはムりませぬ

オセ とはまた不思議千萬

エミ ハテ、夫人の御身持の、お正しい事ならば、命を賭けても、此妾が保証
ます、御疑念などはお棄てなされませ、御胸の汚れてムりませう、若し
又何處ぞの悪人が、そんな告口を致したなら、アダムを騙した蛇程の
天罰は眼前でムりませう、あの夫人が操正しくないならば、世界中に、
幸福な男はムりませない、どんな貞女も、不貞腐れと申されます
オセ 何はともあれ彼女を茲へ呼んで参れ

とエミ退場

云はせて置けば幾らでもいふ、乍去不義の媒介を致せし女、容易く實は吐かれまい、主の秘密を鎖し籠め置く、箆筒も同然のいたづら女、それて神前に跪づき、祈禱を捧ぐる事もあるは、此眼て見たる記憶がある

エミリ、アステモナを伴なうて再登場

アス 旦那様、何御用てムります

オセ 近うく

アス して御用と仰有りまするは

オセ 其許の眼を見せて呉れよ、拙者の顔を面と見上げい

アス 怖いことをなされます

オセ (アに) 其方はいつもの見張をせい、彼方へ外して、扉を締めて、人が来らば、咳拂を致すなり、聲を立つるなり、報知らせて呉れよ、ハテ其方が仕馴れた職掌ぢやらうに、サ、早う

とエミ退場

アス コレ申し、何を仰有るのでムります、御詞の中に籠もる、御憤りは解せました、が、解すに解されぬ、其御詞

オセ ヤイ、其許は何者ぢや

アス 貴郎の妻でムります、操正しい、貴郎の妻でムります

オセ 然らばそれに相違ないと、誓文立て、云うて見い、やがて地獄へ落つるであらう、(偽誓の罪) さらば天使を欺くばかりの、其美貌、悪魔てさへも騙されて、手を束ねて引込まう、不義の罪に偽誓の罪、重ねて早

う奈落へ墮ちや、いやさ操正しいと誓つて見い

アス 天に在す神様こそ、よく御承知なされませう

オセ 悪魔の様な其許が不實を、いかにも神様は御承知なさらう

アス 不實とはそりや誰に、何が不實でムリますぞへ

オセ え、出て失せい、己れデスデモナ

アス お、何たる事でムリませう、何故其様に御泣きなされます、妾故の
其御落涙でムリますか、若しや貴郎の御召還は、愚父の讒訴であらう
との御疑念ならば、此妾を御咎めは曲もない、貴郎に赤の他人ならば、
妾にも赤の他人でムリませうに

オセ 天若し災を茲に降して、我を試み給ふとも、我が素頭の上に、幾その
辛酸耻辱の數を雨降らし、困厄の淵に埋もる迄、我を陥れ給ふとも、さ

た此身は擒はれて、世に希望なき、奴隷の束縛を受けるとも、我が精神
の何處にか一點の忍耐は存すべし、耐へ難きは長へに、世の物笑と語
りつぎ、云いつぎ傳へられむ一事ぞかし、乍去それもまだ忍ぶべし、我
愛情の寶藏は、生命の潮の湧く源泉、これあればこそ生きもする、これ
なくば何命のあらむ、ざるを其源泉を、我今見棄て去らむとは、さては
彼の汚ららしい、雌雄の鬻奴が落合ひて、卵を産む爲めの溜池と他人
手に交附し了さんと、あゝ汝、忍耐といふ朱唇豊頬の天使も今は、其
美はしき面の色を早や變へよ、魔界の凄味を額に色どれ

アス よもや妾を淑しい女子と、思召さぬではムリますまい

オセ 實に淑しいな、肉舖に集く夏の蠅産卵むだと思へば又孕む、其貞節
が其方を其まゝ、おゝ汝、花美はしき野邊の草、餘りに香氣の深くして、

喚げば五感を痛むるとは——寧ろ其許といふものが、此世に生れて
來なんだなら——

アス 心付かずに居りますれど、何ぞ妾に、過失でもムリますか

オセ あゝ此美しい白紙が、淫婦の二字を題せむ爲めの料紙なるか——
何過失を犯ししとや、おゝ汝は君傾城に等しき女、汝が過失は口にす
るさへ、慚愧に顔は燃え焦げて、灰燼と成りも果てう、何過失を犯しし
とか、其過失には天も鼻を撮み、月も眼を瞑り、萬物に接吻を惜まぬ多
情の風さへ、岩窟の中へ逃げ隠れ、聞きともないと潜むてあらう、何過
失も押の強い、面皮の厚い一夜女郎

アス 聞棄ならぬ其御言葉

オセ 其許は吃度賣婦でないか

アス 何のまア、貴君に捧げた此身體を、あだし男に指ても差させぬ其事
が、賣女うりめの行爲なまでない上は、決して——左様な者ではムリませぬ

オセ 何ぢや、賣女でない

アス 決して——左様なものでは

オセ そのやうな筈がない

アス おゝ天つ神も御寛恕あれ、かやうな疑受けるのも、皆な此身の不束故

オセ 然らば拙者は、其許の寛恕を乞ふてあらう、近頃オセロと縁組した、

エニスエニスの淫婦めは、其許ぢやと思つて居たは、コリヤ違つて居たさふな——

——(聲を)これ——女をんな、天國の關の戸を守るてふ、セントピーターに對
をなす、地獄の關守よ、此方へ入れ(エミリアを呼)

エミリア再登場

これく、エミリア、最早用事も果てた程に、此金は其方への禮ぢやぞよ、さらば確と錠を下し、屹度秘密に致すがよい

とオセ退場

エミ 我君には、何を思ふて御在遊ばすやら——夫人いごと成されまし

アス 妾は何やら半分夢の様ぢやわいな

エミ 旦那様には、何う遊ばしたのでムります

アス 何う致したとは誰が

エミ ハテ、旦那様でムります

アス 旦那様とは

エミ 誰あらう、貴女の旦那様でムります



ACT IV Sc. 2

「たしまれさ成如何人夫」ミエ
「るいわざ様の夢分半らや何は妾」ステ

テス 妾には最早旦那はないぞや、コレ喃エミリア、何事もいうて呉れま
い、涙で返辭をするばかり、泣くにも泣かれぬ心の切なさ、どうぞ今夜
は、婚禮の時用ゐた蓐被こゝろしぼを、妾が臥床ふしどへ敷いてたもれ、忘れまいぞや、そ
してイアゴー殿を茲へちやと呼んでたもれ
エミ さてこそ何か變つた事が

とエミ退場

テス 此様このさまにして御心任せになつた方が穩やかな仕打であらう——ても
何の様どのな譯があつて、たとひ此身に少しの落度があればとて、御咎めを
受ける様にはなつたのやら

エミリア、イアゴーを伴ひ再登場

イア 夫人、何御用でムります、アノ如何いかになされました

アス 妾には云ふ事も出来ぬわいな、幼少い小兒を躰けるには、手軟かに
優しうせねばならぬもの、妾ぢやとて其通り、叱られるといふ事には、
まだほんの小兒ぢやに

イア ても何事でムります、夫人

エミ 聞いて下され我君が、夫人を賣女呼はり、聞くに聞かれぬ御悪口

アス イアゴ殿、妾は其様な者であらうか

イア 其様なとは何のやうな

アス 今エミリアが申した通り、大將殿が云はれた様な

エミ 賣女ぢやと仰有て、泥酔れた乞食が、夜鷹に悪口するとても、あれ程
の事はよもあるまい

エミ 何が原因で、其様な事を仰有りました

アス 妾はそれは知らぬわいな、妾はそんな女でない
イア 先づ、其様にお泣きなされますな、實に何といふ事であらう
エミ 立派な縁談の口をも止め、父上様や、御生れ故郷、御友達をまで、御棄
てなされたも何の爲め、賣女と呼ばれる爲めであらうか、これが泣か
ずに、どうマア御いてになられませう

アス あぢきない身の上ぢやな

イア 左様な事を仰有るとは、ほんに御爵が當りませう、どうして其様な
御心には

アス それを御承知は神ばかり

エミ これは、的切、饒舌な、詭譎な、偽言な、さもししい心の悪漢が、何ぞよい役
にても、有付かうとての企圖事、有る事無い事、告口したに相違ない、若

し此推量か違つたなら、命を取られても大事ない

イア ヤイ、そんな奴があるものか、あるべき筈がないではないか

アス 若しそんな者があつたなら、讒訴の罪は、どうぞ御宥免あるやうに、天に祈つて遣はさう

エミ えゝまぬるい事ばかり、そんな者があつたなら、首は縊つて其骨は、地獄の臼に投げて遣りたうムります、夫人を賣女などゝは我君も、餘り胸愆な、夫人が誰と一緒に、どれ何處で、何時どうして、どんな疑はしい事がムりました、我君には必ず、何處ぞの横着な人、非人な、惡漢にたぶらかされたのでムります、どうぞ天道様の力にて、かやうな惡人の面皮を剥ぎ、あらゆる善人の手に鞭を取らせ、東の果から西の果まで、世界中の大路を裸體で渡し、打て、打ちのめしたら腹がゐるやう

イア 聲が高いたしなめヤイ

エミ 忌まはしいは箇様な奴、いつぞや貴郎を突ついで、人もあらうに我君と、此妾と仔細ある様に、恐れ多い嫌疑などを、懸けさせたも箇様な奴

イア こゝな大たわけめが

アス イアゴ殿、どう致したらもう一度、舊の様になるであらう、どうぞ其方より我君に、仔細を伺つたもれい、喃、神様もみそなはせ、此身に御咎めを受けるやうな、覚えは少しもないわいな、萬一此心が心の中でか、行爲に現してか、御寵愛を袖にするやうな事を致したなら、又はあだし男の、優しい姿に目を曝らし、優しい詞に耳傾くる様な事があつたら、さては先方よりこそ、たとひ此身を振棄てうとも、此身の夫

を思ふ愛情が、昔も今も將來も、衰ふる様な事があつたら、幾その苦難に沈み果つる法もあれ、御恨には存じませぬ、夫の邪慳慕らば慕れ、其邪慳が此命は奪ふとも、此愛は奪はれぬ、賣女など、は、口にするさへ、慳然とする、世界の浮氣を圍めても、其様な舉動を、此身にはさせられませぬ

イア 先づ、御耐へなされませ、これはほんの我君が、只一時の御氣紛れ、國事に係る御憤りて、夫人に入ッ當りなされたもので、ムりませう
アス 只だそれだけの事ならば――

イア それだけの事で、ムります、某が保證ませう(と喇叭の音聞ゆる)御聞なされ彼の喇叭は晚餐の調た合圖、エニスの御使者が御待兼て、ムりませう、さ、御出なされませ、御泣き遊ばします、御心配の事は、ムりますまい

とアス、エミ退場

ロドリゴ一登場

お、これはロドリゴ一殿

ロア 貴殿が眞實親切に、某を取持ち呉るゝとは、どうも合點が参らぬが
イア ハテ然らば、何不親切な行爲を致したか

ロア 何ぢや、彼ぢやと、種々の策畧を毎日授けて下されたが、今の有様は何ぢや、望みの叶へさうな様子は、少しもなく、機會といふ機會は、取逃がし、早や此上に我慢は成りませぬ、これ迄見た大馬鹿を、此後も見ることは致さぬ覺悟

イア 先づ、聞いて呉れ、ロドリゴ一
ロア いや、これ迄に既に聞き過ぎた、貴殿が詞と行爲とは、まるで反對

イア 酷い事を云はるゝ

ロテ 實際を申したばかり、某は早や一文なし、デスデモナに贈る爲め、足下に托した寶玉ばかりで、随分物堅い比丘尼をさへ、動かす事も出来たらうに、其時の足下が詞に、彼女は快く受納して、早速某に親近を望むとの事であつたが、少しも其様な事はない

イア ハテ辛抱せい、宜いてはないか

ロテ 宜いてはないか、辛抱せい——いやもう辛抱はならぬ、宜い事は少しもない、これは怪しからぬ、某は、どうもまんまと騙されたやうぢや

イア 宜しい〜

ロテ 宜しい事は少しもない、此上は某自身で、デスデモナに何も彼も打明けて、若し彼女が寶玉を返さばよし、これ迄の願望は取消して、道な

らぬ戀は棄てもせう、若しさもなくば相手は足下、此腹いせは、恥度致す

イア それでいふことも、もうあるまい

ロテ 某は決心の程をいうたばかり

ロテ ハテそれで足下に、勇氣のあることが判明致した、これから以後は、足下を畏敬の念が、以前に倍して身共の胸中に湧いてあらう、コレコレ近う、足下の詰問は、尤もてはあるが、身共とても、此事に就いては、随分忠實に働いた心算

ロテ その形跡は見えないだ

イア 成る程形跡としては、まだ確然に現れぬ、其疑もいかにも一理ないてはない、乍去ロテリゴ、別して今は疑はぬが、果して足下に、確乎たる

決心と勇氣膽略があるならば、今夜こそ發表時、その上にて明日の晩彼のデスデモナが、足下の手に入らなんだら、足下を欺く詭辯の罪、此世の外に身共を追ひこくり、如何やうにもして、一命を取られても苦しくない

ロア してそれはどんな事で、一理屈ある事か、出来ぬ相談ではムるまいな

イア エニスより更めての命令で、カッシオをオセロの後任と定むるとの事

ロア それは眞實か、すりやオセロには、デスデモナ同道にて、再びエニスへ還るてムらう

イア 處がオセロには、故郷なるモリタニアへ参るとの事、就ては此島に

何か一椿事持上り、出發延期とならぬ上は、彼のデスデモナも、無論ここには居られぬ譯、然るに其延期には、カッシオを退者にする程、確かな手は外にない

ロア してカッシオを退者とは

イア はて、オセロの後任に堪へぬやう、頭の臚でも打碎き

ロア それを某にさせうといふ

イア いかにも足下が、自分の利益を圖つて、取るべきものを取らうといふなら——カッシオは今夜馴染の賣女と、晚餐を共にする筈で、身共も後より参る手筈、彼奴自身は、己が名譽ある任命を、まだ承知は致して居らぬ、足下は途中に待伏して、彼が歸路を狙ふがよい、すりや身共は十二時と一時の間に、歸るやうに計らふ故、足下の隨意に襲ふがよい、

身共も手傳てつたの爲め、近くに居る故、取りも直さず挿さみ討ち、ハテ其様に驚いて、立停らずと一緒に行かう、これは是非足下の手づから、彼を亡き者にせねばならぬといふ、その所を、よく話してお聞かせ申さう、最早晚餐の刻限も迫つて来て、夜も追々更けるばかり、いざ〜

ロア 然らばその道理をと、くり合點のゆくやうに聞かせて下され
 イア 屹度合點が参るであらう

と二人退場

第三場—城内の他の一室

オセロ、ロドビコー、デステモナ、エミリア及侍者登場

ロド 何卒最早御送り下されますな

オセ お、御免あれ、少々歩行致した方が、却て保養になります

ロド さらば夫人、御休みなされませ、誠に難有らうりました

デステモナ 貴郎の御來臨こそ、真にお嬉しうりました

オセ さ、何卒御出懸下され——お、コレ——デステモナ——

デステモナ 旦那様

オセ (オセに、オセ 小聲にて) 其許は直ぐに寝むが宜いぞ、間もなく歸館致さう程に、

かしづきの者も退らせ置け、屹度其通りに致すのぢやぞ

デステモナ 畏まりました

とオセ、ロドビ侍者退場

エミ どう遊ばしました、先刻よりも穩かにおなりなされた御様子
 デステモナ 間もなくお歸りなされる程に、妾は早速寢室へ往て、そして其方は退

らせて置けとの御命令

エミ アノ妾は退らせて

アス 仰せぢやに依てエミリア、其方は妾の寝衣を出して、そして最早往んでたもれ、今は何でも御機嫌任せがよいわいの

エミ 寧ろ貴女が始めから、旦那様とかういふ譯に、おなりなさらずばと、口惜しいやうに思はれます

アス 妾はさうも思はぬわいな、旦那様の御不親切、御悪口、御憤怒の其中にも——どうぞ留針を外したも——お懐かしさが彌増すばかり

エミ 仰せつけの御褥被を、御床へ敷いて置きましてムります

アス 忝けない、ほんに女心は愚かしいもの——若し此身が、其方より先に死んだなら、屍骸はどうぞ其褥被で包んでたもれや

エミ ハテ、譯もない事仰有ります

アス 妾が母様の腰元に、バルバラといふ一人の處女、思ふ男が亂心故振棄てられて歌うた歌、柳の歌とて、古いものではあるけれど、處女の身の上に叶うた歌、それを歌ひながら死にや、たが、今夜は何故か其歌が、妾の胸を離れぬわいな、彼のバルバラがしたやうに、頭を片側へうな垂れて、妾も歌って見たうてならぬ——どうぞ早うしてたもれいのう

エミ 御寝衣を取て参りませうか

アス それはよい程に、この留針を取てたもれ——ても彼のロドビコイ様は、美しい御方ぢやなッ

エミ 餘ッ程御奇麗でムります

アス そして舌辯がさわやかて

エミ エニスの或る貴婦人て、それはく御執心彼の御方の下唇の一と觸れ故なら、バレスチン迄も徒然參りをなさらうといふのを存じて居ります

アス (柳の歌)

青葉が下の木下蔭 嘆きに沈む乙女子が

(青柳の歌を歌へや青柳の(柳は十六世紀の表象にして、柳々云々といふ)頭は膝に手は胸に 思ひは何處あなあはれ

(柳々歌へよ柳)

側を流るゝ里川の 水も咽びぬ音にたてゝ

(柳々歌へよ柳)

腸絞る涙には 石も溶けてや流るらむ

これ(脱ぎた)を其方へ置いてたもれ

(柳々歌へよ柳)

早くしてたもといふに、間もなく御歸りなさらうわいな

青柳の枝を此身の花冠(柳の花冠を着くるは戀す人)をな尤めそ棄

てられし、罪は此身にあるものを

いや此次はそれでない——戸を叩くのはありや何ぢや

エミ あれは風でムります

アス

つれなき人よと怨ずれば、つれなき人の詞哉

他し契を我もせば、他し男と汝も寝よ

そんなら其方は、彼方へ退つて寝みやいの、どうも目が痒うてならぬけ

れど、たんと泣けといふ前まへ微しかいな

エミ どうかうのと申す譯ではムリですまい

アス 妾は其様な事を聞いて居る——おゝ男といふものは——唯エミ
リア——道ならぬ道を蹈たんで、良人を辱おとしかしむると云ふ様な女子が
あらうと、其方そなたや眞實思まことやるか

エミ 左様な女子もムリませう、申す迄もムリませぬ

アス 其方そなたや随分、そんな事も爲なかねぬ氣か

エミ ハテ、貴女あなたは御厭ごいやてムリですか

アス 天あまつ神かみもみそなはせ、そのやうな事は

エミ 妾わたしとても、天あまつ神かみのみそなはす前まへては、眞平御免まへだいらごめんてムリです、暗くらがり
でも出來ますものを(エミリアは元談牛分心にも
なき事を云ふと知るべし)

アス 世界を代物たぐひものに貰もらつても、そのやうな事を爲なるのは、いやてはないか

エミ 世界は廣ひろうムリです、價値ねんげんに蹈たんで、大たいしたもの、小こさい罪過つみとがと、代
へ事ことにはなりませぬ

アス 何なにであらうと、其方そなたがそのやうな事を爲なやうとは

エミ いや妾わたしならば致いたしませう、致いたした上うへて其價ねんげんひを致いたします、そりや妾
とても、指環ゆびわの一個ひとつや、天鷲絨てんじゆじゆの一二いちにふた反衣服調度たがひあそび、被かり物ものや、履はき物もの、其外
何でも、このやうな詰つらぬ物もので、其様さまな大たいそれた事は致いたしませぬ、世
界よの實まことと申まをす上うへは——ハテ良人よしみに、帝王ていおうの富ふを得えさせう爲なめなら、侮おとし
辱おとしを興たへたとて、誰たれが惜おぼしいと思おもひませう、末すまは奈落ならくへ墮おつされても構かま
ふ事ことではムリませぬ

アス たとひ世界の實まことに代かへうと、妾わたしは其様なことはいやぢやわいの

エミ 罪過と申すも、それは世間の眼から見て罪過、世界世間を代物に貰つた上は、世間は我が有、どうにでもなります故、早速よいやうに、直すが宜しうムりませう

アス いや其様な女子が、よもやあらうとは思はれぬ

エミ ムりませうとも、世の中が塞がる程ムりませう、乍去妻の不品行は畢竟夫の過失、夫たる者が夫の義務を等閑にして、妻の所有品を外の手文庫へ流しこみ、又は根もない嫉妬にいらだつて、酷たらしう壓へつけ、撃打擲やら小遣錢の減額、かうなつては女ぢやとて、五分の魂はムりませ、淑雅は女の常と云ひながら、復讐の心もないものはムりませぬ、女房ぢやとて、亭主同様美しいものを見る目もあれば、好い香を嗅ぐ鼻もあり、甘い苦いを嘗めわけける口もあるといふ事を、どうぞ男に知

らせたい、不實な男が我が妻を袖にして、外の女子に乗替へるは、何故でムりませう、初めは座輿に手を出すのを、自然に出て来る愛情が、育て上げるのでムりませうが、原因を糺せば、浮氣故、女ぢやとて座輿も致せば、愛情もあり、浮氣心もムりませう、なりや男といふものが、女子を大切にすることがよいではムりませぬか、さもなければ、女子のする過失は、男のする過失が、教ゆるものぢやと、ちつとは考へたが宜ござります

アス 悪を悪の模範とせず、人の悪見て我身を正す、習慣をつけたいが妾の願ひ、そんなら、早う往て寝みやいのう

と二人退場

第五幕

第一場——サイブラス 街上

イアゴー、ロテリョー登場

イア 此處の隅に隠れて待つがよい、間もなく參る事であらう、其業物の鞘を拂つて、おもいれうむと刺すがよい、早う、恐れる事はない、身共も後に居る程に、お互の存亡に拘はる事、そこをよく考へて、決心の臍を確かりと

ロテ 屹度手近に居て下され、ひよと失錯らぬものでもない

イア 此通り手近に居る、何でも氣を大きくして、泰然と構へて居るがよい

とイア後へ立退く

ロテ どうも氣の進む仕事ではないが、なる程仔細を聞けば尤ぢや、何人も一人、亡きものにする分の事、此劍が一躍り、それて彼奴は落命か

イア 漸う青二才の急所を突いて一憤發させて呉れたが、首尾克くカッショを殺すか、但しカッショに殺されるか、又は雙方俱斃れか、何の道利益は乃公につく、ロテリョーが生きるとすれば、デスデモナへの贈物ぢやと詐て、騙り取た金銀寶玉、あれを返せとせがみかくる、いやこれはならぬ、然らばカッショが存ると致せば、彼が此世に居る間は、乃公は何時でも壓されどうし、其上ムールが永い中には、乃公の云うた告口を彼に語る事がないとも限らぬ、それこそ此方が危い、彼奴も到底生けては置かれぬ、それは兎に角、あの聲音はたしかにカッショ

オ

カツシキ登場

ロア あれこそ彼奴の理音ぢやな—— 汝思ひ知れ

とカツシオを刺す

カツ わが着たる衣裳には、汝等の知らぬ鋼鐵あればこそ、さらずば其一刀で、我は敢なくなつたであらう、いざ—— 今度は、汝が衣裳を試して見やうか

と抜劍してロアリゴを傷くる

ロア おゝ某は殺された

と倒れる、イアゴー奔り出て後よりカツシオの腰を薙ぎ逃げ
て行く

カツ えゝやられた、一生不具の身となつた—— 出會ひめされ人々、人殺し

人殺し

とカツシオ倒れる

オセロ登場

オセ 彼の聲は正しくカツシオ、イアゴーがいしくも約束を守り居つたな

ロア おゝ悪い事を致したわい(と後悔)

オセ さてこそ思ふに違はず

カツ おゝ助けを早う、燈火を—— 外科醫を——

オセ 彼奴ぢや—— てもイアゴーは忠勇無二の男ぢやな、上官の耻辱を思ふ事、これ程迄に深いとは、よし今は其方が摸範—— 汝賣女知らずや、汝がいとしの姦夫は、ここに殺され倒れてあるに、汝が命運も瞬く間—— 汝が可愛の其眸も、今は我胸中に消え失せしぞ、邪淫の汚

れにしみた寢床を、邪淫の血にて洗つて呉れむ

とオセ退場

ロドビコー、クラチアノ登場

カッ ヤア夜番の者は居らぬか、通行の人はあらぬか、人殺し〜

クラ ハテ何事かあると見える、あの物凄いの叫び聲は

カッ おゝ助けて呉れい

ロド や、お聞きなされ

ロア おゝ自分は哀れなものぢやな

ロド 何やら呻聲が二度三度、物凄いの晩ではある、こりや人を誘ふ畏かも

知れぬ、たつた二人で聲する方へ近寄るは、危険な事でムリます

ロア 誰一人来て呉れぬ、出血して死ぬばかりぢや

ロド あれ、あれは

イアゴー燈火を持って 来る

クラ 上衣も着けぬ男が一人、燈火と腰の物を携へて参りました

イア 其處に居るのは誰ぢや、人殺と叫ぶは何者ぢや

ロド イヤ此方共は存ぜぬわい

イア 今の叫び聲を御聞きなさらぬか

カッ 此處ぢや〜、助けを頼む

イア 何事ぢや

クラ 某の見る所では、これはオセロ殿の旗手でムリませう

ロド ほんにさうぢや、かねて聞いた剛の者

イア 其様な凄まじい聲を立てるは何者ぢや

カツ さういふはイアゴーではないか、某は斬られた悪徒の爲めに闇打ちに遭うた、何卒介抱を頼むく

イア これはしたり、副官殿か、さてく、何奴が此様な

カツ 下手人の中の一人は、まだ此邊に居るであらう、逃げ了ほせは叶はぬ筈

イア おゝ悪むべき卑怯者——(ロア、ケラに向ひ)其處に御在なさるは何誰ぢや、此方へ来て御手傳へ下されい

ロア おゝ助けて下されこゝぢやく

カツ それその聲は下手人の一人

イア おゝ殘忍無道の卑怯者めが

と云ふより早くイア、ロアを刺す

ロア ヤイ、イアゴーの極道者、おゝ人非人の此犬め

イア 闇討とは卑怯な奴、殘忍なる盜賊奴等は何處へ往った——ハテ此町の静けさは、ヤアく、辻斬ぢやく——貴殿方は如何なる御方ぢや、善人か悪人か

ロア 善か悪か、我等の素振を見て御判じあれい

イア さう仰有るはロドビゴー閣下では

ロア 左様ぢや

イア これは御免下されませ、カツシオ殿が、何者にか闇討され、こゝに倒れて御在なされます

ケラ 何とカツシオ殿が

イア 御怪我はどのやうてムります

カッ 片脚を斬取られ——

イア ハテサテ飛んだ事でムる、方々、何卒燈火を——御傷は某が褌衣で包みまする

ピアノカ登場

ピア 何事でムります、今の聲は何誰でムります

イア 何今の聲は何誰ぢや

ピア こりや、カッシオ様ぢや、いとしい——カッシオ様、申しカッシオ様
カッシオ様

イア あゝこれは評判の賣女ぢやな——モシ、カッシオ殿、闇討の下手人に、思ひ當りはムりませぬか
カッ 少しも

クラ さて、かやうな所で面會とは、某は貴殿を尋ねて居りし所

イア 其紐を御貸し下され、左様——、そしてお樂に御連れ申すやうに、轎をお取寄せ下さませ

ピア アレ——、御氣が遠くなる御様子、申しカッシオ様——

イア 時に方々、某は此女が悪者の仲間であらうと疑ひまする——暫しの御辛抱でムる、カッシオ殿、ちと燈火をお貸なされ(と燈火にてロアの屍體を見て)ヤ、何うやら此顔に見覚えが、ハテ不思議、某が豫て親しく致す、同郷人のロデリゴーでは、否々、左様な事がよもや——いや、矢張り、南無三、ロデリゴーぢや

クラ 何と、アノ、ゼニス

イア 左様でムります、貴殿も御存じてムりますか

クラ 存じて居る段ではない
イア さういふ貴殿は、グラチアノ閣下でムりましたか、これは御容赦下
さりませ、此非常の騒ぎにて、遂御見それ申しました

クラ 足下に遇しは何より満足

イア カツシオ殿如何でムります— ハテ、轎のりものはどうした事やら

クラ さてもく、ロデリゴであつたか

イア 左様でムります— おゝよろこそく、それ轎が参つた（と轎を持来る）腕力
ある者に、氣を付て、カツシオ殿を昇がせて御送り申して下され、某は
扈從おつの軍醫をこれから呼んで参ります— （向ひに）コレ女其處退
いた要らざる介抱措いて呉りやれ— してカツシオ殿彼處に斃れ
て居るは、某が親友でムりますが、豫てより何か御確執でもムりまし

たか

カツ 左様なことは少しもない、顔を見た事もない男ぢや

イア （向ひに）何故其様に青い顔を— サ、早うカツシオ殿を御宅へ

とカツシオ、ロアリゴ共擔ぎ去らるゝ

暫くく、方々— コレ女、其方の顔の青い事よ喃— 方々、此女の眼
の色の凄さを御覽なされましたか、ちと御見詰めなさらば、どうやら
御合點の参ることがムりませう、どうぞ注意して御覽なされ、御了解
になりましたか、御兩所假令舌は用はずとも、罪ある者は自ら語るも
のでムります

エミリア登場

エミ 何事でムります、何事でムりますな

イア カツシオ殿が、ロデリゴ、其外行衛は判明らねど、數多の悪漢に關
討せられ、まことに命もない所、ロデリゴは死んで居る

エミ あのマア、好い御方が、あの優雅なカツシオ殿が

イア これも密通の報酬、仕方がない——コレ、エミリア、其方は今夜カツ
シオ殿が何處で晚餐を認めたか、それをよく糺して呉れよ——(ビア
向)

ピア 其晚餐は妾の宿で認めましたが、それ故、慄へなどは致しませぬわ
いな

イア お、汝の宿でカツシオ殿が——然らば汝は此某と一緒に參れ

エミ え、さうであつたか、さりとて、悪い傾城殿

ピア 何のいな、左様な者ではござんせぬ、さういふ御前と變りはない、正

しい生活を致すもの

エミ 此妾と變りがない、え、厚顏しい

イア いや方々、カツシオ殿の傷口を、早う始末致させうてはムりませぬ
か——ヤイ女、汝には白狀せる事實がある——エミリア、其方は營中
に急ぎ參り、大將殿と夫人に、此始末を言上致せ——イザ方々、どうぞ
御出下さりませ——(白旁)あ、想へば此今夜こそ、我が一身の浮沈の瀬
戸際

と一同退場

第二場——城内の寢室、デスデモナ、臥床の上に眠

れる躰、一燈微かに四邊を照らし居る

オセロ登場

オセ 空恐ろしい彼女が罪業口にするさへ慄然として、清淨無垢と豫て聞く、天上の星宿に聞かるとも恥かしい、其罪業に比ぶれば、我が此行爲も何のその——とはいへ、大理石像を欺く滑かさ、雪より白き玉の肌、刀の痕を刻み込み、流血淋漓の酷たらしさを、眼前見んは思ひも寄らず、さはれ殺さにや置かれぬ彼女が身の上、生かして置かば騙さるゝ男の數の増しやせむ、さらば先づ燈火を消して、次に其許が燈火(命生)を——おゝ燃ゆる燈火は今消すとも、悔ゆることあらば、再び燃やす事もならう、造化が妙技の摸型たる、汝我が妻デスデモナ、一たび其許が魂の、其燈火を消したる上は、我プロメウスならぬ身の、天火を偷んで又と再び、其燈火が點けられうか、其許が唇上の荅の花を、一度刈

取る其上は、二度の生命は與へ難し、萎み果つるは眼のあたり、おゝさらば、幹ながら最一度香氣を嗅いで見む(接吻する)正義の刃をも鈍らせむず、此香ばしき息づかひ、さらば最一度、又最一度(接吻する)たとひ死してもかくてあらば、其許を殺した其後でも、尙戀しさの止みはせまい——これを最後に又最一度(接吻する)かばかり可憐に、かばかり薄命の者があらうか、想へば涙の種ながら、我が心は石の如く、我が悲みは神の悲み、愛すればこそ懲しもする——おゝ目が覺めたか

デス 何誰てムります、且那樣か

オセ おゝ、デスデモナ

デス どうぞ御寢み遊ばしませ

オセ 其許は今夜、よう祈禱を致したか

アス 致しましてムります

オセ 何ぞ未だ懺悔もせず、神恕も乞はぬ罪科があるならば、今より直様致すがよい

アス そりやどういふお意味で

オセ ハテ手早く致せと申すに、拙者は此處に待ち居るぞ、覺悟も致さぬ其許が魂を、闇より闇へは遣りたうない、いや／＼拙者とても其許が魂をまで殺しは致さぬ

アス 何と仰有ります、妾を殺す――

オセ いかにも其許を

アス おゝそんなら、神もお慈悲を、どうぞ此身に垂れさせ給へ

オセ アーメン――これは拙者の心から

アス それ程の御心なら、寧ろお殺し遊ばしますな

オセ フム何と

アス とは申せ、おゝ怖や、其様に御目をぎろ／＼なされますと、恐ろしい御血相に見えます、心に疚ましい事もないからは、世に恐ろしい物はない筈ながら、どうやら身の毛もよだつやうな

オセ 犯し、罪を思方がよい

アス 其罪とやらは、貴郎への心中立てムりますか

オセ いかにも其心中立故、其許が命を取らねばならぬ

アス 夫を慕うて殺さるゝとは、そりや餘まり曲がない、おゝ其様に下唇をお噛みなさるは、何のやうな恐ろしい御心か、御身躰がまるてぶるぶる、こりやどういふ事をなさるので、どうぞ此身をどうかう遊ばす

のではないやうに

オセ 黙れ、静かに致せ

アス 静かにも致しませうが、何う遊ばすのでムります

オセ 拙者が秘藏の彼の手巾、其許に與へ置きしを、カッシオに贈りしな

アス けしからぬ事を仰有ります、カッシオを御呼びなされて、御聞き糺

しなされませ、神かけて左様な事は

オセ 又ぞろ神を引合に、心にもない偽誓は致さぬがよい、臨終の床に臥

しながら

アス まだ死なうとは思ひませぬ

オセ いや即刻死なして遣はすぢやに依て、残りなう懺悔を致すがよい、

誓文立て、嫌疑の條々、さら／＼と云ひ解くとも、拙者が胸中にいた

ましくも疑り固まれる確信を、奈何ともする事は叶ふせう、さうさう
殺して遣はす

アス 此上は神よ御慈悲を

オセ 拙者も、アーメンを唱へて遣らすぞ

アス そしてどうぞ貴郎も御慈悲を——決して／＼此妾は、貴郎に背き

は致しませぬ、カッシオを愛したなど、それは神様も御宥恕あるだ

け、誰を愛そと宜いだけはいざ知らず、戀の紀念品を贈りなどは致し

ませぬ

オセ いや／＼拙者は彼の手巾をカッシオが携帯致すを確と認め、た、え

いこゝな罰當りが、犠牲を供ずる老僧の、冷靜なる心をもて、汝を正義

の犠牲と屠らむところ思ひしに、重ね／＼の偽誓をもて、我を憤怒の

奴隸となし、我が今夜の行爲を、たゞ残忍なる殺戮と世に歌はする口
惜しさ、拙者は確と手巾を見たぞや

アス そんならそれはカツシオが拾うたのでござんせう、贈った覚えはム
りませぬ、どうぞ彼を御寄びなされて、實を御糺し遊ばしまし

オセ 彼奴は既に白狀致した

アス 何とてムります

オセ 汝と馴染を重ねたことを

アス 馴染とは不義の馴染を

オセ いふにや及ぶ

アス カツシオが左様な事は申しませぬ

オセ いかにも、最早彼には口がない、忠實者のイアゴーが其様に致した等

アス おゝ、どうやら心に、安からぬ思ひの致しますは——さては最早殺
されましたか

オセ 命の数が、髪^{いのち}の毛の數程あるとも、拙者が復讐の一念は、其命を一つ
く 抉り取らずば腹が癒ぬ

アス さてはカツシオは無實に死し、妾も濡衣を着たまゝて——

オセ ヤイ、賣女、我面前をも憚らず、カツシオ故に泣きやるのか

アス おゝ、せめて御勘當に——御手討だけは御容赦を

オセ 黙れ賣女

アス そんなら明日迄御猶豫を、今夜一夜は生存へて居たらムります

オセ ならぬ、若し抗うたら——

アス せめてたつた半時程

オセ 既に取懸る上からは、少しの猶豫も相成らぬ

アス そんなら祈禱を一言申す程の間

オセ それも最早相成らぬ、いで

とオセ、アスを壓殺する、同時に扉の外にてエミリアの聲

エミ (奥に) 御前様、申し御前様

オセ まだ聲を立て居るか、まだ死なぬか、死にきらぬか、酷いやうでも、慈

悲も深い此拙者、いつまでも此苦痛を與へては置かぬ、そらくどう

ぢや

エミ (奥に) コレ申し御前様

オセ 誰ぢや

エミ (奥に) 申し御前様、申上度い事がムります

オセ おゝエミリアぢやな、今直に開て遣す——いやとら、死に居た、

大方カツシオの死んだ報知であらう、騒がしい聲を立て居ったな——

最早動かぬやうぢや、生ある者とは思はれぬ——さてエミリアが此

處へ参る、差支はあるまいか——又動くやうぢや、いやさうでもない

——さて何としたら宜しからう、エミリアが参る上は、屹度妻に詞を

懸けるであらう——あゝ妻、妻とは誰の妻ぢや、此身に最早妻はな

いに、おゝ堪へ難き心痛ぢやな、そも、今日は如何なる悪日ぞ、日月

蝕して天柱砕け、地維裂けむとはするなるか

エミ (奥に) どうぞ御前様、申上たい事がムります

オセ おゝ、忘れて居た、這入るが宜いエミリア、待てよ、今直ぐに開ける、先

づ帷帳(はれる)を引いて置いて——何處ぢや

と扉を開ける

エミリア登場

さて何事ぢや

エミ 聞くも恐ろしい聞討が、遂アノ彼處に

オセ 何と、それは今か

エミ たった今でムります

オセ 傳へ聞く、月其軌道を彷徨ひ出て、我が世界に近寄る時は、人皆な狂ひ出るとか、さては今夜もその様な

エミ 御聞きなされ、カツシオ殿が、ロデリゴと申す、エニスから参つた若者を殺しましてムります

オセ ロデリゴが殺されて、それでカツシオも殺されたか

エミ いえ、カツシオは殺されませぬ

オセ カツシオは殺されぬ、さては殺害の目算外れ、復讐の快事もはや是まで

アス (帷帳の中より) おゝ非業の最期で死ぬるのかいのう

エミ アレあの聲は

オセ あの聲とは、どれ何處に

エミ 是はしたり夫人の御聲でムりました、誰ぞ早う御助けを、も一度仰有て下さりませ、コレ申しデスデモナ様、夫人も一度御聲を

アス 無實の罪で死ぬわいのう

エミ してそれは、誰がそのやうになされました

アス 誰でもない我からぢや、おゝこれが訣別ぞや、旦那様に宜しく申上

てたもれ、お、さらば

と絶命する

オセ ハテ、如何なれば此女が、非業の最期を遂るぞとは

エミ 知る人ぞ知る

オセ 拙者の所爲でない事は、彼女自らも云ひし通り

セミ 成る程其様に仰有りましたが、こりや事實を糺さいては

オセ 死ぬ迄人を欺く女、焦熱地獄へ往つたてあらう、彼女を殺したは拙者
ぢやわい

エミ さて、天使のやうな夫人の御心算、それに引かへ御前様は悪鬼

羅刹

オセ 淫奔者となり果て、不義の密通を致した奴

エミ さういふ御前様こそ夫人に、無き名を負はする魔か鬼か

オセ 彼奴は水性の浮気女

エミ 浮気ぢやなど、あの神々しい程、操正しい夫人を、仰せある御前様
は、短慮一徹の火性男

オセ 彼奴カッシオが自由になつたは事實、イアゴーに問うて見るがよい、
然るべき理由もなく、かゝる無残の所業に及びしなら、此身は奈落の
底の底に、追墮される法もあれ、イアゴーが一切承知ぢや

エミ あのイアゴーが

オセ 汝の夫イアゴーが

エミ アノ夫人が、不義密通をなされたとやらを

オセ いかにもカッシオ奴と——ハテ彼女が若貞女であつたら、琉璃瑪瑙

の山を築いた、別天地が湧き出るとも、換へ事には致さぬわ

エミ おゝ、イアゴ―殿が

オセ イアゴ―が始めてかくと報告せて呉れしぞ、實に汝が夫は律義一
遍、行爲の端に附着いて居る、塵一片の汚れても、厭はずには居られぬ
男

エミ おゝ、イアゴ―殿が

オセ 幾度それを繰返すぞ、汝が夫のイアゴ―ぢやと確と申すに

エミ おゝ、夫人、戀の弱點につけ入りて、悪奴が書いた一狂言、あのイアゴ
―が、夫人が不義したなどゝ

オセ さうぢや、汝の夫のイアゴ―が――コレ了解たか女、拙者が忠
友、汝が夫、正直な、イアゴ―がぢや

エミ 若し左様な事を申したなら、神爵の程も恐ろしい、イアゴ―の魂が、

日に粟粒程づゝ蝕りもせよ、跡方もない讒謗ばかり、でも夫人は御
氣の毒、あのやうに御慕ひなされた殿御といふは、此やうな人、非人

オセ 何と

エミ 何とでも御存分になさりませ、此やうな事をなされるとは、彼のや
うな夫人の、良人とは申されぬ、その通りどうて天へは往かれぬ御身
オセ 黙り居らう、それが汝の身の爲めぢやわ

エミ はて、どのやうな目に遇はうとも、遇はせる貴郎の御力より、堪ゆる
力が大方二倍、ほんに阿呆らしい殿様ぢや、塵芥同然の御身ながら、よ
うして、此やうな大それた――貴郎の刃が、何のどれほど怖からう、一つ
の生命を二十度三十度失しても、面皮を剝がずに措きませうか、あう

誰ぞ助けをく、ムール殿が夫人を殺害致しました、人殺しく

モンタノ、クラチアノ、イアゴ一等登場

モン 何事でムる、コレく大將殿

エミ おゝ良人、イアゴ殿貴郎はまようもく、殺人の大罪を、一身に負はねばならぬやうなことをなされたな

クラ ハテ何事でムる

エミ イアゴ殿貴郎が實の男なら、こゝな悪漢(オセロ)を詮義して下さんせ、此人のいやるには、夫人が不義したと貴郎が告げたとの事なれど、そんな事はよもあるまい、貴郎ぢやとてそんな悪者ではあるまいが、早ういうて見て下され、此胸が張裂くるやうぢやわいな

イア いかにも拙者は、自分の考を申上げた、尤もそれも大將殿が、確かな



ACT V Sc. 2

にぎが製を皮面もてし失度十三度十二を命生のべー「ミエ
」.....をけ助ぎ誰、おのいかうる措

事實と御認めなされたまでの事

エミ それはどうても、夫人が不義したなど、申上たは實かい喃

イア いやる通りぢや

エミ そんなら貴郎は、眞赤な恐ろしい虚言を申上げたのぢや、神かけてそれは虚構ぢや、あのまゝ夫人が、カツシオ殿と不義など、――「カツシオ殿」とは、これも貴郎の告口かいな

イア いかにもカツシオと――ヤイ女、其口は噤んで置け

エミ 此口を噤んでよいものか、喋舌り抜かねば腹がいぬ、御聞下され夫人は、あれなる寢臺の上で、敢ない御最期を成されました

一同 な、何とてゝる

エミ これと申すも、貴郎の虚構から起ったこと

オセ いや方々、其様に驚いて御見詰めなされるな、これは事實でムる

ケラ ハテ奇ツ怪な事實ぢやなア

モン 實に奇、怪至極な所業

エミ こりや的切貴郎の計畧、妾の胸は一杯ぢや、さうぢや、そのやうな臭氣がする、前にもどうやらさう思うた、悲しや事、死にたいわいな

イア 氣が狂うたか、女房、宅へ往けよ、命令けたぞよ

エミ 申し方々、どうぞ御聞き下されませ、良人の命令には従ふ筈でムります、が、只今ばかりはなりません、コレ、イアゴ一殿、妾は宅へは歸りませぬぞへ、大方一生歸りますまい

オセ おゝくくく

と臥床の上に倒れかゝる

エミ 實に匍匐うて吼えるが相應ぢや、世にあのやうにお優しい、節しい

女子がムりませうや、それを殺したオセロ殿

オセ (起上り) いやく彼女は不貞腐れ——おゝ貴殿は(ハ)に向ひア)叔父

御てムたか、姪御のデスデモナは、たつた今此某が兩腕の爲めに息の根を止められて、それそこに死んでムる、いかばかりか此所業は、恐ろしく酷たらしう見ゆるてムらう

ケラ 憐むべし、デスデモナ、想へば汝の父親が歿りたりしは却て幸ひ、娘の縁組が死因となり、嘆きが高じて老躰の脆くも玉の緒を絶たれたが、若し今迄生存へて、此有様を見たならば、憤怒に驅られて罪を作り、よい死にやうはよませまい

オセ それは痛ましい事てムる、乍去イアゴ一も承知の通り、デスデモナ

儀はカッシオと、幾數回不倫の獸行に及び、カッシオ自らも白狀致して
ゐるが、何寄證據は、某が與へし大事の品をば、カッシオに贈りしを
カッシオが所持致す事で、ムリます、乃ち往昔某が父なる者より、母人
に贈りましたる、いはれある手巾で、ムリます

エミ お、神もみそなはせ、そのやうな事であつたのかいな

イア ヤイ、黙り居らう

エミ これが黙って居られませうか、制へて制へ切れぬ、北山嵐の其様に、縦
横無盡に喋って退けう、よしや天も地も、鬼も人も、一緒になつて此妾を罵
らうと、喋りぬかいてなるものかいな

イア ちとたしななで、さ、さ、さと家へ歸れ

エミ いゝや歸りませぬ

とイア、エミを刺さむとする

クラ ヤア女に刃を向るとは

エミ お、阿呆らしいムール殿、今仰有つた手巾こそ、偶然妾が拾うたを、イ
アゴに渡したものと申すは前以て、あんな物を可笑しい程、執心ら
しう盗んでたべと、度々の依頼がありし故

イア えゝこゝな蓮葉女奴が

エミ それを夫人がカッシオに、與へたなどは飛んでもない、妾が拾う
てイアゴに渡したので、ムリますぞへ

イア ヤイ賣女怪しからぬ事を

エミ 申し方々、神かけて虚言では、ムリませぬぞへ、お、慘たらしい、うつ
そり者の大將殿、此の様な鈍物には、あの様なよい夫人も無益な事

オセ さては云はうやうなき大悪人、あゝ、天非時の霹靂を降して此奴を、
懲らすの術はあらざるか、おのれッ

とオセロ、イアゴに走りかゝる、イア、エミを刺して逃れ去る

クラ 其女子は倒れたな、女房を殺した不届奴

エミ 仰の通りでムります、おゝどうぞ妾の屍骸を夫人の御側へお寄せ
下さりませ

クラ 女房を殺して逃げ失せ居ったか

モン げに稀なる大悪人、オセロ殿の手の中より、取上げた此刃之を携へ
て、貴殿は扉の外を御守り下され、たとひ殺すとも逃がさぬやうに、某
はこれより直ちに彼の悪人を追跡致さむ

とモンタノ、クラチアノ退場

オセ 昨日の勇氣も何處へやら、今日は如何なる二才にも、我が腰の物を
取上げらるゝあぢきなさ、さはいへ我が名譽といへる物の、地に落ち
果てた此境界、何事も悔みは致さぬ、成行に任せるばかり

エミ これ申し夫人、想へば先刻の御唱歌は虫の知らせ、お聞えなされま
すか、夫人、あの鶴といふ鳥は、謠ひながら死にやるとか、妾もその摸擬
を致しませう(と謠ひる)

柳々、柳よ歌へ

情知らずのムール殿、夫人は清淨無垢、それで貴郎を慕うてぢや、かう
申すはみんな眞實眞實を申す此身の未來は天國かや、此様に思ふま
ゝを語らひながら、これて妾は死にまする

と息絶ゆる

オセ お、此室にも一腰、太刀を置いた覺えがある。イスパニアの名ある鍛冶が、氷の如き小川の水で、鍛へ上げたる業物が、お、これこゝに――

――いて叔父の君、某はこゝを立出ますぞ

クラ (奥に) 左様な事を致さば命はないぞ、身に寸鐵を帯びざる汝が、何條拙者に敵すべき

オセ 然らば此方へ御入有て、御話し下され、さらば寸鐵を帯びずとも、貴殿を襲ふ覺悟てゐる

クラチアノ再登場

クラ 何事ぢや

オセ 御覽あれ、某は一刀を携へます、此様な業物は何處の勇士の腰の上にも、見らるゝ事では、ムりませぬ、想へば此瘦腕、此一刀、これさへあ

れば、何の貴殿風情の二十三十、推退け、はね退け、通り過ぎるに、手もない事も、ムたが、お、それも甲斐なき高言、まゝならぬは人の運命、今は何事も昔の夢、太刀は佩くとも、御心配には及び申さぬ、今ぞ某が浮世の旅の行留り、浪路の果は是てゐる、ハテ後退なざるには及びぬ事、それは無益の御心配、誰にてもあれ、此胸をたつた一衝き、それてオセロは直ぐだち――さるにても、此オセロが行き處は、お、不運薄命のデスデモナ、白布を欺く其顔色、再び彼の世で、神の法庭に落合ふ時、左様な姿を見せられたら、我が魂は忽ちに天上より轉び落ち、悪魔の餌食となり果てう、して又此冷たさは、其許が凜烈な節操同然――お、憎むべき大悪人――お、汝悪魔、此かう――しい天女の前より、我を奈落へ追墮し、旋風渦中の塵と巻き、沸騰つ硫黄の中にあぶり、火の海

の底の狭間に棄てもせよ、あゝ、デスデモナ、デスデモナ、早や汝は亡人の數に入りつるか

ロドピゴ、モンタノ、カツシオ(轎に昇かれて)及び役人共イアゴーを捕へて引立て登場

ロド あ短慮一徹の不幸者は何處に居るぞ

オセ それはもとオセロと申せし男にて、これ茲に居りまする

ロド あの娘め(オセ)をこゝへ引出せ

オセ おゝ此奴の足には蹄がない、鬼は蹄があると聞いたは架空か、ともかくも摩性の者なら、殺しても死なぬ筈

とイアゴーに斬付ける

ロド それ物共、其刃を奪ひ取れ

イア 傷は負うたれど、命に別條はムりませぬ
オセ それこそ却て拙者が本懐、汝は生かして置きたい奴、死ぬるは幸福と知らざるか

ロド あのやうに、よい仁であつたオセロ殿、悪人の罠に罹つて此始末、ハテ何と申したら宜しからう

イア 何とてもそれは御随意、乍去某は只管名譽を重んずるの心より、斯様な事も致した次第、さら／＼憎惡の念故ではムりませねば、名を重んずる惡黨とも仰せ下さらば、満足にムりまする

ロド これなるイアゴーも、半ば白狀致したが、カツシオの殺害は、貴殿と彼との其中に

オセ 仰の通りでムります

カッ 懐かしの大將殿、某に於ては、御憤怒を蒙るべき、覚えは毛頭ムリませなんだ

オセ それは最早疑ひ申さぬ、幾重にも御容赦あれ、此上の御願には、彼の鬼奴が何故あって、拙者をかゝる毘にかけ、現世當來の苦患を見せむとはなしたるか、熟と糺明致して下され

イア いや何事も御尋ねあるな、御存知ある丈は御存知ぢや、今より某は一言も口はきませぬ

ロフ 祈禱をも捧げぬ覺悟か

ケラ 汝の口を開かする鞭はあるぞよ

オセ いかさまそれは、汝が最上の覺悟であらう(イアゴに)

ロフ オセロ殿、恐らく貴殿は御存知あるまいが、云うて聞かさう、それで

大方了解るてムらう、コレこゝに書面が一通ムる、是は殺されたロ德里ゴ一の衣囊の中にて發見しもの、又こゝにも後一通、此中の一方にカッシオの關殺は、ロ德里ゴ一に依て、執行せらるゝ趣が述べてムる

オセ あゝ惡みても餘りある

カッ 鬼のやうな大惡人

ロフ さてこゝにも又一通、同じく彼が衣囊の中にて得たるもの、此書面の趣は、ロ德里ゴ一が不平たらしく、イアゴ一を呼び迎へむと致せしもの、然るに未だ此書面を發送するに及ばずして、イアゴ一が参り合せ、用向は濟みしものと察せらるゝ

オセ あゝ憎むべき下司下郎、さるにてもカッシオ殿、愚妻が有なりし彼の手巾が、如何にして御手には入りましたぞ

カツ それは、某が居室にて拾ひました、彼自らもたつた、今白狀致してムリ
ますが己の爲めにする目的ありて、わざと落とし置いたとの事てム
りまする

オセ 想へば拙者は、大痴漢

カツ まつたロデリゴーが書面の中には、彼がイアゴーを責めたること、イ
アゴーこそ彼をして、いつぞやの警固の場に、喧嘩を某に買はしめし
事、それ故某は、官職を奪はれしことが申してムります、然るに其ロデ
リゴーは、只今息を吹返し、彼を傷けたるはイアゴーにて、彼をして此
かる所爲をなさしめたるも、イアゴーなりと申しました

ロド 貴殿は是より我等彼方へ同道致さむ、貴殿が職權は取上げました
ぞ、サイブラスの主權者は今よりカツシオ、イアゴーには成るべく長

う酷たらしう、苦め得るの刑あらば、それをば彼に當るてムらう、貴殿
が犯罪は、エニスの朝廷に具申致し、何分の指圖ある迄は、監禁の身と
御覺悟あれ、さらば物共案内致せ

オセ 暫らく、一言申す事がムる、某が國家の爲め從來盡したる功勞
は、方々の知らるゝ所なれば、それは今更申しませぬ、たゞ此の不幸な
る某が行爲を、公文を以て御報告ある時は、何卒實際を御述べ下さり
ませ、悪意を以て事實を曲ぐるなどは、いはてもの事、何事をも包まず
飾らず御陳べ下され、さて某は妻を愛するに賢しからず、愛憐却て度
を失し、容易く嫉妬は起さねど、悪人に計られて、心胸遂に攪亂し、彼の
愚かなる蠻人が、我が部落にも換へ難き、寶玉を、我から抛つやうに、自
ら愛妻を殺害し、泣いた例のない眼なれども、其悲故に、アラビヤの樹

木より樹脂の流るゝそのやうに、涙を注いで居りますると、此様にお記し下されい、其上で彼のシリアなる、アレツポアの市に於て、意地曲悪き土耳其人が、ゼニス人を打擲し、其國家を罵詈雑言せし時、某其土耳其人が、喉首を引提へ、此様に刺殺したと、何卒御報告下さりませ(アレツポアの市にて、基督信者が土耳其人を打つことあれば、其地の法律として、酷刑に處せられしとぞ、されば土耳其人を刺殺す如きは、大勇オセロの如きに酷刑とされば能はず)

と自分の喉を刺貫く

ロド おゝ無残の最期を遂げられたなア

クラ 我等が語り合ひし事も水の泡

オセ 其許を殺す前にも接吻せしが、今とても

とアスマモナの上に倒れかゝりて

接吻しながら死ぬばかりぞや

と息絶ゆる

カツ 及物は持たぬと思ひたりやこそ、さもなくば、氣丈者のオセロ殿、かやうの事もあらうと思つたに

ロド (イアゴーに向ひ) おゝ汝狗狼人の世の煩惱餓鬼、天地を呑む海よりも、莽狂なる汝イアゴー、臥床の上の凄惨き、あの有様を熟と見よ、是もみんな汝が業、見るも眼の痛むばかり、物共早う取片付けよ——グラチアノ殿、貴殿は此家を押收し、ムールルの財産を相續なされい、デスデモナ殿の血縁に依り、是は貴殿の権利でムる——又此島の總督殿には、凶漢イアゴーが所謂をなされませ、刑の選擇時と處とは貴殿の随意でムる、たゞ存分になされませい——某はこれより出發、本國政府へ此慘

事を泣くく報道致すでムらう

こ一同退場幕

オセロの悲劇終

明治三十九年十月十五日	明治三十九年九月十五日	明治三十九年六月十五日	明治三十九年五月廿八日	明治三十九年五月廿五日
版	版	版	再發行	發行

沙翁全集



著作者

發行兼印刷者

オセロ

定價金八拾五錢

戶澤正保
淺野和三郎

大日本圖書株式會社

代表者 宮川保全
專務取締役

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
大日本圖書株式會社支社

發賣元

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

北海道 村上商店、川南、既文會、二堂、富貴堂、東洋府 地球堂、森江、森江分店、實文館、杉本、文林堂、水野、東京堂、林平、丸善、青野、中西屋、杉村、有隣堂、中央堂、松島、大倉、金剛、北隆館、三友、播磨屋、内田、東洋堂、文會堂、池田、其明堂、二松堂、嵩山房、山岸、弘集堂、田沼、丸屋、正心堂、新潟縣 高桑、高橋、覺張、野鳥、西村、中山、萬松堂支店、北光社、目黒、山本、柿村、越佐同盟書館、埼玉縣 水野、いろは堂、尙古堂、群馬縣 櫻平堂、淨觀堂、木田、千葉縣 多田屋、茨城縣 伊沼、明文堂、川又、大塚屋、寺田、南龍堂、高木、宮田、栃木縣 内山、永樂屋、平石、青木、愛知縣 川瀬、永東、靜岡縣 吉見、谷崎屋、古澤、三原屋、大石、山梨縣 柳正堂、岐阜縣 郁文堂、郁文堂支店、住、長野縣 日新堂、水琴堂、小林、朝陽館、西澤、西澤支店、盛文堂、丸山、宮城縣 藤崎、松榮堂、福島縣 虎屋、關文堂、上野屋、盛平屋、文澤堂、佐藤、近藤、文明堂、青森縣 青霞堂、今泉、今泉支店、伊吉、山形縣 盛文堂、日向、牧野、相原、八文字屋、秋田縣 曙堂、東海林、藤嶋、大澤、富山縣 中田、學海堂、京都府 若林、文澤堂、松田、南波、大阪府 中村、岡島、金川、中川、柳原、小谷、松村、開盛館、實文館、前川、丸善、田中、三宅、石田、北村、本田、中井、竹内、兵庫縣 熊谷、石田、福浦、竹内、木村、樂師寺、西村、中井、長崎縣 庚興號、集英堂、三重縣 安屋、奈良縣 文進堂、文進堂支店、歎傷館、滋賀縣 廣田、澤、福井縣 品川、中村、石川縣 宇都宮、近田、鳥取縣 徳岡、今井、久松堂、安達、島根縣 大塚、川岡、板倉、岡山縣 武内、廣島縣 積善館、芸香堂、原田、山口縣 含英堂、梅龍堂、日新堂、超世館、和歌山縣 平安堂、徳島縣 靜壽堂、香川縣 開益堂、開文會、龜友堂、愛媛縣 向井、土肥、足立、高知縣 富士越、福岡縣 元野木、積善館、博文社、金文堂、大分縣 甲斐、野依、梅津、中園、佐野、佐賀縣 牧川、汲古堂、熊本縣 長崎、宮崎縣 修進堂、谷、鹿児島縣 吉田、金光堂、沖繩縣 豐見城、小澤、新高堂。

岡上製

明治三十三年六月十四日

沙翁全集は抄撰に非ず、概観に非ず、忠實と親切とを旨としたる完全譯なり、文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即是なり

沙翁全集

文藝學士 淺野馮 虛澤姑射共譯

全部三十七卷、每卷列約四百頁、數ヶ月毎に一卷宛、刊行の豫定なり

明治卅九年十一月以後に於て發刊すべきもの左の如し

大日本圖書株式會社

第一卷 哈美ム 姑射譯 定價八拾五錢 郵稅拾錢
第二卷 romeo エンドヂュリ エット 姑射譯 定價八拾錢 郵稅拾錢
第三卷 ヴェニス の 商人 馮虛譯 定價八拾錢 郵稅拾錢
第四卷 王子 姑射譯 定價八拾五錢 郵稅拾錢
第五卷 王 姑射譯 近

定期刊行

帝國文學	丁酉倫理講演集	教育研究
每月發行 十日發行	每月發行 十日發行	每月發行 十日發行
定價金拾五錢 郵稅壹錢	定價金拾貳錢 郵稅壹錢	定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘



好評五版
文學士 片山正雄著
男女と天才
美裝一冊(定價六拾五錢)
郵稅拾錢

士井晚翠著
東海游子
好評
定價壹圓
極美裝
全一冊
郵稅八錢
中村不折畫
再版

帝國文學會編纂

百號紀念	新紀年	懸賞小說と講演	文豪小泉八雲	創刊十週年紀念號	第二時シルレル紀念號
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
定價金參拾錢 郵稅壹錢五厘	定價金參拾錢 郵稅壹錢五厘	定價金貳拾錢 郵稅壹錢	定價金貳拾錢 郵稅壹錢	定價金四拾五錢 郵稅壹錢	定價金參拾錢 郵稅壹錢

大日本圖書株式會社

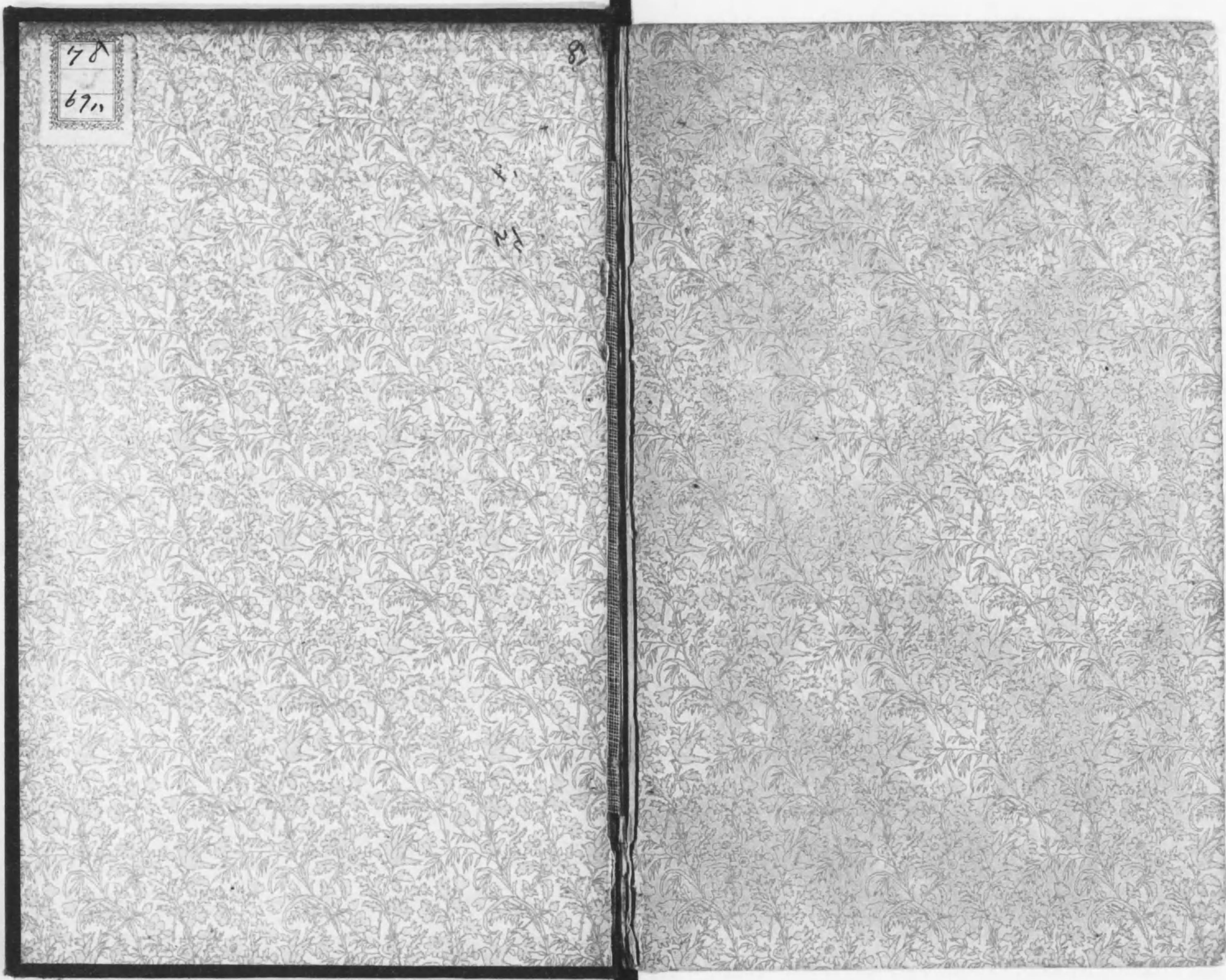
78

6711

89

1

2



終